[illegible]人。

よ-そ-ぎ[方形](名) 方形なる物の四方の面。

よ-そ[祭](名) ❶よそなること。よそなること。❷ものごとをよそなること。❸一つに集まること。❹ものごとを「一世一代」。❺「よそなる」の略。

(よ-そ-い)[餘生](名) のこりのいのち。(餘命)

(よ-そ-ぎ)[餘儀](名) ありあまること。

よ-そ-か-ら-ず[等閑](他サ下二) ❶たいせつにしないさま。❷なおざりなること。

{よそ-ぎ}[他](名) 「よそなる」の略。

(よ-そ-ぎ)[餘石](名) 「ひとよ」(酒名)に同じ。

よ-そ-ぎ[等米](名) 「よそなる」の略。——ぎ-こ[等米細工](名) 種々の材をはめ合せて種々の形をつくる細工。

よ-そ-い[等米](自カ変) ❶よそなること。❷ものごとをよそなること。❸「よそなる」の略。

よ-そ-え[餘剰](名) 【數】二個以上の數を加へ合はせて得る數。加算。

よ-そ-ぎ[等所](名) ものごとをよそなる場所。【語】語・言語・言葉等をよそなる今語。

(よ-そ-ぢ)[餘齒](名) かれはて歯。

(よ-そ-ぢ)[餘司](名) 【數】三角函數を見よ。

よ-そ-ぢ[餘錢](名) 「よそなる」の略。本の外に本をよそなる錢。餘に餘(よ)る錢(ぜに)。(余錢)

よ-そ-ぢ-ば[等閑](名) ものを訂正するための一つ。

よ-そ-て[等手](名) 敵なる味方。

よ-そ-ば[等場](名) ❶ものごとをよそなる。❷禁三時代に、敵味の四人を集めて囲碁をしたる間。

{よ-そ-ば-しら}[等柱](名) 馬をよそなる柱。(馬柱)

[illegible]人。

よ-そ-ぶみ[等文](名) 人によそなる文書。等書。

よ-そ-ぶや[等宮](名) 小社を一つによそなる社。

よ-そ-め[他式](名) よそうち。

(よ-そ-ん)[餘剰](名) あちらかたの剰餘なること。

(よ-そ-ん)[餘生](名) 「よそなる」(餘生)に同じ。

よ-そ[餘所](名) ❶はか。他所。❷敵なる所。敵方。❸ものごとをよそなること。——に[illegible]ものごとに直接なる面なし。

よ-そ[四十](數) 十の四倍。四十。

{よ-そ-い-ぎ}[餘所行](名) ❶餘所へ出行くこと。❷餘所へ出行くときの衣服。

よ-そ-お-ん-り[餘所語](名) 己れに直接の関係なきはなし。「ご」

よ-そ-お-ま-し[餘所](形シク) よそよそ。

よ-そ-ぎ-ま[餘所間](名) ひとをよそる外間。

(よ-そ-ご)[餘間](名) 餘かましはかること。

(よ-そ-ご)[餘國](名) のこれる國。

よ-そ-ご-と[餘所事](名) 現前の事に関係なき事。又、自分に関係なき事。

よ-そ-じ[四十路](數) 「よそ」に同じ。

よ-そ-ぢ-ば-ら[年餘所](副) ときどきなるに。

{よ-そ-ば}[餘](名) よそよそ。よそはひ。——ご-と[餘言](名) ものごとよそ。

よ-そ-び-と[餘所人](名) はかの人。他人。

よ-そ-ぶ-り[他ラ四] ❶よそはよそ。❷ものごとをよそなる。

よ-そ-ぶ-り[他ラ下二] ❶よそよそ。❷「よそ」の略。❸よそよそ。

{よ-そ-く-ま}(他) 「よそよそ」の略。

よ-そ-ば-か[餘所外](名) はかの所。他所。

{よ-そ-ば-ま-し}[形シク] よそはひ(間柄)はしく交際のかるし。

よ-そ-ば-ば[餘](名) ❶よそはよそ。よそはよそ。❷交際の間柄。「一を解く」。

よ-そ-ば-ぶ[他ハ四] ❶客様をよそ。❷交際をよそ。❸つけかまる。飾りて美しくす。❹中に入れかへ。つめこむ。

よ-そ-ま[餘所目](名) ❶他人を見ること。よそみ。❷他人の見る所。

{よ-そ-ま-ま}[餘所](名) 餘所なる所。

よ-そ-め[餘所目](名) ❶面にてみること。(傍目)。❷ものをにらむ。

よ-そ-よ-そ-し[餘所餘所](形シク) ❶餘所餘所に見てかまひつけず。❷試みて見たしかまず。くたびかまし。

よ-そ-よ-そ-に[餘所餘所](副) ❶餘所餘所に見て。❷うとうとしく。

{よ-そ-ろ}[寄](他) ものをよそる。よそよ。

(よ-そ-ち)[餘蔵](名) こちの。そちの。

よ-ち-ち[夜道](名) 夜の道。

(よ-ち-ち)[餘蔵](名) のこりの蔵。

よ-ち-ち-か[夜蔵](名) ❶(軍)夜間に陣を進めて敵陣に近づき、敵の不意に乗じて襲撃する。(夜襲)。❷夜間に敵陣に近づき、敵の動静を探ること。(偵察)。❸夜間に敵陣にあり、往来の動静を探る。——ぞく[夜蔵盗賊](名) 夜間に至りて衣上をうばひ盗る。「賊」。

(よ-ち-く)[餘蔵](名) 後に残れる財産。生産。

{よ-ち-ち-し}[細長](形シク) 細々し。物々

しく。

よ-ち-ち[終夜](名・副) よもすがら。

——ぢ-ゆ[終夜通](名) 【語】よもすがら。

よ-ち-ち[夜立](名) 夜中に出立すること。「鶴」。

(よ-ち-ち)[夜鶴](名) ❶四立ちと鶴ふと。「鶴一の」。❷ものごとをよそなること。

よ-ち-ち-ま[終立](自ハ四)「いたづら」の略。

よ-ち-ち-ま-ま(名・副) 足許の定まらざるさまにいふ。

よ-ち-ち-り[蹴](名) 衣服に同じ。「語」。

よ-ち-ま-ま[蹴](名) 口中より流れ出る言葉。——ぶ-ま[蹴物](名) 小豆の固(ゆ)の下に沸かして麦の粉をかきまぜる粥。——ぶ-り(名) 麦を煮る人。——ぶ-ま-ま 食物を欲しがり又は貧人には与へて足らず。

(よ-ち-ま)[餘蔵](名) はかのはたし。雑蔵。

(よ-ち-ん-ち-ち-ち)[四段活用](名)【文法】動詞の活用型の一。「カ・サ・タ・ハ・ナ・ラ」の六行に限り「ア・イ・ウ・エ」の四列に変(ま)りて活用せらるるもの。「ちち」。

(よ-ち)[餘知](名) かねて知ること。前から知ること。

(よ-ち)[與地](名) 地球全體。全世界。大地。

(よ-ち)[餘地](名) あまれる場所。ゆとり。

よ-ち(名) 同じ年頃の民族の群。「族」。

ヨッチ(名) 「ヨートチンキ」に同じ。

よ-ち-か-し[半近](形シク) 半年過し。

{よ-ち-ち-ち}[蹴](他ラ四) ひねりまはす。ねじまはす。よじる。

(よ-ち-ち)[與地圖](名) 全世界の図。

よ-ち-ち-の-ぼ-ち[蹴蹴](自ラ四) ❶よりつきの。つかまりのぼる。❷次第にのぼりあがる。くもがる。

よ-ち-ち[夜中](名) よもすがら。終夜。

よ-ち-ち-り(名・副) 身體をさまざまに曲げる。「なる」。

よ-ち-ち-ま[蹴](他ラ四) ものごとをねじまはす。ひねる。

よ-ち-ち-ま[蹴](自ラ下二) よじりたるやうになる。

よ-ち-ち-ま[蹴](自)「よじる」の略。

よ-ち-ち-ま[蹴](名) 【語】物體の周囲を反對の方向に回轉せしめたるときに生ずる至(し)。

{よ-ち-ち-ま}(自)「よじる」の略。

よ-ち-ち-ま-ま-し[蹴](名) 魚を田に煮しもの。

よ-ち-つ[四](數) 三に一を加へたる數。「四」。

よ-ち-つ[四](名) 昔時の時の名。今の午前午後の十。

よ-ち-つ-ま-ま[蹴](他ナ三) ❶よりつ。すがる。❷よりつの時なる。

よ-つ-あし[四足](名) ❶足の四つあるもの。四足。❷獣。——ぶん[四足門](名) 鳥居を四本用ひたる門。

よ-つ-か[四日](名) ❶月の第四の日。❷四數四つ。

よ-つ-かど[四角](名) ❶四隅のかど。❷四辻。

よ-つ-かは-し[半西](形シク) 半西。

よ-つ-ぎ[半雑](名) ❶業を雑ぐこと。相雑。❷相雑ぎる子。

よ-つ-ご-ろ[半行](自ハ四) ❶世の交際に同じ。❷よこ。よこ。よこ。よこ。

よつ-あし[四目](名) 馬の手足。四つの足の手の白きもの。

よつ-だけ[四竹](名) ❶竹の左を両手にて二枚づつ割り、おろ四つ。(相馬)。❷「よつだけうち」の略。——うち[四竹打](名) 歌に四竹を合して流し行くこと。「歌舞に一のうたの来て」。

よつ-たり[四人](名) 上に同じ。

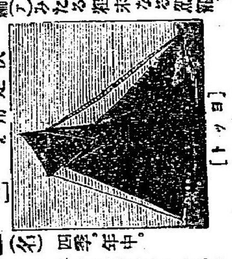
よつ-ち[四乳](名) 獣の胸部の皮の乳の四つある獣を三様模様に張りたるもの。

よつ-つ-じ[四辻](名) 十字なりの街。四つ路と横との路のひきあひたる道。よつじ。(十字街)。

よつ-ご[四竹](接) 「よつご」の音便。

よつ-ご[四手](名) ❶「よつご」が二の略。❷「よつご」の略。——ぶ[四手網](名) 四隅を竹にて張り、水底に沈めて魚を捕る網。(四方網)。——ぶ-ご[四手張籠](名) 竹を四隅の柱とし、竹にて編(ま)みたる粗末なる籠。(籠)。

ヨット[Yacht](名) 軽快なる小船。遊船又は競走に用ひらるる。帆を用ひるものと蒸汽機関を用ひるものとあり。



よつ-の-うみ[四海](名) 上に同じ。

よつ-の-とき[四時](名) 四季。年中。

よつ-の-ふし[四節](名) 古昔道・唐・天竺・朝鮮・日本の分派して成れる仏教。

よつ-の-ま[四緯](名) 經緯の略。

よつ-ば[四足](名) 両手両足を地につけて進むこと。よつんばひ。

{よつ-ば-ら}(名) よつばらふ。又、よつばらひたる人。

ほ[穂](名) ❶ものの先。❷ものの中。❸ものの表。❹ものの上。❺ものの中。❻ものの表。❼ものの上。❽ものの中。❾ものの表。❿ものの上。

ほ[帆](名) 船の帆。

ほ[歩](名) 歩。

ほ[保](名) 保。

ほ[補](名) 補。

ほ[母](名) 母。

ほ[穂](名) 穂。

ほ[帆](名)

よ-つ-ばり[腰小便](名)《夜之屎(ヨツユ)の義》いびたり。

†よっぴいて(副)《よくひきての轉》弓を十分にひき絞りて。

〔よっぴて〕[夜夜](名、副) よもすがら。よどほし。

〔よっぽど〕[餘程](名、副)「よほどの轉」。

よつ-み[四身](名) 袵(ヒモ)を本載(ホンザイ)のみごろよりとる衣服の裁方。七八歳より十三四歳までのもの、著るもの。

よつ-め[四目](名) ㊀四個の目。㊁方形を四つ並べたる模。——**がうあみ**[四目格子](名) 方形の目あるやうにつくりたる格子。——**がき**[四目垣](名) 方形の目を立て、編(ア)みたる垣。——**きり**[四目錐](名) 刃に四稜ある錐。——**にふだう**[四目入道](名) 四つ目ありといふ入道姿の怪物。——**むすび**[四目結](名) 紐の結方、四目あるやうに結ぶもの。

よ-づめ[夜詰](名) 夜の番。

よ-つゆ[夜露](名) 夜にもく露。

†よって[因](接)「よりて」の略言。

〔よってい〕[豫定](名) 豫め定むること。かねてのきめ。

〔よってい〕[豫程](名) 豫め定めたる仕事又は行程。

よ-てん[四天](名)[俳]貫藻宗にて用ふる短かき眼、腰の邊にて四つに裂けたるもの。

よ-ど[淀](名) 流水のよどみたる處。(澱)。

よ-どぎ[夜伽](名) 夜中の伽。(待夜)。

〔よ-どく〕[餘德](名) のこれる恩德。宏大なる恩德。

〔よ-とく〕[餘得](名) のこれるまうけ。まうけ。

†よ-どこ[夜床](名) 夜いぬる床。ふしど。

†よ-どの[夜殿](名) 寢所。

よ-どほし(オシ)[夜通](名、副) くれより よあけまで。よどおう。よもすがら。よひとよ。(通夜、徹夜)。

よどみ[淀澱](名) ㊀よどむこと。㊁よどみたる場所。よど。「—に浮ぶうたかた」。

よど-む(マ)[淀澱](自、ま四) ㊀水底にとゞまりたまる。たゝふ。㊁水底にとゞまりたまる。㊂澱滯す。おぶる。

よ-なか[夜中](名) 夜のなかばごろ。(夜半)。

よ-なが[夜長](名) 夜の長きこと。

よ-なき[夜啼](名) 小兒などの夜啼くこと。

よな-ぐ(ナゲ)[淘](他、か下二) ㊀米を水に淘(ユ)りてとぐ。㊁水に入れて細かき物を淘(ユ)り分く。㊂惡しきをすて、善きを取る。

〔よ-なげる〕(他)「よなぐ」の訛。

〔よ-なふ〕[豫納](名) 以前にをさめおくこと。

よ-なべ(名)《夜延の義》夜の仕事。(夜作)。

よ-なほし(ナオシ)[世直](名) 世のさまのあしくなりたるをよきさまに返すこと。

よ-なみ[世並](名) 世の中のさま。

よ-なむし[米蟲](名) 米の蟲。

よ-なよな[夜夜](副) よる〳〵。毎晩。(毎夜)。

よ-ならひ(ライ)[世慣](名) 世の中のならひ。

よ-なる(レ)[世馴](自、ら下二) ㊀世の中に馴る。㊁男女なれ親たしむ。

〔よ-なれる〕(自) 前條の訛。

〔よ-なん〕[餘難](名) 重(ヂ)なる難儀に隨伴して生じたるなんぎ。のこりのなんぎ。又、あとのなんぎ。

よ-にげ[夜逃](名) 夜中ひそかに逃亡すること。

†よ-に(副) ㊀ことの外に。實に。㊁かならず。きっと。

よ-にな-く[世無](副) 世に比すべきものなく、「かしづき開え給ふ」。

(よ-にん[餘人](名)「よじん」に同じ。

よね[米](名) ㊀こめ。㊁遊女。(元祿頃の語)。「かくしー」。

よね-ざは(ワサ)[米澤](名)「よねざはつむぎ」の略言。——**つむぎ**[米澤紬](名) 羽前國米澤地方より産出する紬。

よね-マンヂユウ[米饅頭](名) 餡を包みたる米の餅、圓くして、兩端尖りたるもの。

(よ-ねん[餘年](名) 老いさき短きこと。

(よ-ねん[餘念](名) ほかのおもひ。(他念)。「く」。

よ-の-ねぼえ[世覺](名) 世間の評判。「—めでたし」。

よ-の-ねもし[世鎭](名) 天下を治め安んずる地位。又其地位にある人。

よ-の-かため[世固](名) 前條に同じ。

よ-の-さが[世性](名) 世のならはし。

よ-の-ちり[世塵](名) 世の中のうるさき事。

よ-の-つね[世常](名) 世間なみ。尋常。普通。

よ-の-なか[世中](名) ㊀人類の社會。世間。㊁よゝろ。

†よ-の-ねがひ(ガヒ)[長願](名) 長壽の人。

よ-の-ブトン[四幅布團](名) 布四幅にて仕立てたる布團。

よ-の-まぎれに[夜紛](副) 夜の暗くして物の區別のつかぬに乘じて。

よ-の-めもねず[夜目不寐](副) よどほしいねずに。

(よ-は[餘波](名) ㊀とばしり。㊁なごり。

†よ-は[夜半](名) よる。よ。(夜)。

†よ-は[世](名) とし。よはひ。

(よ-はう(ワウ)[豫報](名) 或物事の到來せざる以前の報知「天氣—」。

†よ-はう(ワウ)[四方](名) ㊀東西南北、ちこう。㊁四方。

(よ-ばう(ボウ)[豫防](名) 其物事の到來せざる以前に防ぐこと。「傳染病の—」。

(よ-ばう(ボウ)[輿望](名) 世間の人望。

(よ-はく[餘白](名) 文字を書きたる紙の餘りのまだ書かざるにある所。空白。

よ-ばは-ねる(レ)(自、ら下二) 世間に遠ざかる。俗に遠ざかる。「世離」。

〔よ-ばは-れる(レ)(自、ら下二) 世間に遠ざかる。俗に遠ざかる。

よ-ばは-る(ワバ)[齡](名) ㊀人生の年を經(ヘ)て行く程。とし。年齡。齒。㊁くむこと。ならぶこと。「—せず」。

よ-ばひ(イバ)[夜這](名) 夜間に男が女の寢間に忍び入ること。

†よ-ばひ(ヨバ)[婚](名) 男女の間を通ずること。よばふこと。——**ぼし**[婚星](名) 流星。

よ-ば-ふ(ヨボ)[喚](他、は四) よぶ。さけぶ。

†よ-ば-ふ(ヨバ)[婚](自、は四) 男女間を通ず。

よ-ばん[夜番](名) よまはり。やばん。

よ-ひ(ヨイ)[宵](名) 夜のいまだ更(フケ)ざる頃。初夜。

〔よ-ひ[醉](名)「よひの訛。

よ-び[呼](名) よぶこと。

(よ-び[豫備](名) ㊀豫めのそなへ。かねての支度。㊁[法]犯罪に必要なる準備行爲。㊂「よびえき」又は「よび(い)」の略言。

よび-いだ-す(ダシ)[呼出](他、さ四) ㊀めしだす。㊁まれき出す。

よび-いる(レ)[呼入](他、ら下二) 呼びて內に入らしむ。內へまれき入る。

〔よびいれる(他) 前條の訛。

(よび-えき[豫備役](名) 常備兵役の一、現役を終(ヲ)へたるもの、服するものにして、陸軍にては四年、四個月海軍にては三個年とす。「ひて呼ぶ」。

よび-か-く(カケ)[呼掛](他、か下二) 聲をかけて呼ぶ。

〔よびかける(他) 前條の訛。

よび-かへ-す(エス)[呼返](他、さ四) まねき「きか(す。

(よび-きん[豫備金](名) ㊀臨時費用の豫備とする金。㊁第一豫備金・第二豫備金の稱。

(よび-ぐん[豫備軍](名) 豫備兵を以て組織した軍隊。「金」。

よび-こし(ヨイ)[宵越](名) 一夜を經(フ)ること。「—の

よび-こ-む(ヨビコメ)[呼込](他、ま下二) 呼びて中に入らしむ。

よび-ごゑ[呼聲](名) ㊀呼ぶ聲。㊁きこえ。うはさ。評判。「—高し」。

よび-ま-はらひにん(ハラヒ)[豫備支拂人](名)[法]手形の支拂人が支拂又は引受を拒みたる場合に、これに代はりて支拂又は引受をなす人。

よび-すて[呼捨](名) 殿・樣・君などの敬語を添へず、姓名のみを呼ぶこと。

よび-だし[呼出](名) ㊀よびだすこと。㊁よびだしやうこの略言。——**だしやう**(ジヨウ)[呼出狀](名) 其人を呼出すための文書。めしぶみ。

と[呼出奴](名) 相撲場にて、東西の力士の名を呼びて土俵に上らしむるもの。「て呼ぶ」。

よび-た-つ(テテツ)[呼立](他、た下二) 大聲に〳〵呼びよせること。

よび-たて[呼立](名) ㊀よびたつること。「—る(他)「よびたつ」の訛。

よび-づき(ヅキ)[宵月](名) よひの間のみ影見ゆる月。——**よ**[宵月夜](名) 宵月の夜。

よび-つぎ[呼接](名)「よせつぎ」に同じ。

よび-つ-く(クケ)[呼附](他、か下二) ㊀呼びて來らす。㊁常に呼び馴る。

よび-つ-ぐ(ガ)[呼次](他、か四) つぎ〳〵に相傳へて呼ぶ。

よびつけ[呼附](名) よびつくること。——**る**(他)「よびつくの訛。

〔よび-っぱり(ヨ)[宵張](名) 夜ながく起き居る性し。(終夜)。

よび-ひ-と(ヨ)[夜一夜](名、副) よもすがら。よどほし。

よび-さ-ゐる(ヒ)[呼取](他、ら四) よびよす。

よび-ね[呼名](名) つねにとなふる名。

よび-ね(ヨイ)[宵寢](名) 宵よりねむること。又、宵の間だけねむること。

よび-の-みやうぞう(ヨイ—ミヨウ)[宵明星](名)[天]金星が日沒後西天に輝くときの稱。金星は太陽に近きが故に、其太陽より東にあるときは即ち宵明星となる。

(よび-び[豫備費](名) 豫備金に同じ。

(よび-へい[豫備兵](名) 豫備兵役の兵士。

†よび-まどひ(ヨイ)[宵惑](名) 宵に、はやくまどろむこと。

よび-むか-ふ(カフ)[呼迎](他、は下二) よびて迎へ入る。まねく。

〔よび-むかへる(他)「よびむかふ」の訛。

よび-もの[呼物](名) 評判せらるゝもの。

(よび-やう(ヨビ)[餘病](名) もとの病のほかの病。

よび-やみ(ヨイ)[宵闇](名) ゆふやみ。「氣」。

よび-よ-ふ(ヨバ)[呼寄](他、さ下二) 呼びて來らしむ。

よび-よせ[呼寄](名) よびよすること。——**る**(他)「よびよすの訛。

よび-よひ(ヨイ)[宵宵](名、副) 宵ごとに、毎宵。「錢、

よび-りン[呼鈴](名) 人を呼びよすために鳴らす

†古語　〰俚語方言　〇字音

よるの—よるも

よるの（副）ようやく。**よるの生活**（名）夜の生活。**よるの海**（名）夜の海。**よるの海岸**（名）夜の海岸。**よるの海の**（連語）夜の海の。**よるの海の静かさ**（連語）夜の海の静かさ。**よるの海の静かさは**（連語）夜の海の静かさは。**よるの海の静かさは格別**（連語）夜の海の静かさは格別。**よるの海の静かさは格別だ**（連語）夜の海の静かさは格別だ。**よるの海の静かさは格別だった**（連語）夜の海の静かさは格別だった。**よるの海の静かさは格別だったが**（連語）夜の海の静かさは格別だったが。**よるの海の静かさは格別だったが、**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、**よるの海の静かさは格別だったが、波**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波。**よるの海の静かさは格別だったが、波の**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと**（連語）夜の海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ。**よるの海の静かさは格別だったが、波の音も、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくり

よりあつま・る[寄集](自、ら四) こゝかしこより来りあつまる。

よりあは・す[ワス][とどこほらせる](他、さ下二)[縒合](他、さ下二) よりて合はす。

〔**よりあはせる**(他) 前條の訛。

よりあひ[イヲ][寄合](名) ㊀よりあふこと。集會。㊁徳川時代に、三千石以上の旗下の士の稱。

よりあ・ふ[ウヲ][寄合](自、は四) よりあつまる。集會す。

よりうど[寄人](名) 古昔、記錄所などにて事を執りし職。現今、御歌所にて事を執る職。きにん。

よりかかり[凭掛](名) ㊀よりかゝること。又、よりかゝるもの。㊁きよくろく。

よりかか・る[ラリ][凭掛](自、ら四) 身體をもたせかく。もたれかゝる。

よりき[寄木](名) 流れ寄りたる材木。

よりき[ヨリ][與力](名) ㊀加勢すること。助力。㊁助力のために附屬する兵士。㊂徳川時代に、奉行の配下にありし役人、同心を指揮せしもの。

よりくぢら[寄鯨](名) 死して海邊へ[ヨリ]ひ寄りたる鯨。

よりくづ[擇屑](名) よきものをよりてあとにのこれるくづ。

よりこのみ[擇好](名) 好む所をよること。

よりす[寄洲](名) 川口に風波のために寄せられて生じたる洲。

よりすが・る[ラリ][寄縋](自、ら四) 身をよせて「よる。」すがる。

よりそ・ふ[ウ][寄添](自、は四) そばへ

よりたちぐ[ガ][寄道具](名) 人を捕縛するための具、即ち十手・刺股の類。

よりつき[寄付](名) ㊀よりつくこと。㊁取引所にて最初の手合。㊂屋敷内に設くる腰掛。

よりつ・く[クヒ][寄着](他、か四) よりそふ。

よりて[因、仍](接) 其ために、其ゆゑに。

よりどころ[據](名) 本とする所。よる所。(根據)。

よりどり[擇取](名) よりどること。(選拔)。

よりど・る[ラリ][擇取](他、ら四) よりて取る。

よりぬき[擇抜](名) よりぬくこと。又、よりぬきたるもの。

よりぬ・く[クヒ][擇抜](他、か四) 中よりよりて拔きとる。

よりば[寄場](名) 人のよりあつまる所。

よりみち[寄路](名) わざ〳〵迂回して行く路。

よりよく[餘力](名) あまるちから。

よりより(副) 時々。をり〳〵。

よりわく[クヒ][擇分](他、か下二) よりて區別をつく。

〔**よりわける**(他) 前條の訛。

よる[夜](名) 地球の自轉によりて裏面の一部太陽に面せざる間。昼の對。

よ・る[ラリ][縒由、因](自、ら四) ㊀もとづく。たのむ。㊁たがふ。たどる。(從、循)。㊂たよる。たのむ。(託、遷)。㊃もたる。かゝる。(凭、倚)。㊄たゝる。つく。(遷)。

よ・る[ラリ][據](自、ら四) ㊀根本とす。もとゐとす。もとづく。㊁所依とす。たのみとす。㊂拒守す。たてこもる。

よ・る[ラリ][寄](自、ら四) ㊀近づく。ちかよる。㊁路すがら訪ふ。㊂かさなる。つどふ。

よ・る[ラリ][縒](他、ら四) 組みてからみつかす。ねじて卷きまつはらす。「絲を—」。

〔**よ・る**[ラリ][擇](他、ら四) えらぶ。える。えらむ。

++**よる・のおとど**[夜御殿](名) 古昔、禁中清涼殿内の主上の御寢所の稱。

++**よる・のおまし**[夜御座](名) 前條に同じ。

よる・ひる[夜晝](名) よるとひると。

よる・ひる[夜晝](副) よるもひるも。たえず。

よる・べ[寄方](名) たよりとする所。たより。「—もなき流離」。

(**よ・るゐ**[餘類](名) のこりの徒黨。「く。

++**よろ・ける**[ケル][蹣跚](自、か下一) よろめ

(**よ・ろく**[餘祿](名) ㊀のこりのさいはひ。㊁餘分のまうけ。

よろこばし[シク][喜悅](形、二) よろこぶべし。うれし。

よろこび[喜悅](名) ㊀よろこぶこと。㊁よろこぶ意をのぶること。賀。㊂いはひ。ことほぎ。慶、賀。

——**いさむ**[ヒ][喜勇](自、ま四) よろこび勇みたつ。——**なき**[喜泣](名) よろこび極まり泣くこと。うれしなき。

よろこ・ぶ[ビバ][喜悅](自、は四) 嬉しく思ふ。樂しく思ふ。こゝろよく感ず。「し。

++**よろこばし**[シク][喜悅](形、二) よろこば

++**よろこばふ**[ヨロコ][喜悅](自、は四)「よろこぶの延言。

よろ・し[シク][宜](形、二) ㊀可なり、よし。㊁其當を得たり。其度に適せり。

よろしく[宜](副) ㊀すべからく。まさに。(漢文にては「べし」と返し讀む。)㊁ほどよく。よく。

++**よろづ**[針魚](名)[動]「さよりの古言。

よろづ[萬](名) 數の多きこと。

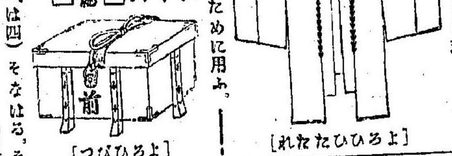
よろづ[萬](副) こと〴〵く。すべて。

よろづ[萬](數) 千の十倍。

よろづ・よ[萬代](名) 永遠。永久。

++**よろひ**[イヲ][具](名) よろふこと。そろひ。

よろひ[イヲ][鎧](名) 昔時、戰爭にて著せし服。もとは革を用ひ後には鐵片を絲にて縅[ヒ]して造れり。又、特に具足・腹卷などに對して、袖・籠手・佩楯等の備はりたる大將の用ふるものをいふ。(甲)。——**きぞめ**[鎧著初](名) 昔時、武家にて男子十四五歲に至りて、初めて鎧を著るときの式。——**ぐき**[鎧草](名)[植]牡丹の異稱。——**づき**[鎧突](名) 隙のなきやうに、鎧をゆりあぐること。——**づくり**[鎧作](名) 鎧をつくる職工。——**どほし**[オシ][鎧通](名) 戰陣にて、太刀・脇差の外、別に佩(オ)ぶる短刀にして、敵と組みあひたるとき、これを刺すために用ふ。——**ひたたれ**[鎧直垂](名) 大將の鎧の下に著る直垂。——**びつ**[鎧櫃](名) よろひを入れおく櫃。——**むし**[甲蟲](名) 昔に堅き甲殼ある蟲の總稱。——**むしや**[鎧武者](名) 甲冑を著ッけたる武者。



[つびひろよ]　[れたたひひろよ]

++**よろ・ふ**[ヨロ][ほへぶ][具](自、は四) そなはる。そろふ。具足す。

よろ・ふ[ヨロ][ほへぶ][鎧](他、は四) 鎧を著る。(甲)。(擬)

よろぼ・ふ[ヨロ][ほへぶ][蹣跚](自、は四) よろ〳〵して歩く。(酔跟)。

よろめ・く[クヒ][蹣跚](自、か四) 足どり亂れてだぢろく。

よろ・よろ[蹣跚](名、副) 足どりのたしかならざるさまにいふ語。彼方により此方によりして歩むさまにいふ語。(酔跟)。

(**よ・ろん**[與論](名) 世上一般の論。「ぼり。

よわ・どし[弱腰](名) 腰の左右の細き處。あばら

よわ・き[弱](名) よわきさま。又、よわきさま。

よわ・し[シク][弱](形、二) 破れ易し。切れ易し。保ち難し。すこやかならず。ゆゑっかりせず。強からず。

++**よ・わたらひ**[ワイヲ][世渡](名) よわたり。

よ・わたり[世渡](名) 世をわたり行くこと。生活を立つること。くちすぎ。よすぎ。(生計、送生)。

++**よ・わたる**[ラリ][夜渡](自、ら四) よるわたる。夜間に過ぎ行く。「一月」。

よわみ[弱](名) ㊀よわるとき。よわる所。㊁主張し得ざる點。弱點。「いふ語。

よわ・ミソ[弱味噌](名) 弱きものをの、しりていふ語。

よわ・む[ヨワ][弱](他、ま下二) よわくす。よわらす。

(**よわ・むし**[弱蟲](名) よわき人をの、しりていふ語。

よわめ[弱目](名)「よわりめに同じ。

よわ・よわ・し[シクしく][弱弱](形、二) いとよわしく見ゆ。

よわり[弱](名) よわること。

よわりめ[弱目](名) よわりたるとき。——**に**[ヨワ][ラリ][餘威](名) 不運に不運を重ねて、仕合のいとあしきにいふ語。

よわ・る[ラリ][弱](自、ら四) ㊀よわくなる。おとろふ。㊁困却す。こまる。

++**よる**[夜居](名) 夜起き居ること。

(**よる**[餘威](名) あまれる威光。

よるん[餘韻](名) ㊀殘るひゞき。㊁のこるあぢはひ。

よ・ぞ・とめて(副) 夜の未だ明けやらぬに。

よ・ぞ・ひ・に・つぎて[夜日繼](副) 晝夜の別なく續行して。

++**よ・ぞり**[節折](名) 古昔、六月(ミナ)天祓のときに行はれし公事。(命婦)竹を以て主上の御長(ケ)其他處々の寸法をとり、宮主に切りあてがはせて御祓をつとめしめしと。

(**よ・ぞろ**[國](名)「よぼろに同じ。

(**よんどころ・な・し**[シクしく][據無](形、二)《より どころなし》の音便》止むを得ず。餘儀なし。

よんべ[昨夜](名)《よべ》の音便》さやく。

ら

ら 流音R 即ち舌端を硬口蓋の前端上齒の背部に近づけ深き有聲の氣息を通じて發する音と、母音あとの羅音。

(**ら**[羅](名) ㊀うすぎぬ。うすもの。うすはた。㊁とりあみ。あみ。

(**ら**[騾](名)[動]騾馬と馬との間(ア)の子、體軀小なれど體格強健にして効用馬に劣らず且つ粗食に堪ず。「す語。「我—」。

(ア)ふる性あり。

—ら[等][接尾] 或語に添へて、其物事の複數を示す。

++**—ら**[接尾] 語末に添ふる意味無き語。「ものさびしーに」。「戀しーに」。

ラーケン(名)《オランダ語 laken》羅紗の類。

ひらがな（名）[平假名] 平仮名。

ひらがな（名）[平假名] 平仮名。

ひらがな（名）[平假名] 平仮名。

ならす【均す】（他五）平らにする。「地面を―・して家を建てる」

ならす【慣らす】（他五）慣れさせる。「子を―・して夜道を歩かせる」

ならす【鳴らす】（他五）音を出す。「ベルを―・して合図する」

ならす【馴らす】（他五）動物を飼いならす。「子馬を―・して乗る」

ならす【成らす】（他五）実を結ばせる。「木に実を―・す」

ならす【生らす】（他五）実を結ばせる。「木に実を―・す」

ならす【平す】（他五）平らにする。「地面を―・して家を建てる」

ひらがな—ひらがな

ひらがな—ひらがな

ひらがな—ひらがな

ひらがな—ひらがな

ひらがな（名）漢字を使わないで、ひらがなだけで書く文。

ラムネ [国語] (名) ❶ 十六世紀末の頃、英国の海賊が、スペイン船の積荷を奪ったもの。❷ 海賊が、略奪した財産。

ラムネ-ラ [国語] (名) 海賊。

ラムプ [洋語 Lamp] (名) 火をともす器具。電灯。

ラムプ-シェード [洋語] (名) 火をともす器具の周囲に覆いをかけたもの。

ラムプ-ブラック [洋語] (名) 油煙。

ラムプ-ブラック [洋語] (名) 油煙。

ラムプ-ブラック [洋語] (名) 油煙

りょうがえ

——[名] 【貸借対照表の両側に記載される項目】 ⓐ 貸方に記載される項目。

りょうがく

——[名] 【料理】 料理の味。 ⓐ 料理の味。

りょうがく

——[名] 【料理】 料理の味。

りょうがく

——[名] 【料理】 料理の味。

りょうがく

——[名] 【料理】

りくぐん—りくぐん

陸軍（名）[陸戦隊]（名）海軍陸戦隊に同じ。

りくぐんしょう（陸軍省）（名）[陸生]（名）陸上に住むこと。

りくぐんだいしょう（陸軍大将）（名）陸上に住む哺乳類の総称。

りくぐんだいしょう（陸軍大将）（名）[陸戦]（名）陸上での戦闘。

りくぐんだいしょう（陸軍大将）（名）[陸上]（名）[陸相]（名）陸上の長官。

りくぐんだいしょう（陸軍大将）（名）[陸上]（名）[陸軍]（名）陸上の軍隊

りなお—りなお

りなお（りなお・りなお）[名]〔法令〕〔利子〕❶法律などによって、債務を負わせること。❷裁判官がへべった。

りなおす（りなお・りなおす）[他五]〔法律〕〔利子〕❶法律などによって、債務を負わせる

りがい【利害】(名)ためになることと害になること。「―を考える」

りがい【理解】(名)ものごとの意味をさとること。「―が早い」

りがい【離散】(名)はなれてばらばらになること。「―する」

りがい【離婚】(名)夫婦の関係を解消すること。「―を申し出る」

りがい【離別】(名)はなれること。「―の悲しみ」

りがい【罹患】(名)(医)病気にかかること。「―率」

りがい【理会】(名)(古)理解すること。「―しがたき問題」

りがい【利益】(名)(経)資本を投じて得る収益。「―を上げる」

りがい【利害】(名)(経)利益と損害。「―を考える」

りがい【理解】(名)(哲)ある事物の意味を知ること。「―する」

りがい【理会】(名)(古)理解すること。「―しがたき問題」

りがい【利害】(名)ためになることと害になること。「―を考える」

りがい【理解】(名)ものごとの意味をさとること。「―が早い」

りがい【離散】(名)はなれてばらばらになること。「―する」

りがい【離婚】(名)夫婦の関係を解消すること。「―を申し出る」

りがい【離別】(名)はなれること。「―の悲しみ」

りがい【罹患】(名)(医)病気にかかること。「―率」

りがい【理会】(名)(古)理解すること。「―しがたき問題」

りがい【利益】(名)(経)資本を投じて得る収益。「―を上げる

りゃくーりゃく

りゃくりゃくしゃ

りゃくりゃくしゃ

**りゃくりゃくしゃ

りゅうがしま　竜ヶ島　（地）大分県佐伯市の海岸。

りゅうがしゃ　竜ヶ社　（名）竜の住む社。

りゅうがしゅ　竜ヶ首　（名）竜の首。

りゅうがしゅ　竜ヶ主　（名）竜の主。

りゅうがしゅ　竜ヶ種　（名）竜の種。

りゅうがしゅ　竜ヶ種　（名）竜の種。

りゅうがしゅ　竜ヶ種　（名）竜の種

より特定の人に對して、其海外への旅行を免許し又は北旅行につきて、其費分を證明するために交付する文書。

(りよ-かう)[ヨウ]**[閭巷]**(名) さとのちまた。

(りよ-かく)[旅客](名) たびゞと。

(りよ-きやく)[旅客](名) 前條に同じ。

(りよく-いん)[綠陰](名) 青葉の陰(カゲ)。

(りよく-ぐう)[旅寓](名) たびのやどり。

(りよく-えき)[力役](名) はれをるかせぎ、あらゆることゞ。力作。

(りよく-えふ)[ヨウ]**[綠葉]**(名) みどりの葉。

(りよく-がく)[力學](名)【理】物理學の一部分にして、物體の運動・靜止並に力の作用及エネルギーに就きて論ずるもの。りきがく。

りよく-かう[リヨウ]**[力行]**(名) 努力してなすこと。つとめて行ふこと。

(りよく-がん)[綠岩](名) 閃綠岩、輝綠岩の總稱。

(りよく-がん)[綠眼](名) みどりいろのまなこ。

(りよく-きう)[ヰウ]**[綠草]**(名) みどりいろの草。

(りよく-きう)[ヰウ]**[綠藻]**(名)【植】綠色を呈する藻類。あをのり・あをさゞれこれに屬す。

(りよく-きう)[ヰウ]**[力爭]**(名) 努力してあらそふこと。力をつくしていひあらそふこと。

(りよく-ぎゆ)[綠樹](名) 青葉の樹。

(りよく-ぎよく)[力食](名) 力役して生活をたてゆくこと。

(りよく-ぎよく)[綠色](名) みどりのいろ。

(りよく-すゐ)[綠水](名) 綠色をなせる水。

(りよく-せき)[力積](名)【理】力と其力が作用したる時間との相乘積。

(りよく-せん)[力戰](名) 力のあらん限り戰ふこと。

(りよく-ちく)[綠竹](名) あをき竹。

(りよく-てん)[力點](名)【理】槓杆にて物を動かす力のかゝる點。

(りよく-ばん)[綠礬](名)【化】硫酸第一鐵の稱。

(りよく-りん)[綠林](名)《後漢の末多くの亡命者が綠林山にあつまりたるよりいふ》盜賊の異稱。

(りよく-わ)[慮過](名) こしてとはすこと。

(りよく-わい)[慮外](名) ❶おもひがけぬこと。❷ぶをつけ。無禮・狼藉「—もの」。

(りよく-わく)[礫獲](名) いけどると。

(りよく-わち)[慮過池](名) 水道などの水を濾過するため特別の裝置をなして水をたゝへたる所。

(りよく-わん)[旅館](名) はたごや。やどや。

(りよ-けん)[旅券](名) ❶旅先通行の手形。❷旅行免狀。

(りよ-さう)[ヲウ]**[旅裝]**(名) 旅行のよそはひ。たびすがたく。

(りよ-ぢ)[旅次](名) たびのやどり。

(りよ-ぢう)[閭囚](名) とらはれ。とりこ。

(りよ-ぢや)[旅舍](名) はたごや。やどや。

(りよ-ぢやく)[旅宿](名) やど。やどや。はたごや。

(りよ-じん)[旅人](名) たびゞと。旅客。

(りよ-ぢん)[旅團](名) 陸軍の編制上の名、二個聯隊より組織せらるゝもの。——**ぐんいぶ**[旅團司令部](名) 旅團長が其事務を取扱ふ所。——**ぢやう**[ヨウ]**[旅團長]**(名) 旅團の長官、部下の聯隊を統率し旅團の訓練に任ずるもの。

(りよ-ぢう)[倡優](名) ともゞ。ともがら。

(りよ-ちゆう)[旅中](名) 旅行の中。

(りよ-てい)[旅亭](名) はたごや。やどや。

(りよ-てい)[旅程](名) 旅行の路のり。

(りよ-てん)[旅店](名) はたごや。(旅宿)。

(りよ-ねう)[旅囊](名) 旅路に携帶するふくろ。

(りよ-はく)[旅泊](名) やどり。やど。

(りよ-はん)[侶伴](名) とも。なかま。

(りよ-ひ)[旅費](名) 旅行の入費。路用。ろぎん。

(りよ-より)[旅用](名) 前條に同じ。

(りよ-り)[閭里](名) むら。さと。

(りよ-りよく)[膂力](名) 身體の力。又、うでの力。

(りら-く)[羅落](名) まがき。かき。

(りら-く)[里落](名) さと。むら。

(りり-し)[しくしき]**[律律]**(形シク) もごそかなり、いかめしいさまし。

(りり-つ)[利率](名) 利息の元金に對する歩合。

(りり-れき)[履歷](名) 人の來歷。——**しよ**[履歷書](名) 其人の履歷をあらはしたる文書。

(りろん)[理論](名) 物事の理を論ずること。實驗又は實行の對。——**か**[理論家](名) よく理論をなす人。理論に長じたる人。——**てんめんがく**[理論天文學](名)【天】天體の位置・星座を定むること、及天體の視運動從て其眞運動又は天體相互の作用等を研究する科學。

(りーあん)[東員](名) くわんゐん。役人。

(りーあん)[梨園](名)《唐玄宗皇帝が俗樂を典る左右の教坊の子弟を梨園に於きし故事に出づ》役者社會、又、劇界。——**ぢてい**[梨園子弟](名) わざをぎ。役者。俳優。

(りん)[燐](名) ❶ゐにびゝ。きつねび。❷【化】淡黃色半透明にして軟かく且つ點火し易き有毒物質、水に溶解せず硫化炭素に溶(トケ)し易し、空氣中にて酸化すれば白煙を生じ、暗所にては綠黃色の光を放つ、發火し易きを以て水中に貯ふ、空氣と絕ちて熱するときは赤褐色の粉末となる、これを赤燐といふ、

これに對し通常の燐は稍や黃色を呈するを以て黃燐といふ、赤燐は毒性なく硫化炭素に溶解せず發火點も高きを以て、空氣中に貯ふるも危險なし。マッチの製造に用ひらる。動物の骨中に存在す。

リン[鈴](名)《字の唐音》❶すゞ。れい。❷小さき鈴の形をなす佛具、あふむけにして小さき棒もて打ち鳴らすもの、きはりにてつくる。❸ベルに同じ。

(りん)[鄰・隣](名) となり。

(りん)[輪](名) ❶車の輪。❷花の大さ。❸圓きもの、かたみ。

(りん)[皿](名)「りんぎ」に同じ。

(りん-い)[淪漪](名) さゞなみ。

(りん-いつ)[鄰佑](名) となり近所にすむ人。

(りん-いふ)[ヲウ]**[鄰邑]**(名) となりむら。「あゆ。

(りん-う)[霖雨](名) 幾日もふりつゞくあめ。ながー

リン-うち[鈴打](名)「リンうちどけい」の略言。——**どけい**[鈴打時計](名) 鈴の時を打つ時計。

(りん-えん)[燐鹽](名)【化】燐酸の「アンモニウム」とナトリウム」との化合物、無色の結晶質粉末、尿を放置するときに生ず。

(りん-か)[隣家](名) となりのいへ。

(りん-かい)[鱗界](名) 魚類。

(りん-かい)[臨界](名) きかひ。きはは。——**あつりよく**[臨界壓力](名)【理】臨界溫度にある氣體を液化するに要する壓力。——**かく**[臨界角](名)【理】光線が投射角より屈折角の大いなる時、屈折光線は二物質の境界に沿ひて出づるに至る、此投射角を臨界角といふ、投射角が臨界角より大いなる時は光線は屈折して出づるとなく全反射をなす。

(りん-かい)[臨界溫度](名)【理】氣體の溫度を上ぐるとき、これを液化せしむるには益々強大の壓力を要す、然るに或溫度を越ゆるときは、如何に強大なる壓力を加ふるも液化すること能はざるに至る、其液化し得ると得ざるとの界の溫度の稱。

(りん-かう)[ヲウ]**[臨幸]**(名) 行幸して其場に臨みたまふこと。「と」

(りん-かう)[ヲウ]**[輪講]**(名) 數人順々に講義すること。

(りん-かう)[ヲウ]**[隣交]**(名) となりとのまじはり。

(りん-かう)[ヲウ]**[隣好]**(名) となりのよしみ。

(りん-がく)[林學](名) 森林の事に就きて研究する學問。「まると。

(りん-かん)[臨監](名) 其場所にのぞみてとりさ

(りん-かん)[臨瞰](名) 見おろすこと。

(りん-かん)[輪姦](名) 多人數して順々に一人の婦人を強姦すること。

(りん-き)[悋氣](名) 嫉妬に同じ。

(りん-き)[臨機](名) 場合に由りて手段を施すこと。——**おうへん**[臨機應變]

機に臨みてなすこと。——**れ**(名) 機に臨み變に應じて手段を施すこと。

(りん-きやう)[ヰウ]**[隣鄕]**(名) となりむら。

(りん-きやう)[ヨウ]**[隣境]**(名) となりざかひ。

(りん-ぎよ)[臨御](名) 天子の其場に出御あらせちること。

(りん-きん)[鄰近](名) 地の相近きこと。

(りん-きん)[輪囷](名) 高大なること。又は屈曲せるさま。

(りん-きん-ぜい)[皿金稅](名)「りきんぜい」(釐金稅)に同じ。

(りん-くわ)[林檎](名)【植】薔薇科に屬する木、寒地に適す、葉は楕圓形にして鋸齒を有す、花は五瓣白色にして春の末に開く、果實は圓形にして食用に供せらる。——**ざん**[林檎酸](名)【化】未熟の梅・桃・林檎等の果實中に存在する二鹽基酸。——

(りん-くわい-せき)[燐灰石](名)【鑛】灰成岩の成分として各地に存在する岩石、種々の結晶形をなし、色もまた一定せず玻璃光澤を有す、硝酸肥料の主要なる原料なり。

(りん-くわう)[ヲウ]**[燐光]**(名) ❶燐の發する光。❷【理】或物體に光を投じたる後、これを暗所に置くときは、物體自身より放つ光燐。「カルシウム」と「バリウム」等の鹽類は燐光を放つものなり。

(りん-くわく)[輪郭](名) ❶めぐりのすぢ。まはり。❷物事の外表のかたち。❸顏だち。姿つき。

(りん-くわ-する-ぞ)[燐化水素](名)【化】無色にして惡臭毒性を有する氣體、空氣に觸れ發火して白煙の輪を生ず。

(りん-くわん)[輪奐](名) 建築物の宏大美麗なること。りつぱなること。

(りん-けい)[鱗莖](名)【植】百合などの如く地下莖の短縮して鱗狀をなすもの。

(りん-げつ)[臨月](名) うみづき。「ると。

(りん-けん)[臨檢](名) 其場所にのぞみて檢査す

(りん-げん)[綸言](名)《禮記の王言如絲其出如綸王言如綸其出如綍の語に出づ》君王の言、みことのり。——**あせのごとし**[綸言如汗][君王の言は出ればとりけし難きを恰も汗の出でゝもとにかへらざるが如し。

(りん-と)[凜乎](名・副)「りんぜん」(凜然)に同じ。

(りん-と)[臨期](名) 其時にのぞむこと。

(りん-と)[林檎](名)【植】薔薇科に屬する木、寒地に適す、葉は楕圓形にして鋸齒を有す、花は五瓣白色にして春の末に開く、果實は圓形にして食用に供せらる。——**ざん**[林檎酸](名)【化】未熟の梅・桃・林檎等の果實中に存在する二鹽基酸。——

ぬにねのぱぴぷぺぽ　なにぬねのばびぶべぼ　たちつてとだぢづでど　さしすせそざじずぜぞ　かきくけこがぎぐげご　あいうえおぁぃぅぇぉ

りんゆ［林檎酒］（名）林檎の果實より製したる一種の酒、少しく酸味を帶ぶ。

（りん-どく［鱗國］（名）となりぐに。

（りん-ぎ［輪座］（名）くるまざ。

（りん-ぎい［輪栽］（名）「りんさく」（輪作）に同じ。

（りん-ぎい［臨濟］（名）「りんざいぜゆう」の略言。

——ぜゆう［臨濟宗］（名）【佛】禪宗の一派、唐の臨濟禪師より始まる、我國には、鎌倉時代に傳來西の傳へたるもの。

（りん-ぎう［輪藏］（名）「てんりんぎう」（輪藏）に同じ。

（りん-さく［輪作］（名）毎年地をかへて作物をつくること。

（りん-さん［燐酸］（名）【化】燐水燐酸を水に溶解してこれを熱するか或は燐を硝酸と共に溶するとき得る酸、結晶體なり。

——カルシウム［燐酸—Calcium phosphate］（名）【化】カルシウムの燐酸鹽、動物の骨の重量の三分の二はこれより成る、又、土壤中に分布せり、肥料又は燐製造の原料に供せらる。

（りん-さん［林産］（名）山林より産出すること、又、其物。

——ぶつ［林産物］（名）山林より産出する物。

（りん-ぜ［綸旨］（名）綸言の旨趣。

（りん-ぜ［綸絲］（名）つりいと。

（りん-ぜ［臨視］（名）其場に至りて視ること。

（りん-ぜ［鱗次］（名）うろこの如くにならびかさなること。

（りん-ぜ［倫次］（名）人倫の順序、みぶんの順序。

（りん-ぜ［臨時］（名）㊀其時に臨みて行ふこと、定時の外なること。㊁一時的なること、かりにすること。——

きゃく［臨時客］（名）招かざるに來れる客。

——くわい［臨時會］（名）臨時に備ふる會。——

きい［臨時祭］（名）「りんぎのまつり」に同じ。

——ぎけん［臨時試驗］（名）定期以外に行ふ試驗。

——そうくわい［臨時總會］（名）定期總會の外に臨時に開く株主總會。

——ちくぞう［臨時築城］（名）戰爭に際し主要地點に臨時にかまへ設くる築城。

——のきゃく［臨時客］（名）㊀りんぎきゃく。㊁＋古言、正月二日三日の間に攝政又は關白が大臣以下の公卿を招きて催し、酒宴。

——のまつり［臨時祭］（名）㊀＋古言、十一月下の酉の日に行はる、山城國加茂神社の祭典、三月中の酉の日に行はれし石清水の祭典、六月十五日に行はれし祇園の祭典の稱。

——ひ［臨時費］（名）臨時に支出する費用。

——やとひ［臨時雇］（名）臨時にやとひ入れたる人。

——るるん［臨時委員］（名）臨時に設けたる委員。

（りん-ぢつ［鄰室］（名）となりのへや。

（りん-ぢつ［鄰疾］（名）りんびやう。

（りん-ぢや［鄰舍］（名）となりのいへ。

（りん-ぢや［臨寫］（名）手本を見てうつすこと。

（りん-ぢや［臨床］（名）病人の床のそばに臨むこと。

——かうぎ［臨床講義］（名）醫學の教師が病人の床のそばに於て其病狀に就きて實際に學生に講義をなすこと。

（りん-ぢやう［倫常］（名）人倫のつねの道。

（りん-ぢゆ［林樹］（名）森林の樹木。

（りん-ぢゆ［臨終］（名）いまは、末期。

（りん-ぢゆ［鱗岫］（名）山のけはしきこと、又、けはしき山。

（りん-ぢよう［林鐘］（名）㊀十二律の一。㊁六月の異稱。

（りん-ぢよく［客邑］（名）過度に物をしみすること、ちはきと、やぶさかなること。

（りん-ぢるる［鱗翅類］（名）【動】昆蟲類の一目、兩對の翅及體軀は粉の如き細鱗を以て覆はる、此種の昆蟲が美麗なる彩色を有するは、此鱗が種々の色を帶ぶるによる、翅は共に三角形にして飛翔の用に供せらる、口部は小顎著しく發達して細長き管狀をなし花蜜を吸ふに適し、不用のときは渦の如く卷き納む、蛾・蝶これに屬す。

（りんズ［綾子］（名）（字の唐音）一種の絹織物、紗綾（ぁや）に似て光澤あり、滑かにして粘氣（ねばり）あるもの。

（りん-せい［輪生］（名）輪狀に生ずること、「の」。

（りん-せい［林政］（名）山林に關する行政。

（りん-せき［臨席］（名）其席に臨むこと、「出席」。

（りん-せき［鄰席］（名）となりの席。

（りん-せき［客惜］（名）ものをしみすること。

（りん-せつ［鄰接］（名）となりつづくこと。

（りん-せん［綸宣］（名）みことのり、りんげん。

（りん-せん［林泉］（名）木立又は泉水のある所。

（りん-せん［臨戰］（名）戰爭にのぞむこと、又、戰場に近接せる地。

——ち［臨戰地］（名）㊀戰場に近接せる地。㊁臨戰地境の區劃內。

——ちきゃう［臨戰地境］（名）【法】戒嚴令によりて臨戰の區域と定められたる地境。「にいふ語」。

（りん-せん［標然］（名、副）ふそれなのゝくさま。

（りん-せん［瀧然］（名、副）㊀戰く身に志ひさまにいふ語。㊁り、しきさまに又はいさましきさまにいふ語。

（りん-そう［林籔］（名）はやしとやぶと、「ふ語」。

（りん-ぞく［鱗族］（名）魚類。

（りん-そん［隣村］（名）となりむら。

リン-ダウ［龍膽］（名）【植】龍膽科に屬する草、葉は卵狀披針形にして竹に似、秋の頃花開く、花は筒狀にして紫色を呈し、頂上若しくは上部の腋に發生す、葉は廣び、夜は縮ひ、觀賞用とし栽培せらる。りんだん。りうたん。たつのいぐさ。にがな。

（りん-たち［輪道］（名）【理】電流の周廻する路、電路。

りん-ため［凪拯］（名）「レイテング」に同じ。

（りん-ち［臨池］（名）（王羲之の故邸に臨ぐ）手習。

（りん-ち［隣地］（名）となりの土地。「習字」。

（りんてい［輪蹄］（名）車のわと馬のひづめと、轉じて、車馬。

（りん-ぢく［輪軸］（名）【理】軸に輪を固定せしめ輪と軸と同時に回轉せしむる裝置、軸にまきたる綱を物體につなぐ、輪にまきたる綱を引きてその物體を上（ぁ）げ或は引くもの、車地・轆轤は此類なり、力點・支點・重點の關係は槓杆に異ならず。

（りん-ぢやう［臨場］（名）其場所にのぞむこと。

（りん-ぢゆう［鱗蟲］（名）鱗ある蟲、即ち蛇など。

（りん-ぢよく［輪直］（名）順番になす當直。

（りん-ぢでふ［臨帖］（名）習字などの手本。

（りん-てん［輪轉］（名）輪狀に回轉すること、——

き［輪轉機］（名）一種の印刷器械、ものに新聞紙雜誌等の印刷に使用せらるゝもの、其構造種々あれど、同時に兩面の印刷又は二色以上の印刷をなし得、且つ刷上（ぁがり）の紙は所要の大いさに折りたたまれて出づ。

（りん-とう［輪燈］（名）佛前に供ふる輪狀の燈。

（りん-どく［輪讀］（名）數人して順番に書を讀むこと。

（りん-ぢく［痳漬］（名）癩病の毒。

リンネル［Linnen］（名）亞麻の纖維にて織りたる一種の布。

（りん-ぢん［淋巴］（名）「りんぱえき」に同じ。

——えき［淋巴液］（名）高等動物體が血液の外に有する無色透明の液、即ち毛細管外に滲出せる血液の殘餘にして、各液に遍在す。

——くわん［淋巴管］（名）淋巴液の循環して再び血液中に返る管。

——せん［淋巴腺］（名）淋巴液の會流する所の腺。

（りん-ぢう［鄰邦］（名）となりのくに。

（りん-ぢう［鄰保］（名）となりきんぢよの人々。

（りん-ぢう［厘秤］（名）「りんだめ」に同じ。

（りん-ぢん［輪番］（名）かはるがはるなること、まはりばん。順番。

（りん-びやう［痳病］（名）生殖器を侵す一種の傳染病、病毒はコノコッケンと稱する黴菌なり、尿道膿爛して、小便に膿交り能く通ぜぬもの。ちぼゆばり。

（りん-ぺん［鱗片］（名）㊀うろこの狀をなす細片。㊁うろこのかけら。㊂うろこの狀をなす細片。

（りん-ぼ［鄰保］（名）「りんぢう」（鄰保）に同じ。

（りん-ぼう［輪鉾］（名）【佛】加持などに用ふる一種の佛具、金銅にて作り、八方に鋒端を出だすもの、もと天竺の兵器なりといふ。

（りん-ぼつ［淪沒］（名）ちぢむと、又、はるぶると。

（りん-ぼん［臨本］（名）習字などの手本。

（りん-むくわん［林務官］（名）大林區署に分屬して事務を取扱ふ高等官。

（りん-めい［綸命］（名）天子のおほせつけ。

（りん-もう［厘毛］（名）わづか。いさゝか。

（りん-らく［淪落］（名）おちぶるゝこと。

（りん-り［淋漓］（名、副）あふれながるゝさまにいふ語。あゆ。ほたゞ。「流血—」。

（りん-り［鄰里］（名）となりのさと。

（りん-り［倫理］（名）㊀人生の道義、道德。㊁「りんりがく」の略言。

——がく［倫理學］（名）【倫】行爲の善惡不正を判定する標準を研究し又は義務道德を論じて道德的性格を完全に發達せしむる方法を講ずる學問。

——てき［倫理的］（形）倫理の法則に從へるにいふ。

（りん-りつ［林立］（名）林中に於ける樹木の如くになちび立つこと。「帆檣—」。

（りん-りん［凜凜］（名、副）㊀鋭き感じの身に染むさまにいふ語、「寒氣—」。㊁いさましきさま又はりゝしきさまにいふ語、「勇氣—」。

（りん-りん［轔轔］（名、副）車のとゞろき行くさまにいふ語。

（りん-れつ［凜烈］（名）寒さの烈しきさまにいふ。

（りん-ろく［林麓］（名）林のふもと。

（りん-ゐ［輪廻］（名）【佛】靈魂は肉體と共に怙死滅亡せず、轉々他の肉體にうつり〳〵て無始無終に生死の境にめぐるといふこと。

（りん-ゐつ［林樾］（名）はやしとなみきと。

る

る 流音R即ち舌の位置を硬口蓋の前端上齒の背部に近づけ強き有聲の氣息を通じて發する音と、母音「う」との綴音。

（る［縷］（名）いとすぢ、いと。

（る［流］（名）「るざい」（流罰）に同じ。

ルービー[Ruby](名)【鑛】鋼玉石の一種、紅色を帶ぶ、瑕疵なきものは寶石として最も珍重せらる。(紅寶石)。

ルーピー[留=Rupee](名)「イギリス領印度の貨幣呼の單位。

ルーブル[留=Ruble](名)「ロシア國の貨幣呼の單位、我國の一圓〇六錢許に當る。

ルウダ[蓽撥草](名)【植】蓼科に屬する草、船來の種にして薯よりなに似、秋の頃、穗を出だす。

ルウフル(名)(オランダ語Rolfe)還き人を呼ぶとき、聲をと、かすために用ふる筒、喇叭に似て長き三尺餘もり。

ルクランシエ-でんち[電池=Leclanche's cell](名)【理】「ガラス」瓶に鹽化アンモニウムの飽溶液を入れ、これに亞鉛棒を立て、又、液中に鉄粉と二酸化マンガンとを混じたる粉末を充(シ)たし、且つ鉄素棒を挿入したる素燒瓶を入れたる電池、鉄素棒を陽極とし、亞鉛棒を陰極とせるもの。

(るーけい[流刑](名)「るざい」流罪」に同じ。

(るーげん[縷言](名)細少の事にまでわたりて說

(るーげん[流言](名)「りうげん」に同じ。「くと、

(るーとう[留紅](名)【植】「るこうきう」の略言。——

あさがほ[留紅朝顏](名)【植】「るこうきう」に同じ。——**きう**[留紅草](名)【植】蓼科に屬する草、莖は羽狀に分裂して裂片は絲狀をなし、花穗は各一個の紅色なる花を咲生す、觀賞用として栽培せらる。(鷺鷥)。

(るーざい[流罪](名)古昔の刑罰、罪人を一定の遠地に送りやりて他所に移るを禁じたりしと、死罪よりは輕く徒罪よりは重きもの、越前・安藝に流すを近流といひ、信濃・伊豫に流すを中流といひ、伊豆・安房・常陸・佐渡・隱岐・土佐に流すを遠流といひたり。德川時代に至りては新に遠島の刑を設けたり。

(るーま[優指](名)ゆびを折りてかぞふること。

ルシヰナブツ[盧遮那佛](名)【佛】ビルシャナブツに同じ。

(るーまゆつ[縷述](名)委細にわたりてのべること。

(るーまん[優人](名)せむし。

(るーす[留守](名)㊀天子の行幸中、宮を守る官人。㊁主人の他行中、其家を守ること。又、其人。㊂他行中にて宅にゐぬこと。不在。——**とと**[留守事](名)留守してゐる間になす事。——**ばん**[留守番](名)主人の他行中其家を守りゐる人。——**ゐ**(名)留守居。(名)㊀前條に同じ。㊁晉時、武家の居城又は邸宅を留守せし役。㊂特に德川時代に、大小名の在國中其江戸の屋敷を守りし役、幕府の公用にあたり、又は諸家の交際にあたりし一種の外交官の如きもの。

ルヴン[呂宋](名)呂宋國より渡來せる陶器。

(るーちゆう[流注](名)「りうつう」に同じ。

(るーつう[流通](名)「りうつう」に同じ。

るーつぼ[坩堝](名)金屬を鑄(ト)かす器、土を以てつくり固く燒きたるもの。

ルテニウム[Ruthenium](名)【化】硬(カタ)くして脆く稀有なる金屬。

(るーてん[流轉](名)㊀「りうてん」に同じ。㊁【佛】因果の相續きてはまりなきこと。——**りんね**[流轉輪廻](名)【佛】衆生が无明の惑ひのために生死を出離し得ざる狀態の永續すること。

(るーにん[流人](名)流罪に處せられたる人。

ルビヂウム[Rubidium](名)【化】軟き銀白色の稀なる金屬。

(るーふ[流布](名)ながれ行くこと。世に弘まること。りうふ。

るーまた[又](名)國字の傍の名、鍛・鞭などの右方にある殳の字の稱。

(るーらう[流浪](名)さまよふこと。さすらふこと。——**にん**[流浪人](名)さすらふ人。

ルーリ[瑠璃](名)(梵語Vaidurya)㊀【佛】七寶の一、紺色なるもの。㊁るりいろの略言。——**いろ**[瑠璃色](名)紫色に似たる紺色。——**くわうにようらい**[瑠璃光如來](名)【佛】藥師の一名。——**てり**[瑠璃光](名)【佛】

[うてリル]

(るーる[縷縷](名、副)こまごまし、しく說くさまにい

(るーる[壘](名)こまる。とりて。「ふ語。

(るーる[誄](名)人の死を里(ト)ひて其生前の功德をたゝへのぶること。

(るーる[類](名)㊀たぐひ。ゐゆる。㊁ともがら。なかま。㊂やから。ろから。㊃ゐな。わかち。㊄こ「かゝりあひ。

と。ことがら。

(るーる[累](名)㊀かさなり。かさね。㊁わづらひ。

(るーるえふ[累葉](名)㊀代々。世々。

(るーるえん[類緣](名)㊀いちぞく。ゐんるゐ。㊁

(るーるか[累加](名)かさなりくはゝること、又、かさねくはふること。

(るーるか[類歌](名)同種類のうた。

(るーるかん[涙眼](名)涙をうかべたること。

(るーるき[類規](名)同じたぐひの法規。

(るーるきふ[累及](名)わづらひのおよぶこと。

(るーく[類句](名)同一部類に屬する歌句を集めたるもの。

(るーくわ[類火](名)るるせう。ともやけ。

(るーくわ[類化](名)「どうくわ」に同じ。

(るーけい[累計](名)合はせての計算。

(るーげつ[累月](名)月をかさぬること。

(るーど[類語](名)同種類のことば。

(るーざ[累坐](名)かゝりあひ、まきぞへ。

(るーさい[累歲](名)年をかさぬること。

(るーさい[壘砦](名)とりで。ごぢる。

(るーさく[累算](名)合はせての計算。「むと。

(るーさん[類纂](名)同種類のものをあつめ編

(るーし[誄詩](名)死者を弔(ト)ひ其生前の功德をたゝへのぶる詩。

(るーし[累次](名)かさなりつゞくこと。

(るーし[類字](名)によりたる字。

(るーし[類似](名)によること。にかよふこと。——**しやう**[類似症](名)或病氣に類似したる病氣。

(るーしう[累囚](名)とらはれ。

(るーしぞく[類氏族](名)親戚。

(るーしつ[累日](名)日をかさぬること。「と。

(るーしふ[類集](名)同種類のもの、あつまること。

(るーしやう[類症](名)るるおそやう。

(るーしやく[羸弱](名)よわきこと。

(るーしゆ[類聚](名)同じ類の事を集むること。

(るーしよ[類書](名)同じ類の書、又、其をあつめたるもの。「はすと、

(るーそ[累祖](名)代々の祖先。

(るーそう[羸瘦](名)やせおとろへること。

(るーぞく[類族](名)やから。ゐんるゐ。

(るーだい[累代](名)代々、世々。

(るーだい[類題](名)歌を其題によりて聚(ア)めたるもの。又、同種類の問題。

(るーどう[類同](名)によること。おなじきこと。

(るーねん[累年](名)年をかさぬること。

(るーはい[羸憊](名)おとろへつかれゝこと。

(るーはい[累拜](名)ゐきりに官職を拜すること。

(るーはう[壘堡](名)とりで。ごぢる。

(るーひ[類比](名)㊀たぐひ。くらべ。㊁くらべ

あはせ。てらしあはせ。「に同じ。

(るーびやう[類病](名)「るるおそう」類症

(るーぶん[誄文](名)人の死を里(ト)て其生前の功德をのぶる文。

(るーへい[羸兵](名)よわき兵士、つかれたる兵次第にすゝひのぼること。——**ぜい**[累進稅](名)資財額の多くなるに從ひて稅率の高くなる租稅。

るるす[類](自サ變)㊀に同じ。㊁十となみ。ぶたがふ。

(るーする[類推](名)異なるものゝ類似せる點によりて推論すること。

(るーせい[累世](名)代々。世々。

(るーせう[類燒](名)他家の火災の延(ヒ)いて共に家やけうすること。

(るーせき[累積](名)かさなりつもること。又、かさねつむこと。

(るーせつ[累絏](名)なはめ、いましめ。「一の、むこと。

(るーせん[累遷](名)ゐきりに官職ののぼりすること。

(るーへき[壘壁](名)とりでのかべ。

(るーべつ[類別](名)部類によりて區別すること。

(るーやく[類藥](名)類似の處方によりて調剤したる藥。

(るーらう[羸老](名)よわりとしよること。

(るーらん[累卵](名)積み重ねたる卵の義、危きまにたとへていふ語。

(るーるる[累累](名、副)重なりあひたるさまにいふ語。

(るーるる[藥藥](名、副)うなだるゝさまにいふ語。

(るーれい[類例](名)おなじ例證。

(るーれき[類歷](名)身體の組織及機器に類狀を形成するもの、多く頸邊に其の存在を見る。ぐりぐ。

れ

れ 流音R。即ち舌を硬口蓋の前端上齒の背部に近づけ強き有聲の氣息を通じて發する音と、母音「え」との總稱。

レース[Lace](名)半毛又は絲などにて透くやうに織りたる織物、帽子・衣服其他裝飾などに用ふ。

レース[Race](名)徒步競走。

(れい[禮](名)㊀人生の通行すべき敬意にもとづきたる行爲上のさだめ。のり。ゐや。㊁敬意を表する設備。ぎしき。㊂敬意を表する贈物。れいもつ。㊃敬意を表する拜禮。おがみ。㊄かたじけなき意をのぶること。謝辭。

(れい)[靈](名)一なきたま。幽靈。二たましひ。靈魂。三かみ。鬼神。四くしび。神妙。五あきらか。精明。六いきはひ。威光。「君の—により」。七たふとき。神聖。「—像」。

(れい)[鈴](名)すず。「鐸—」。

(れい)[令](名)一いひつけ。おほせ。二のり。命令。三縣の長官。四よきこと。すぐれたること。

(れい)[例](名)一ためし。典故。二ならはし。習慣。三よきたり。慣例。四ひきごと。引例。五平常の通りなること。「—の如く」。

(れい)[隷](名)一つきたがふもの。部屬。二おもむ。つかひをとこ。三れいたよ[隷書]の略言。

(れい)[零](名)一數の無きこと。數學にては「0」の記號を用ふ。「—點」。二はした。「斷簡—墨」。

(れい)[令愛](名)むすめご。令嬢。

(れい)[靈異](名)不思議なること。くしきこと。

(れい)[禮意](名)禮をなすこゝろ。

(れい)[冷雨](名)つめたきあめ。

(れい)[靈液](名)くしき液。

(れい)[麗](名)うるはしくつや〳〵しき「こと。

(れい)[麗](名)ねぢひらくこと。

(れい)[勵行](名)はげみおこなふこと。

(れい)[厲行](名)きびしく行ふこと。

(れい)[例格](名)きまり。さだめ。

(れい)[禮樂](名)禮と樂と。轉じて、行爲をとゝの(心神をやはらぐる諸種のをしへの稱。

(れい)[伶樂](名)伶人の奏する音樂。

(れい)[禮方](名)諸禮の法式。

(れい)[靈感](名)神佛の靈妙なる感應。

(れい)[冷汗](名)ひやあせ。

(れい)[冷寒](名)つめたきこゝろ。

(れい)[冷氣](名)ひやゝかなる氣候。又、ひやゝかなる空氣。「き氣」。

(れい)[癘氣](名)熱病などを惹さしむるあしき氣。

(れい)[癘鬼](名)やくびやうがみ。

(れい)[例規](名)先例とする規則。

(れい)[禮儀](名)禮ののり。禮の方。

(れい)[令儀](名)よきのり。

(れい)[靈柩](名)なきがらを入れたる柩「じ。

(れい)[靈境](名)「れいち[靈地]に同じ。

(れい)[冷却](名)全くひゆること。又、全くひやすこと。

(れい)[囹圄](名)ひとや。らう。

(れい)[厲禁](名)きびしくさしとむること。

(れい)[禮金](名)謝禮としておくる金錢。

(れい)[靈區](名)「れいち[靈地]に同じ。

(れい)[冷遇](名)冷淡なる待遇。そまつなるあつかひ。

(れい)[禮遇](名)一禮儀あつき待遇。二特別の待遇。——**ていき**[禮遇停止](名)禮遇をとゞめらるゝこと。「華族の—」。

(れい)[靈怪](名)くしきこと。あやしきこと。

(れい)[冷灰](名)火氣のうせはてたるもとりたがふこと。「灰」。

(れい)[戾](名)もとりたがふこと。

(れい)[藜藿](名)あかざとまめと。轉じて、粗末なる食物。

(れい)[令閨](名)他人の妻の敬稱。

(れい)[令兄](名)他人の兄の敬稱。

(れい)[令月](名)一萬事をなすによろしき月。二陰曆二月の異稱。

(れい)[冷月](名)陰曆七月の異稱。

(れい)[例月](名)つきなみ。まいげつ。

(れい)[動]**ぶつ**[冷血動物](名)二[動]體溫が外氣の溫度より低き動物。即ち爬蟲類如きのれなり。三[冷酷]なる人をさしていふ語。

(れい)[厲](名)きびしきこと。

(れい)[例言](名)書物の凡例に述ぶる言。

(れい)[靈驗](名)神佛の不思議なる感應。

(れい)[黎元](名)たみ。人民。

(れい)[冷語](名)冷淡なる言。又、冷笑する言。

(れい)[囹圄](名)「れいぎょに同じ。

(れい)[冷酷](名)情愛なきこと。人情なきこと。むごきこと。

(れい)[例刻](名)つねのきまりの時刻。

(れい)[靈魂](名)肉體又は物質より離れて自ら宇宙に存在すと思惟せらるゝ精神若しくは作用の本源。たましひ。——**せつ**[靈魂說](Animism)(名)物質の外に靈魂の存在するとを認容する說。又、現象界に於ける一切の事物は靈魂の作用に外ならずといふ說。——**ふめつせつ**[靈魂不滅說](名)肉體は枯死衰滅すとも、靈魂は其肉體を離れて永遠に存在し未來の生活を有すといふ說。

(れい)[零碎](名)はした。こぼれ。「斷片—」。

(れい)[零細](名)いとこまかきこと。

(れい)[例祭](名)きまりのまつり。

(れい)[靈祭](名)みたままつり。法事の對。

(れい)[靈像](名)たふとき像。

(れい)[冷藏庫](名)構內を冷かにしてをさめおく物を腐敗せしめざる裝置の倉庫。

(れい)[麗芝](名)[植]「まんねんだけ」に同じ。

(れい)[荔枝](名)[植]「れい」の無思子科に屬する

(れい)[黎庶](名)あをひとぐさ。人民。

(れい)[隷書](名)漢字の書體。篆書の轉化にして楷書に近きもの。もと隷卽ち賤役者にも書くことを得しめんとの意に出づ。肝陽の創作といひ或は程邈の創作ともいふ。古書には今の楷書をいひ又は八分をもいひたるとあり。

(れい)[例證](名)例を擧げて證明すること。又、證據となる例。

(れい)[令色](名)こびへつらひてつくりかざる顏つき。

(れい)[麗色](名)顏色をはげますこと。ごそかなる顏色をなすこと。

(れい)[隷屬](名)「れいぞくに同じ。

(れい)[伶人](名)音樂を奏する人。雅樂を奏する人。がくにん。樂人。

[れいれん]

(れい)[麗人](名)みめうるはしき人。美人。令人。

れい・すせしすせする。[令](他サ變)一命を下す。命をつたがふ。

れい・すせしすせする。[隷](自サ變)從屬す。つく。ま傳ふ。二まうしつく。いひつく。

(れい)・すする[冷水](名)つめたきみづ。ひやみづ。——**まさつ**[冷水摩擦](名)冷水に浸(ひた)したる手拭を以て皮膚を拭ひ、後よく摩擦すること。床後これを行へば大いに衛生に効ありといふ。——**よく**[冷水浴](名)衛生のため、起床後などに冷水をあぶること。「さし。

(れい)・ずる[靈瑞](名)くしきしるし。

(れい)・せい[厲聲](名)聲をあらゝぐること。

(れい)・せい[冷靜](名)物事にあわてさわぐこと。あちつきてまづかなること。

(れい)・せい[令嬢](名)他人のむこの敬稱。

(れい)・せい[勵精](名)精神をはげましつとむること。勇氣をふるひはげますこと。(二精)。

(れい)・せう[冷笑](名)一にがわらひすること。二あざわらふこと。

(れい)・せつ[禮節](名)禮儀。

(れい)・せん[冷泉](名)つめたき礦泉。「語。

(れい)・せん[冷然](名副)冷淡なるさまにいふ

(れい)・せん[靈前](名)一死人の靈を祀(まつ)りたるところ。二かみのみまへ。

(れい)・そく[令息](名)他人の子息の敬稱。

(れい)・そく[斟測](名)(かきの發音)にて海水をはかる義)小さき了見にて大いなる物事をはかることにいふ語。

(れい)・ぞく[隷屬](名)一他人の支配に屬すること。二てまた。支配下。

(れい)・そん[令孫](名)他人の孫の敬稱。「ま」。

(れい)・たい[靈臺](名)こゝろ。精神。「—を煩はす」。

(れい)・たい[冷帶](名)寒帶(二)に同じ。

(れい)・たい[冷待](名)「れいぐう[冷遇]に同じ。

(れい)・たい[禮待](名)「れいぐう[禮遇]に同じ。

(れい)・だい[例題](名)練習のための問題。

(れい)・だい[禮代](名)ねやまろ。

(れい)・だい[靈代](名)死者の靈のきるしとして祭るもの。

(れい)・だう[令堂](名)他人の家の敬稱。

(れい)・だう[厲道](名)ひちにもとること。

(れい)・ちく[麗澤](名)《易に出づ》學友の互に相切磋すること。

（れい・たん［冷淡］（名）㊀雅心ならぬと。心にかけぬと。㊁同情なきと。か（り）みざると。

（れい・ち［靈地］（名）靈現あらたかなる地。又、單に、神社・佛閣などある地。

（れい・ちゃう［靈長］（名）最もたふとき唯一のかしら。「人は萬物の—」。

（れい・ぢゃう［靈場］（名）「れいち」「靈地」に同じ。

（れい・ぢゃう［令孃］（名）他人の娘の敬稱。

（れい・ぢゃう［靈杖］（名）あかさのつゑ。

（れい・ちゃう［靈寵］（名）神佛などのとほときめぐみ。「天の—により」。

（れい・てい［令弟］（名）他人の弟の敬稱。

（れい・てい［零丁］（名）おちぶるゝこと。

（れい・てい［伶仃］（名）たよりなきこと。

（れい・てう［靈鳥］（名）くしきとり。

（れい・てん［禮典］（名）禮のさだめ、又、禮のことを出るせる出よもつ。

（れい・てん［例典］（名）さだめ。きめ。

（れい・てん［零點］（名）㊀點數の皆無なること。㊁攝氏及列氏寒暖計にて氷點の稱。寒暖計の條を見よ。

レイテング［理等具］（名）（孚の唐音）寒暖計などの如き甚だ小なる量をはかる器（ハカ）。

レイデン・びん［—瓶＝Leyden jar］（名）【理】蓄電器の一。「ガラス」瓶の內外を底より頸部に至るまで錫箔にて貼（ハ）り、瓶の栓を貫きたる金屬棒の下端に鏈（クサリ）を垂（タル）し內箔に觸れしめたるものにして、金屬棒の上端は電氣の漏洩を減ずるため球狀をなす。外箔を地に落（ア）ざ金屬棒を起電機に落ざ

［レイデンびん］

て電氣を送るときは、外箔には感應により異名の電氣現はるゝを以て、內外相寄制し多量の電氣を集むるとを得。

（れい・ど［禮度］（名）のり。

（れい・ど［零度］（名）度を起算するはじめの度。「寒暖計の—」「經線の—」。

（れい・とく［靈德］（名）靈妙なる德。

（れい・とく［令德］（名）よき德。

（れい・ねつ［冷熱］（名）㊀ひやゝかなるとあつきと。㊁冷淡と熱心と。

（れい・ねん［例年］（名）とし〳〵。としなみ。毎年。「毎歲」。

（れい・ば［冷罵］（名）あざわらひのゝしること。

（れい・ば［靈牌］（名）死者の諡を記して祀（マツ）る木牌。位牌。「靈位」。

（れい・はい［禮拜］（名）敬意を表して拜すること。——だう［—堂］（名）宗教上の客體を祀拜するために設けたる堂。

（れい・ばい［零賣］（名）こうり。

（れい・ばう［禮貌］（名）禮儀たゞしきさま。敬意を表するために發がむと。

（れい・ばう［禮砲］（名）敬意を表するために發する大砲。

（れい・ばう［令望］（名）よきはまれ。

（れい・ばう［禮帽］（名）禮服着用のときに被る帽子。「隱語」。

（れい・はう・みち［禮寶道］（名）酒を飲むとの隱語。

（れい・はふ［禮法］（名）禮ののり。

（れい・はん［令範］（名）よきのり。

（れい・びと［例人］（名）なみのひと。

（れい・ひゃう［冷評］（名）冷語を以て評すること。冷笑して評すること。ひやかすこと、ゝろ。

（れい・ふ［靈府］（名）こゝろ。

（れい・ふ［靈符］（名）たふときおふだ。ごふう。

（れい・ふ［令扶］（名）家令と家扶と。

（れい・ふう［冷風］（名）ひやゝかなる風。

（れい・ふく［禮服］（名）儀式の時に着用する衣服。

（れい・ふぶん［令夫人］（名）貴人の妻の敬稱。又、他人の妻の敬稱。

（れい・ぶん［令聞］（名）よききこえ。はまれ。

（れい・へい［令譽］（名）つかはるゝもの。こもの。

（れい・へい［禮聘］（名）禮を厚くしてまねくこと。

（れい・へい［例幣］（名）朝廷より毎年の例として、神に幣帛を奉らるゝこと。——し［—使］（名）「例幣使」の「し」。幣帛を奉らるゝ勅使。

（れい・へう［落標］（名）みをつくし。みをおろあたまや。靈屋。

（れい・べう［靈廟］（名）【動】「おやかうねこ」の

（れい・べう［靈猫］（名）【動】ゆしつかひの男。「一名。

（れい・ぼく［隷僕］（名）「おんぼく」神木」に同じ。

（れい・ぼく［靈木］（名）「おんぼく」神木」に同じ。

（れい・まい［令妹］（名）他人の妹の敬稱。

（れい・まうり［禮參］（名）神佛などに念願成就の謝禮としてまうづること。「さ。

（れい・みん［黎民］（名）天下の萬民。あをひとぐ

（れい・む［靈夢］（名）神佛の示現ありたるくしき。

（れいめい［令名］（名）よき名聲。はまれ。「譽。

（れい・めい［黎明］（名）あけがた。

（れい・めう［靈妙］（名）不可思議にしてたゝなること。くしきこと。

（れい・もつ［禮物］（名）謝禮のおくりもの。

（れい・やう［羚羊］（名）【動】「かもしか」に同じ。——かく［—角］（名）羚羊の角。藥用とす。

（れい・もつ［禮物］（名）禮意を表するためのおくりもの。おくりもの。

（れい・やく［靈藥］（名）効驗のいちじるしき藥劑。「良劑」。

（れい・よ［令譽］（名）よきはまれ。

（れい・よ［零餘］（名）あまり。はした。——ものし［零餘子］（名）むかご。ぬかご。

（れい・よう［麗容］（名）うるはしきみめかたち。

（れい・よう［禮容］（名）禮儀たゞしきかはかたち。

（れい・らく［醴酪］（名）あまざけ。

（れい・らく［零落］（名）おちぶるゝこと。落魄。

（れい・り［怜悧］（名）かしこきこと。さかしきこと。「いふ語。こう。「利口智」。

（れい・れい［冷冷］（名、副）ひやゝかなるさまに。

（れい・れい・と［麗麗］（副）人の目に立つやうに。うちゝかに。あきらかに。

（れい・ろう［玲瓏］（名、副）玉（ギヨク）はしくてりかゞやくさまにいふ語。

（れい・をく［靈屋］（名）みたまや。

（れう［寮］（名）㊀古昔、官の被官のつかさの稱。「玄蕃—」。㊁學生の寄宿所。㊂ずきや。かこひ。㊃悲もやまさ。べっさう。

（れう［僚］（名）㊀つかさ。官吏。㊁同役。

（れう［料］（名）㊀所用の品。用品。「食—」。㊁給與の物。あてがひ。㊂製造の材。ざい。㊃代金。代價。

（れう・いう［僚友］（名）同役のとも。

（れう・かい［了解］（名）さとること。會得すること。

（れう・かく［了覺］（名）前條に同じ。

（れう・くわ［燎火］（名）にはび。かゞりび。

（れう・くわ［蓼花］（名）たでのはな。

（れう・くわく［寥廓］（名）ひっそりとしてひろく大いなること。

（れう・くわん［僚官］（名）㊀つかさびと。役人。㊁同役の官吏。

（れう・けん［料簡］（了簡）（名）㊀かんがへ。思案。㊁こゝろ。所存。㊂ゆるすこと。宥恕。

（れう・ど［了悟］（名）さとること。

（れう・さ［僚佐］（名）輔佐の役人。

（れう・さ［料紙］（名）所用の紙。

（れう・さ［察試］（名）古昔、大學寮にて行ひし學生の試驗。

（れう・ぢ［聊爾］（名）かりそめ。そゞろ。（卒爾）

（れう・ぢより［了承］（名）のみこむこと。うけたまはること。

（れう・せう［料峭］（名、副）春風の肌に寒く感ずるゝさまにいふ語。

（れう・ぜん［瞭然］（名、副）分明にして疑ひなきさまにいふ語。「一目—」。

（れう・ぜん［了然］（名、副）明かにさとるさまにいふ語。

（れう・そく［料足］（名）代金。

（れう・ぞく［僚屬］（名）おたやく。

（れう・ちく［料地］（名）所用の地。

（れう・ちく［遼東豕］（名）《後漢の朱浮が彭寵に與へたる書に、遼東有豕、生子白頭、異而獻之、行至河東、見群豕皆白といふ語ある に出づ。狹き了見より詩るに足らざる事をほこるとにいふ語。

（れう・ぢ［療治］（名）やまひをなほすこと。「醫療」。

（れう・の・ぬんちゃく［察御馬］（名）天子の御召料の馬。

（れう・はく［僚輩］（名）同役のもの。

（れう・はく［療方］（名）療治のやかた。

（れう・はふ［療法］（名）前條に同じ。

（れう・もん［察門］（名）大學寮の門。

（れう・やう［療養］（名）病氣の保養。

（れう・らい［聊賴］（名）たのみ。たより。ゝると。

（れう・らく［寥落］（名）ものさびしくまばらなこと。

（れう・らん［撩亂］（名）ちらばりみだるゝこと。

（れう・り［料理］（名）㊀はかりをさむること。㊁食物を煮燒きして口に適ふやうにと、のへつくること。又、其人、のへつくりたる隱部。「割烹」。——ぎく［料理菊］（名）【植】菊の一種。花一寸許、料理用に供せらる。——どころ［料理搓］（名）食物の料理をなすと。——ぢゃや［料理茶屋］（名）食物の料理をなし客に供ふるとを業とする家。——にん［料理人］（名）食物の料理を業とするもの。庖人。庖宰。——はふ［料理法］（名）料理の仕方。——ばん［料理番］（名）りやうりにん。——や［料理屋］（名）料理茶屋。「料理」（他ら四）食物の料理をなす。割烹す。

（れう・れう［寥寥］（名、副）ものさびしきさま。

（れう・れう［了了］（名、副）明瞭なるさまにいふ語。

（れう・れう［遼遼］（名、副）はるかなるさまに。

（れう・ぶん［遼遠］（名）とはきと。はるか。

（れき［櫟］（名）こいし。いしくれ。つぶて。

（れき［暦］（名）㊀こよみ。㊁日月星辰の運行。㊂としつき。年月。㊃よはひ。年齡。㊄よ。年代。㊅はりあはせ。運命。㊆日記。

（れき・いう［歷遊］（名）方々をめぐりあそぶこと。

（れき・えふ［歷葉］（名）れきだい。

（れき・かい［歷階］（名）だんだんにのぼり行くこと。

（れき・き［暦紀］（名）としつき。

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの

（れき-くわい）[礫塊]（名）いしくれとつちくれと。
（れき-くわん）[歴官]（名）官職を（來ると。
（れき-さつ）[轢殺]（名）車輪にひかれて死ぬると。
（れき-し）[轢死]（名）車輪にひかれて死ぬると。
（れき-し）[歴史]（名）㊀人世の盛衰興亡の過程を記録せるもの。㊁經歴。——か[歴史家]（名）歴史を研究する人。又、歴史にくはしき人。——てきげんきり[歴史的研究]（名）其物事の盛衰の道理をとりあらべて、これに關する原理を研究すると。——び[歴史美]（名）歴史的事實により惹起せらるゝ美觀。
（れき-おつ）[暦日]（名）㊀こよみにてとなふる日。㊁こよみ。
（れき-おつ）[歴日]（名）ひをふると。
（れき-おゆり[ヨウ]）[歴象]（名）日月運行の象、天文。
（れき-おゆん）[歴巡]（名）方々をめぐると。
（れき-すう）[暦數]（名）㊀日月運行の度をはかりて暦をつくる方法。㊁自然にめぐり來る運命。「天の—」。㊂年齡の數。㊃年代の數。
（れき-せい）[歴世]（名）代々。世々。歴代。累世。
（れき-せい）[瀝青]（名）ちゃん。——せき[瀝青石]（名）[鑛]玻璃質火山岩の脂光を帶ぶるもの。——たん[瀝青炭]（名）[鑛]石炭の一種、炭素を含有する量は無煙炭よりは稍や少なくして漆黑色なり、長き焰を發して燃燒す。
（れき-せん）[歴然]（名、副）分明なるさまにいふ語。著しきさまにいふ語。
（れき-だい）[歴代]（名）代々。歴世。
（れき-てう[ヨウ]）[歴朝]（名）代々の朝廷。
（れき-でん）[歴傳]（名）めぐりつたふると。
（れき-ど）[礫土]（名）小石多き土壌。
（れき-ねん）[歴年]（名）年をふると。
（れき-ねん）[暦年]（名）㊀としつき。㊁よはひ。㊂年代。㊃暦に用ふる一年、陽暦には三百六十五日を以て暦年とし、閏年は三百六十六日とす。
（れき-ばう[ボウ]）[歴訪]（名）方々をおとづるゝと。
（れき-はかせ）[暦博士]（名）古昔の陰陽寮の官、暦の事一切を學りしもの。
（れき-はふ[ホウ]）[暦法]（名）こよみに關する方法。
（れき-らん）[歴覽]（名）すべてをずっとみると。
（れき-らん）[歴亂]（名）花のきゝみだれたると。
（れき-れき）[歴歴]（名）身分の貴き人、又、格式の高き家。
（れき-れき）[歴歴]（名、副）あり〳〵と見ゆるさまにいふ語。あきらかなるさまにいふ語。
レグミン [Regumine]（名）【化】大豆・小豆等に存在して「カセイン」に類する蛋白質、豆腐は即ち苦鹽（ニガリ）を以て「レグミン」を凝結せしめたるもの。
レダマ [連玉]（名）【植】豆科に屬する木、もと舶來種なり、稍に綠色なる細き枝を出だす、蕊は紅、小なり、蝶の頃綠豆（ツル）に似たる黃色の花開く。
（れち）[列]（名）「れつ」に同じ。
（れつ）[列]（名）㊀わかち。くらゐ。㊁ならび。つち。
（れつ）[劣]（名）おとると。つたなきと。にぶきと。よわきと。いやしきと。
（れつ）[烈]（名）㊀はげしきと。㊁いきほひ。功績。㊂わざ。事業。
（れつ-あく）[劣惡]（名）おとりてあしきと。
（れつ-か）[裂罅]（名）さけめ。われめ。「くと。
（れつ-かい）[裂開]（名）さけひらくと。又、さきひらくと。
（れつ-かく）[劣角]（名）[數]其範角の中の小なる角。
（れつ-かせん）[裂無泉]（名）[地]不透水層の上部に裂目あるとき、これに溢（ア）ひて溢（ア）れ出づる水。
（れつ-かん）[烈樂]（名）はげしきまむさ。
（れつ-き）[列記]（名）ならべたるすと。
（れつ-きやう[キヨウ]）[列强]（名）もろ〳〵の強國。
（れつ-きゆうけい）[劣弓形]（名）[數]劣弧にて圓まれたる弓形。
（れつ-くわ）[烈火]（名）はげしく燃（ヤ）りたる火。
（れつ-けん）[列見]（名）古昔、六月及十二月に太政官にて行はれし公事、六位以下の藝能あるものを召し出して其樣子をみられしと。
（れつ-とう）[列侯]（名）もろ〳〵の大名。
（れつ-とく）[列國]（名）もろ〳〵の國。——くわいぎ[列國會議]（名）列國の使臣が會合してなす國際事件。
（れつ-ぎ）[列座]（名）つらなりてすわると。
（れつ-さい）[劣才]（名）おとれる才能。
（れつ-さ）[烈士]（名）節義のいとかたき士。
（れつ-じ）[列次]（名）ついで。又、ならび。「もの。
（れつ-しや）[列車]（名）汽車などのならびつゞけるもの。
（れつ-じやう[ジヨウ]）[劣情]（名）いやしき情慾。
（れつ-しやく）[劣弱]（名）おとりてよわきと。
（れつ-しゆく）[列宿]（名）天空につらなれる星宿。
（れつ-しよ）[列書]（名）つらねかくと。
（れつ-しん）[烈震]（名）[地]家屋を倒し、山岳を崩壞する程度の地震。
（れつ-すう[スウ]）[列]（自、サ變）ならぶ。つらなる。
（れつ-すう[スウ]）[列]（他、サ變）つらぬ。ならぶ。
（れつ-せい）[列聖]（名）代々の天子。
（れつ-せい）[列世]（名）よゝ。代々。
（れつ-せい）[洌清]（名）水のつめたくきよきと。
（れつ-せき）[列席]（名）其席につらなると。

（れつ-そ）[列祖]（名）代々の先祖。
（れつ-そ）[烈祖]（名）大業を開始したる祖先。
（れつ-そつ）[列卒]（名）せと。
（れつ-だい）[列代]（名）だいゞ〳〵。世々。
（れつ-とう[トウ]）[列島]（名）多くならびつゞけるもの。「島。
（れつ-ち）[列置]（名）ならべおくと。
（れつ-ぢよ）[烈女]（名）固く操（サ）を守るをゝしき女。婦人。（烈婦）。
（れつ-でん）[列傳]（名）多くの人の傳記をつらねて記したるもの。
（れつ-と）[劣惡]（名）にぶきと。おとると。
（れつ-とう）[劣等]（名）おなのおとると。
（れつ-ばい）[列排]（名）つらねならぶると。
（れつ-ぱん）[列海]（名）もろ〳〵の藩。
（れつ-ひ）[劣比]（名）[數]前項が後項より小なる比。
（れつ-ぴん）[列品]（名）ならべたるおなな。
（れつ-ぷ）[烈夫]（名）烈士。
（れつ-ぷ）[烈婦]（名）烈女。
（れつ-ぷう）[烈風]（名）㊀はげしき風。㊁[地]猛風。「語。
の大幹を動かす程の風。
（れつ-れつ）[烈烈]（名、副）はげしきさまにいふ語。
（れつ-ゐ）[列位]（名）位置にならびつくと。
レテグ [鑢等具]（名）「レイテング」に同じ。
十れに-し [樞]（名）「れんぎに」に同じ。
（れ-ふ[ヲウ]）[獵]（名）㊀禽獸を追ひとると。かり。㊁誤りて、いさり。——き[獵期]（名）れふをする期間。——く[獵狗]（名）かりに使用するいぬ。
——くわく[獵獲]（名）獵してとると。又、とらへ得ると。——くわん[獵官]（名）多くのものが官職につかんとあちそふと。「運動。——と[獵戸]（名）れふを。——ぶし[獵師]（名）㊀かりうど、獵夫。㊁漁夫。——ぶゆう[獵銃]（名）獵に使用する小銃。——ぶよく[獵色]（名）「ぎよしよく」漁色に同じ。
（れ-ふね）[獵舟]（名）いさりぶね。漁舟。——ば[獵場]（名）かりば。——せん[獵船]（名）れふを。——ぶる[獵夫]（名）すなどりする所。——ふ[獵夫]（名）れふをなす區域。
レモン [檸檬=Lemon]（名）【植】芸香科に屬する木、蕊は蜜柑に類す、果實は楕圓形にして芳香及酸味を有す。（黎檬、利檬）。——ゆ[檸檬油]（名）「レモン」の果實の皮より採取したる油、藥用・飲用に供せらる。——すい[檸檬水]（名）前條に同じ。
（れん[レン]）[連]（名）はすのはな。れんげ。
（れん[レン]）[聯]（名）㊀書畫を記し、柱又は壁などに懸くる細長き板、はしらかくし。㊁漢詩の律の對句、前聯と後聯とあり。
（れん[レン]）[簾]（名）すだれ。みす。
（れん[レン]）[廉]（名）㊀かど。すみ。㊁ひさを。㊂性行の潔白なると。㊃直段のやすきと。「一價。
（れん[レン]）[鬣]（名）㊀くしげ。㊁かうばこ。
（—れん[レン]）[連]（接尾）㊀くみ。仲間。「書生—」。㊁一つゞきに連なりたる物を數ふる語。㊂西洋紙を數ふる語、全紙五百枚を一連とす。（連）。
（れん-あい）[戀愛]（名）男女の間のこひまたふ愛情。こひ。
（れん-い）[戀意]（名）こひまたふこゝろ。
（れん-い）[連漪]（名）さゞなみ。小波。
（れん-いん）[連姻]（名）えんつゞき。
（れん-いん）[連陰]（名）連日のくもり。
（れん-いん）[連印]（名）二名以上のものが、一個の書面に連名にて印を押すと。（連署、連判）。

（れん-う）[連雨]（名）連日よりつゞく雨。
（れん-えん）[連延]（名）つらなりのぶると。
（れん-えん）[瀲灩]（名）波光のたゞよひうごくさま。
（れん-か）[蓮下]（名）天子のおひざもと。「主。
（れん-か）[廉價]（名）ねだんのやすきと。やすね。
（れん-か）[連枷]（名）かちざを。
（れん-が）[連歌]（名）三十一文字の歌の上下二句を二人して詠（ヨ）むと、後には五十韻百韻とつらねて詠むと行はれたり。
（れん-かう[コウ]）[連衡]（名）㊀支那の戰國時代に、張儀が六國を衡（ヨ）につらねて秦に事（カ）へしめんとくはだてし策。㊁轉じて、國際間の同盟。
（れん-がふ[ガウ]）[聯合、連合]（名）二つ以上のものゝくみあふと。又、二つ以上のものをくみあはすと。——かんたい[聯合艦隊]（名）二個以上の艦隊を聯合して編制せる艦隊。——ぐん[聯合軍]（名）二國以上の軍隊を聯合したる軍。——こく[聯合國]（名）二個以上の國が聯合して其上に一の國家を設定せるもの、其各國は主權を有せず。——さいむ[聯合債務]（名）各債務者が各一部分に就きてのみ義務を負ふ債務、故に債權者が一の債務者に對し他の債務者の負擔部分を請求するとを得ず。——ないかく[聯合內閣]（名）一個以上の政黨の黨員によりて成立せる內閣。
（れん-かん）[練簡]（名）ねりてつゞまやかなると。
（れん-ぎ）[連木]（名）すりこぎ。
（れん-きふ[キウ]）[連及]（名）つらなりおよぶと。
（れん-く）[聯句]（名）㊀對句。㊁各人一句づゝつくりたるをあつめて一編となす詩。
（れん-ぐ）[廉隅]（名）㊀かど。すみ。㊁みさを。
（れん-ぐ）[蓮藕]（名）はすの根。れんこん。

はひふへほ　まみむめも　やいゆえよ　らりるれろ　わゐうゑを

（れん-くわ［連火］（名）漢字の下に點の四つ並びたるもの、即ち烈・蒸などの下にある灬の部に屬す。

れん-ぐわ［煉瓦］（名）「れんぐわせきの略言。

——せき［煉瓦石］（名）瓦の一種、普通長き七寸許・幅三寸程、高さ二寸許の長方體をなす、積み重ねて家の外廓を造り又は地に敷きならべなどす、原料は粘土を用ひ其の半分ほどの水を加へて揑ねて十分にかきまぜ、型に入れて形をつくりこれを乾燥せしめて後窯に入れて白熱するまで燒き、一週間程却冷し置きたるもの。——づくり［煉瓦造］（名）家屋などを煉瓦を以てつくること。又、其つくりたるもの。

（れん-くわん［連環］（名）くさり。——ば［連環馬］（名）騎兵の乘馬を互にくさりにてつなぎあはせ一齊に敵陣に突貫するもの。

（れんげ［蓮華］（名）㊀はすのはな。㊁ちりれんげ。（荷玉瑤）。——ざ［蓮華座］（名）佛像の座、蓮華の形につくりたるもの。——ぎう［蓮華草］（名）【植】豆科に屬する草、原野に叢生す、葉はさいかちの初生に似、花は柄短く多くは帶紫色稀に白色を呈し長き花梗の上部に繖狀の短き總狀花序をなす、肥料に供せらる。（紫雲英）。

（れん-けい［連係］（名）つらなりかゝること。又つらねかくること。

（れんけい［連繫］（名）つながりつゞくこと。又、つ「られつなぐこと。

（れんげり［連翹］（名）【植】木犀科に屬する灌木、枝條は蔓狀をなす、春の頃、四瓣黃色の花開き實を結ぶ、觀賞用として栽培せらる、いたちぐさ。

（れん-けつ［連結］（名）つらなりむすばること。又、つらねむすぶこと。

（れん-けつ［廉潔］（名）我欲すくなくして性行のいさぎよきこと。

（れん-げつ［連月］（名、副）月々、毎月。

（れん-ご［連語］（名）二個以上の語の連なりて一語をなせるもの。

（れん-ご［聯碁］（名）數人二組に分かれ、一局の碁をかはる〳〵一石づゝ打つこと。

（れん-こく［輦轂］（名）てぐるまとこしきと、——のもと［輦轂下］（名）主上のまします都下。

（れん-こん［蓮根］（名）蓮の地下莖（蔕）。

（れん-さ［連鎖］（名）㊀つらなること。㊁くさり。

（れん-ざ［連座］（名）ともに罪に行はるゝこと。まきぞへ。（れんゐる。

（れん-ざ［連座］（名）「れんげざ」に同じ。

（れん-さい［連歲］（名、副）まいねん、ねん〳〵。

（れん-さう［奩箱］（名）化粧道具を入るゝ箱。

（れん-さう［聯想］（名）一の觀念に他の觀念が隨伴して生ずること。

（れん-さく［連作］（名）一つ處に毎年同一のものをうゑつくること。

（れん-さつ［憐察］（名）あはれみ察すること。

（れん-さつ［廉察］（名）あきらかにみること。

（れん-さつ［憐殺］（名）いたくあはれがること。

（れん-さ-はふ［連鎖法］（名）㊀【數】種々の名數が順次相聯繫する關係を知りて、最初の名數と同種類の名數幾何に當るかを見出す簡便法。㊁【論】幾多の命題を連係してこれを前提とし、最後に斷案を下す推論式。「同じ。

（れん-さ-ひれい［連鎖比例］（名）【數】前條（二）に

（れん-ざん［連山］（名）つらなれる山岳。——の-まゆ［連山眉］（名）長く横にひきたる眉。

（れん-し［廉士］（名）廉潔なる人士。

（れん-し［連枝］（名）はるから、兄弟（連子）。

（れん-し［繹子］（名）ふたご。

（れん-し［蓮子］（名）はすのみ。

（れん-し［斂屍］（名）かばねをとりをさむること。

（れん-し［櫺子］（名）窓に設けたる格子、連子。

——まど［櫺子窓］（名）格子のある窓。

（れん-しう［練修］（名）學問又は技術などをねりまなぶこと。

（れん-しつ［連日］（名、副）にち〳〵、毎日。

（れん-しふ［練習］（名）學問又は技術をねりならふこと。——かん［練習艦］（名）水兵などの練習用となす軍艦。

（れん-しや［輦車］（名）てぐるま。

（れん-しやう［戀情］（名）こひ慕たふこゝろ。

（れん-しやう-たま［連城璧］（名）支那の古昔、趙王の所持せしといふ名玉、秦王これを數個の城とかへんと申しおくりしより此名あり。

（れん-しや［連借］（名）連名にて借用すること。

（れん-しや［連雀］（名）【動】燕雀類中連雀科に屬する鳥、山に棲む、雀より大形にして全身ときいろなり、嘴は扁側にして頭上に羽冠あり。

（れん-しや［練鵲］（名）燕雀類中風鳥科に屬する鳥、小形にして羽色類る美なり、「コユギニア」などに產す。

（れん-しや［連尺］（名）㊀物を負ふ具、二片の板に繩を繋ぎて背につくるやうにせるもの。㊁眉より髮下にかけてなゝめに背負ふこと。

（れん-しゆ［連珠砦］（名）多數のとりでを互に相聯援し得るやうにきづきたるもの。

（れん-しゅく［練熟］（名）㊀ねれてたくみになること。㊁ねれて成りたゝのふと。

（れん-しゅつ［憐恤］（名）あはれみてものを與ふること。

（れん-しよ［連署］（名）一通の書狀などに數人が姓名をつらね記すること。

（れん-しよ［憐恕］（名）あはれみてとがめざること。

（れん-しゃ［連勝］（名）たきりにかつこと。

（れん-しゃ［連乘］（名）【數】「るまよう」に同じ。

レンズ［Lens］（名）【理】透明體の表面の、二つの曲面の一部より成るもの、兩面とも球面或は圓壔面の一部なるあり、又、一面は球面或は圓壔面の一部にして他の一面は平面なるもあり、中央の厚きものを凸「レンズ」といひ薄きものを凹「レンズ」といふ、光線「レンズ」に入るときは、其厚き部分に近よりて屈折するを以て、凸「レンズ」は光線を集め、凹「レンズ」は光線を發散せしむ。「る。

（れん-ず［練］（自、サ變）ねれてあり。ね

（れん-せい［聯星］（名）【天】雙星の種類にして、其一星が相互の重心を中心として公轉するもの、現今知らるゝ聯星の數は一千餘あり、軌道甚だ小さく公轉週期は十一年半より一千六百年に至る。

（れん-せい［連聲］（名）他の聲につれて聲を發すること。

（れん-せい［簾政］（名）垂簾政治のまつりごと。

（れん-せい［廉正］（名）潔白にして、正しきこと。

（れん-せう［連宵］（名、副）まいばん、毎夜。

（れん-せき［連夕］（名、副）前條に同じ。

（れん-せき［憐惜］（名）あはれみをしむこと。

（れん-せつ［連接］（名）つらなりつゞくこと。又、つらねつゞくこと。

（れん-せつ［廉節］（名）とり守るみち、みさを。

（れん-せん［連戰］（名）引き續きて戰ふこと、たゝかひにたゝかふこと。「一連勝。

（れん-せん［連然］（名、副）なみだを垂るゝさまにいふ語。

れんせん-あしげ［連錢葦毛］（名）馬の毛色、葦毛に灰色の斑點の交じれるもの。

（れん-ぞく［連續］（名）つらなりつゞくこと。又、つらなりつゞかすこと。——はん［連續犯］（名）【法】同一の犯意を以て二個以上の單行犯をつゞけなす罪、例（ば）一の倉庫中の財物を悉皆ぬすみ出す類の意思より毎夜二種づゝの財物をぬすみ出す類。

（れん-だ［連打］（名）つゞけざまにうつこと。

（れん-たい［聯隊］（名）軍隊の編制上の名目、三個大隊即ち十二個中隊を以て組織せるもの。

（れん-たい［連帶］（名）二人以上のものが、共に其事に連なりて責任を帶ぶること。

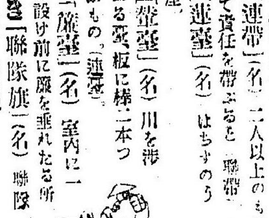
（れん-たい［連臺］（名）はちすのうてな、蓮華座。

（れん-たい［聲臺］（名）川を渉（わた）るに用ふる竿、板に棒一本つけて撥（さを）ふもの。（連臺）。

（れん-たい［簾臺］（名）室内に一段高く床を設け前に簾を垂れたる所。

（れん-たい-き［聯隊旗］（名）聯隊を表示する旗、即ち軍旗。

（れん-たい-く［聯隊區］（名）聯隊區司令官が其職務を行ふ區域。——きれい-くわん［聯隊區司令官］（名）師團長に隸屬し、聯隊區内に於ける徵兵名簿其他征募軍人・補助兵役者等に關する事項を掌るもの、陸軍佐官を以てこれに充つ。



［いだんれ］

（れん-たいげん［連體言］（名）【文法】默認の語尾變化の第四段の活用、下に名詞を受けてこれを形容又は制限するもの。

（れん-たい-さいむ［連帶債務］（名）【法】二人以上連帶して負ふ債務、債權者は債務者の一人に對し、又は同時に若しくは順次に總債務者に對し、其全部又は一部の履行を請求し得るもの。——しゃ［連帶債務者］（名）【法】連帶債務を負ふ各人。

（れん-たい-しゃく［連帶借］（名）金錢上の連帶債務。連帶にてなす借金。

（れん-たい-しよ［連帶證書］（名）二人以上の連帶なる證書。「と。

（れん-たう［憐悼］（名）死者をあはれみいたむ

（れん-だう［聲道］（名）天子の御車の通路。

（れん-たく［揀擇］（名）えらぶこと、よること。

（れん-たつ［練達］（名）物事に熟練してよくゆきとゞくこと。

（れん-たん［練炭］（名）㊀たどん。㊁石炭を粉末としてねりかためたるもの。

（れん-たん［煉丹］（名）㊀古昔、支那にて、道士が辰砂をねりて黃金となすといひしこと。㊁儘氣の丹田に凝聚するやうに修練を積むこと。㊂ねりやく。

（れん-ち［廉恥］（名）性行のいさぎよくして面義を重んずること。

（れん-ち［蓮池］（名）蓮の生（ハ）えたる池。

（れん-ちや［戀著］（名）深く戀ひ慕ふこと。はれあこがるゝこと。

（れん-ちゆう［簾中］（名）㊀すだれのうち。㊁公卿・大名の正妻の尊稱。

（れん-ちゆう［連中］（名）なかま、つれ、くみ、

（れん-ちよく［廉直］（名）性行潔白にしてたゞし

ろ 【櫓】(名) 櫓。

ろ 【炉】(名) ❶ 火を焚く所。❷ 火を焚くための設備。

ろ 【櫨】(名) 櫨。

ろ 【蘆】(名) 蘆。

ろ 【鑪】(名) 鑪。

ろ 【鑢】(名) 鑢。

ろ 【櫓】(名) 櫓。

ろ 【櫨】(名) 櫨。

ろ 【櫨】(名) 櫨。

ろ 【櫨】(名) 櫨

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの

(ろう-ぶゆつ)[漏出](名) もれいづること、又、もらしいだすこと。

(ろう-ぶん)[漏湿](名) もれ出たゝること、又、もらすこと。

(ろう-すい)[漏水](名)[他、さ変] もてあそぶ。

(ろう-ず)(名) 損じたる商品(売貨)。——**もの**(名) 前條に同じ。

++ろう-すいせいする[弄](他、さ変) もてあそぶ、

(ろう-せい)[漏聲](名) 水時計のもゝとる。

(ろう-せつ)[漏出](名) もゝとること、つたなきこと。

(ろう-せつ)[漏泄](名) もゝとること、又、もらすこと。

(ろう-せつ)[弄舌](名) さへづること、又、出やべること。

(ろう-せん)[樓船](名) やかたぶね。

(ろう-せん)[漏筒](名) 水時計の條を見よ。

(ろう-ぞく)[陋俗](名) いやしくゐびたること。

(ろう-たい)[陋態](名) いやしきさま、ひゐるしきさま。

(ろう-だい)[樓臺](名) ㊀樓と臺と、㊁屋根ある

(ろう-たく)[陋宅](名) いぶせきすまひ。

(ろう-だつ)[漏脱](名) もれおつること、又、ぬかしおとすこと。

(ろう-だん)[壟斷](名) ㊀土のたちきられて高きところ。㊁ひとりおめ、獨占。

(ろう-てい)[樓梯](名) 樓上に昇るだんはしご。

(ろう-てう)[籠鳥](名) かごのとり。

(ろう-と)[漏斗](名) ろうと。

(ろう-とう)[籠倒](名、副) うつゆなるさまにい

(ろう-は)[緑礬](名)[化]硫酸第一鐵。[ふ語、

(ろう-はい)[傍背](名) 背のがゝみまがること、せむし。

(ろう-ひ)[陋鄙](名) いやしきこと。

(ろう-ふう)[陋風](名) いやしきならはし。

(ろう-ぶん)[漏聞](名) もれきこと、又、もれきこゆること。

(ろう-へい)[弄兵](名) 兵をもてあそぶこと、空に兵端を開くこと。

(ろう-ほ)[瓏畝](名) ㊀うね、あぜ。㊁農民の間。

(ろう-もん)[櫺門](名) 上に樓ある門。

(ろう-や)[朧夜](名) おぼろよ。

(ろう-らく)[籠絡](名) 人を我が手のうちにくるめこみて自由にあやつること。

(ろう-れつ)[陋劣](名) いやしくゐとりたること。

(ろう-ゐ)[漏遺](名) もれぬけ。

(ろう-をく)[漏屋](名) 雨のもゝあばらや。

(ろう-をく)[陋屋](名) せまき家、いぶせき家。

(ろう-えい)[露營](名) 野外に陣營を張ること、又、野外に張れる陣營。

(ろう-えい)[露洩](名) あらはれもゝること。

(ろう-か)[櫓歌](名) ふなうた。

(ろう-かい-ぬし)[櫓權無](形二) たよりとすべき方なし。[土地、

ろう-かく[鹵确](名) 草木の生長せざる小石多き

ろう-かす[爐滓](名) るつぼにて金銅などをふきわけたるあとに殘る滓(カス)。

ロガリ[Logarithm](名)[數]「たいすう」[對數]に同じ。

(ろう-かん)[鹵鹹](名) 赤はゆきと。

(ろう-きつ)[盧橘](名)[植]「なつみかん」に同じ。

(ろう-きゆう)[盧弓](名) くろぬりの弓。

ろうきよ-のあやまり[魯魚誤](名) 魯と魚とまがひ易きよりいふ文字のあやまり。

(ろう-きん)[路銀](名) 旅用の金、旅費。

(ろう-く)[蘆](名) ㊀物の面形の正しく整ひてあること、「一な死に様」。——**にをる** あぐらをかく。

(ろう-ぐ)[禄](名) ㊀官仕する者の上より受くる給與ふち。㊁當座の賞美として賜はる物、かづけもの。㊂天より受くる幸福 さきはひ ——**をぬすむ**[竊禄] 相當の功績又は勞量なくしてゆたりに禄を受くるにいふ。

(ろく)[勒](名) くつわ、又、たづな。

(ろく)[六](數) 五に一を加へたる數、むつ。

ろく-アミダ[六阿彌陀](名) 巻と秋との彼岸に詣づれば、利益禄に多しといふ六つの阿彌陀。

(ろく-いん)[緑陰](名)「りよくいん」に同じ。

(ろく-えふ)[緑葉](名)「りよくえふ」に同じ。

(ろく-かい)[六界](名)[佛]ろくだう(六道)形に同じ。

(ろく-がい)[六骸](名) 手足と首と胴との稱。

(ろく-かく)[六角](名) 六つかどある形。

(ろく-かく)[鹿角](名) 鹿のつの。——**さい**[鹿角菜](名)[植]「ふのり」に同じ。——**ざい**[鹿角砦](名) さかもぎ。(鹿寨)。——**ざい**[鹿角芝](名)[植]まんねんだけの類、形鹿の角に似、紫黑色にして光澤あり。

(ろく-かせん)[六歌仙](名) 古昔、歌道に秀でし六人即ち、在原業平・僧正遍昭・喜撰法師・大伴黒主・文屋康秀・小野小町の稱。

[ろくがつ]

(ろく-がふ)[六合](名)「りくがふ」に同じ。

(ろく-がん)[緑眼](名)「りよくがん」に同じ。

(ろく-き)[六氣](名)「りくき」に同じ。

(ろく-きふ)[禄給](名) ふち、俸禄。

(ろく-きやう)[六境](名)[佛]六塵に緑所す

(ろく-ぎう)[六牛](名)[佛]六種の牛、即ち乳・酪・醍醐・生・熟・醍醐の稱。

(ろく-ぐ)[六具](名) 六種の武具、種々あり、鎧の上は胴・小手・袖・脇楯・脛楯・草摺の稱、大將のは母衣・籠・小旗・鞭・鞍・扇又は鎧・太刀・采配・鞭・鐙・扇、若しくは木口・旗・弓・小手・鐙・扇・鞭の稱、兵卒のは矛・戟・利剣・弓・矢・胡籙の稱、番所のは突棒・刺股・袖搦・笈棒・早縄・松明の稱、陣屋のは幕・旗・楯・太鼓・法螺・床机の稱、合圍のは鐵砲・烽火・旗・法螺・飛星・松明の稱、軍服のは肩巻・筋掛・鎧・帷子・弓掛・脛當・草鞋の稱、身固のは鉢巻・忍緒・上帶・腰緒・鎧・鎧緒・腰當の稱。

(ろく-くわ)[漉過](名) こしとほらすこと。

(ろく-くわ)[六花](名)「りくくわ」に同じ。

(ろく-ぐわつ)[六月](名) 第一月より第六番目に當たる月。

(ろく-くわんおん)[六觀音](名)[佛]六道に配したる六種の觀音、即ち千手・正・馬頭・十一面・准胝・如意輪の觀音の稱。

(ろく-ぐん)[六軍](名)「りくぐん」に同じ。

(ろく-けい)[六經](名)「りくけい」に同じ。

(ろく-げい)[六藝](名)「りくげい」に同じ。

(ろく-けつ)[六圭血](名) 六角の皿。[香、

(ろく-けん)[禄券](名) 秩禄に代へたる公債證

(ろく-こく)[六穀](名) 稻・粱・菽・麥・黍・稷の稱。「じ。

(ろく-こく-ぶ)[六國史](名)「りくこくし」に同

(ろく-こつ)[肋骨](名) ㊀[生]胸腔を構成する骨、脊柱より體の兩側に彎曲して胸骨に附着す、左右十二對より成る、あばらぼね。㊁陸軍の軍服の上衣の前面に、あばらぼねの狀をなすかざり。

(ろく-こん)[六根](名)[佛]六種の眞心をけがすもの、即ち識(カシ)・諂(ヘツラフ)・驕(オゴリ)・慢(ホコリ)・恨(ウラミ)・害(ナヤミ)の稱。

(ろく-こん)[六垣](名)[佛]六種の眞心をけがすもの、即ち識(カシ)・諂(ヘツラフ)・驕(オゴリ)・慢(ホコリ)・恨(ウラミ)・害(ナヤミ)の稱。

(ろく-さい)[麁皆](名) さかもぎ。

(ろく-さい)[六采](名) すごろく。

(ろく-さい)[六齋](名) 一個月の中、六日毎に事を行ふこと。——**にち**[六齋日](名) 在家にて、一個月中に六度齋戒する日、即ち、陰暦にて八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・晦日なり、此日は惡鬼勢を得て、人を逐ひ人を殺さんとし、諸の凶事出來すべし、故に戒を持し善事をなすを要すといへり。

(ろく-さう)[緑草](名)「りよくさう」に同じ。

(ろく-さう)[緑藻](名)「りよくさう」に同じ。

(ろく-さん)[緑珍](名)「りよくさう」に同じ。

(ろく-ぞく)[禄仕](名) 秩禄を取らんために仕官すること。

(ろく-ぞく)[六賊](名) 支那の古昔、六種の階級に應じたる規定のに、諸侯は皮・卿は羔・大夫は雁・士は雉・庶人は鶩・工商は鶉の稱。

(ろく-ぞく)[六師](名)「りくし」に同じ。

(ろく-ぞく)[六時](名) 一時より第六番目の時刻。

(ろく-ぞく)[緑青](名) ㊀記錄の事を掌る役、かきやく。(書記)。㊁軍法會議の屬官、又、御歌所の屬官。

(ろく-ぞく)[六獸](名) 六種の獸、即ち麋・鹿・狼・兎・野豚・鶉の稱。

(ろく-ぞく-ぶ)[六國史](名)「りくこくし」に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[六師](名)「りくし」に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[六時](名)「りくじ」に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[緑青](名)「りくぞく」に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[六獸](名)「りくぞく」に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[緑樹](名)「りよくじゆ」に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[六趣](名)[佛]六道に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[六默](名) 六種の默、即ち麋・鹿・狼・兎・野豚・鶉の稱。

(ろく-ぞく-ぶ)[緑樹](名)「りよくじゆ」に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[六默](名)「りくぞく」に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[六趣](名)[佛]六道に同じ。

(ろく-ぞく-ぶ)[六獸](名)「りくぞく

境に擯して起る六樣の苦惱。

(ろく-ぞゆ-りき)[六種力]（名）【佛】小兒は啼(ナ)・女人は瞋(ツカ)・國王は驕(リヤウ)・羅漢は精進(シヤウ)・諸佛は慈悲(ヒ)・比丘は忍辱(ニン)を力とすといふ。

(ろく-ぞよ)[六書]（名）「りくしよ」に同じ。

(ろく-ぞよう)[鹿茸]（名）鹿のふくろづの。

(ろく-ぞよく)[綠色]（名）「りよくしよく」に同じ。

(ろく-ぞよ-そんる)[六所遠流]（名）德川時代に罪人を遠流せし六個所の島、即ち伊豆の七島・隱岐・佐渡の稱。

(ろく-ぞん)[六震]（名）【佛】六種の震動、即ち動・起・涌・震・吼・擊をいふ。

(ろく-ぞん)[六親]（名）六種の親、即ち父・母・兄・弟・夫・婦をいひ、又、父・母・兄・弟・妻・子をいひ、又、父・母・兄・弟・姉・妹をいひ、又、伯・叔・兄・弟・兒・孫をいひ、又、男・女・兄・弟・兒・孫をいひ、又、父・子・兄・弟・姑・姉・男・甥・姪・姨・姪をいふ。

(ろく-ぞんさう)[六親等]（名）【法】或人又は其配偶者と六世を隔てたるものとの關係。

ろく-すす(せすす)る。【錄一他、さ變】㊀かきぬく。うつす。㊁記載す。ものす。㊂とりまとむ。すぶ。㊃とりまむ。たばす。㊄齒序す。ついづ。

ろく-すせ(せす)る。【勒一他、さ變】㊀はる。さざむ。㊁むさぶ。とざむ。㊂をさむ。ひきゐる。

ろく-ずみ[陸墨]（名）すみなは。

ろく-する[綠水]（名）「りよくする」に同じ。

ろく-せい[祿制]（名）秩祿のさだめ。

ろく-せいけい[六正刑]（名）武家時代の六種の本刑、即ち禁獄・追放・流罪・斬罪・梟首・磔の稱。

ろく-せん[六線]（名）【數】三角函數の條を見よ。

ろく-そ[六祖]（名）【佛】禪家にて宗派未だ生ぜざる間の六人の祖師、即ち達磨・慧可・僧璨・道信・弘忍・慧能の稱。

(ろく-そく)[六即]（名）【佛】天台にて、成佛に至る六種の階級、三諦の理を具足したれど未だ自覺せざると、即ち理即と、三諦の名字を聞きいさゝか解し得ると即ち名字即と、三諦の觀行を修すると即ち觀行即と、六根淸淨なると即ち相似即と、无明を斷じて一分の中道を見證すると即ち分眞即と、妙覺に到達すると即ち硏究即とをいふ。

(ろく-ぞく)[六賊]（名）【佛】六塵に同じ、其智慧を害し功德をとなふよりいふ。

(ろく-たい)[六體]（名）㊀和歌の六種の體、即ち長歌・短歌・旋頭歌・混本歌・折句・沓冠の稱。㊁りくたいに同じ。

(ろく-だいし)[六大師]（名）十八大師の內弘法。

(ろく-たい)[六道]（名）㊀【佛】六種の輪廻、即ち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の稱。㊁むさしの異名。——**せん**[六道錢]（名）【佛】死人を葬る時に棺に入るゝ錢、死者の三途川を渡る時に拂ふものといふ。——**の**りげ[六道能化]（名）【佛】地藏の稱。「一の弟子となり賽河原で砂手本」。

ろく-だか[祿高]（名）給與せらるゝ祿の額。

(ろく-たま)[副、名]ろくに。ろくろくに。

(ろく-ち)[陸地]（名）「りくち」に同じ。

(ろく-ちく)[六畜]（名）「りくちく」に同じ。

(ろく-ちく)[綠竹]（名）「りよくちく」に同じ。

(ろく-ぢざう)[六地藏]（名）【佛】地藏が六道に現じて利生すといふ六種の體、即ち延命・寶處・寶手・持地・寶印・堅固意の稱。

(ろく-ちつ)[祿秩]（名）ふち。ちぎやう。

(ろく-ちやく-ぞん)[六着心]（名）【佛】六種の執著心、即ち、貪愛・瞋恚・痴・欲・惡の稱。

(ろく-ぢゆう)[勒住]（名）むさゝとゞまること。

(ろく-ぢん)[六塵]（名）【佛】眞性を汚染する六種の物、即ち、色・聲・香・味・觸・法の稱。（六法）。

(ろく-つう)[六通]（名）【佛】六種の通力、即ち、天眼・天耳・他心・宿命・神魂・漏盡の稱。

(ろく-てう)[六朝]（名）「りくてう」に同じ。

ろく-でう-どりふ(ロクデウドリフ)[六條豆腐]（名）初め京都の六條にて製したる故に名づく。豆腐を薄く切りて鹽を塗り、陰乾(カゲボシ)したるもの。

(ろく-でなし)（名）役に立たぬもの。なみに及ばざるもの。

(ろく-ど)[六度]（名）【佛】六ハラミツ」に同じ。

(ろく-とく)[六德]（名）「りくとく」に同じ。

(ろく-に)[陸]（副）ひととほりに、又、たゞしく。

(ろく-ぬすびと)[祿盜人]（名）才能無く又は功績なく、徒に俸給を受くるものなのゝしりていふ「の馬」語。

(ろく-ば)[六馬]（名）天子の御召車をひく六頭立。

(ろく-ば)[勒馬]（名）馬をあつかひのること。

(ろく-ばう)[六方]（名）㊀東西南北と天地と。㊁六個の平面を以て圍まれたる立體。㊂萬治・寶文の頃、江戸にありたる俠客の六團體、即ち鶴鶴組・吉屋組・鎭樽組・唐犬組・笠羅組・大小神祇組などの稱。㊃芝居にて、役者が舞臺より花道を經て扱幕に入るとき、手を振り高く足ぶみして歩む一種の足なみ。——**せき**[六方石]（名）水晶の異稱、其上部の六個の尖りたる平面あるよりいふ。

一字音　〃個語方言　++古語

(ろく-はく)[六博]（名）さい。雙子。

(ろく-ぱふ)[六法]（名）【法】六種の法律、即ち憲法・刑法・民法・商法・刑事訴訟法・民事訴訟法の稱。

ろく-ハラ-ぞんざい[六波羅探題]（名）鎌倉時代に、北條氏が京師の警衛及關西の管理のため京師六波羅に置せしめたる職名。

ろく-ハラミツ[六波羅蜜]（名）【佛】成就すれば佛果を得といふ六種の行、即ち布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の稱。

(ろく-ばん)[綠礬]（名）【化】「りよくばん」に同じ。

(ろく-ふ)[六府]（名）六衛府。

(ろく-ぷ)[六腑]（名）漢法にて、體內の六つの腑、即ち、大腸・小腸・膽・胃・三焦・膀胱の稱。

(ろく-ぶ)[六部]（名）㊀行脚僧が六十六部の法華經を日本六十六個國の靈地に納めしこと。㊁諸國の社寺を巡禮するもの。順禮。

(ろく-ぶぎやう)[六奉行]（名）武家時代に、武者所行・侍所行・長持所行の稱、其各二人づゝありしよりいふ。

(ろく-ぶん-ぎ)[六分儀＝Sextant]（名）【理】二物體の角距離を測る器械、約六十度の弧より成る、弧の線の中心に指針と共に動く鏡あり、弧の線の一方に上半は透明にして下半は鏡をなす「ガラス」板鉛直に立つ、これに對して他の線に望遠鏡を固定す、望遠鏡よりこれに對する「ガラス」板の上半を透して一物體を望み、指針を動かして、他の鏡に映ずる他の物體の像が、「ガラス」板の下板より再び反射して、望遠鏡內にて恰も二物の像が重なりて見ゆるときの指針の位置により、弧上の目盛を讀む、弧上には一度を二度とし三度を六度とするが如く、總て二倍の度數の目盛あるを以て、直ちに二物の角距離を知ることを得。

(ろく-へい)[六蔽]（名）【佛】淸淨心をおほふ六種のもの、即ち、慳貪・破戒・瞋恚・懈怠・散亂・愚痴の稱。

(ろく-ぼ)[六母]（名）姨母・繼母・慈母・養母・產母・乳母の稱。

(ろく-ぼう)[祿俸]（名）ふち。ちぎやう。

(ろく-まい)[祿米]（名）ふちまい。

(ろく-まく)[肋膜]（名）肋骨の裏面に遍(ヅ)ひて更に肺を蔽(オ)ふ膜。——**えん**[肋膜炎]（名）寒冒又は外傷若しくは傳染病等より發する病、十五歲より二十五歲までの男子に多し、胸部に疼痛を發ゆるもの。

(ろく-み)[六味]（名）六種の味、即ち苦・酸・甘・辛・鹹・淡の稱。

(ろく-みやく)[六脈]（名）漢法醫家にて六種の脈搏、即ち浮・沈・遲・數・滑・澁の稱。

(ろく-めい)[鹿鳴]（名）《詩經に出づ》嘉賓を饗應すること。

(ろく-めん)[六面]（名）六個の面、——**ぞい**[六面體]（名）《數》六つの平面にて圍まる立體。

(ろく-もつ)[六物]（名）【佛】三衣と應器・坐具・漉水囊との稱。

(ろく-もつ)[祿物]（名）かづけもの。

(ろく-ゆ)[六喩]（名）【佛】諸行の無常なるとの六種のたとへ、即ち、夢・幻・影・泡・焰・露の稱。（六如）。

(ろく-よく)[六欲]（名）【佛】六根に生ずる欲情。

(ろく-よく)[勒抑]（名）おさゝとゞむること。

ろく-らうソウ(ロクラウ)[六老僧]（名）【佛】日蓮門下の六僧、即ち日照・日朗・日高・日向・日頂・日持の稱。

(ろく-りん)[綠林]（名）「りよくりん」に同じ。

(ろく-れき)[六曆]（名）古昔、使用せられたる六種の暦、即ち元嘉曆・宋の文帝の元嘉曆中、何承天の作にして、持統天皇の初世に用ひられしもの・儀鳳曆（唐の高宗の儀鳳年中に唐より傳來し、持統天皇の御宇に初め元嘉曆と共に併用し後專用せられしもの・大衍曆（唐の玄宗の開元年中、僧一行の作にして、淳仁天皇の天平寶字七年に儀鳳曆を停めて用ひられしもの・五紀曆（唐の代宗のとき郭獻之等の作にして、文德天皇の齊衡三年大衍曆と併用せられしもの・宣明曆（唐の穆宗長慶年中徐昂の作にして、淸和天皇の貞觀三年に大衍曆を停めて用ひられしもの・貞享曆（元の授時曆と明の大統曆とを損益して作られしもの）の稱。

(ろく-ろ)[轆轤]（名）㊀車井戸の上に懸けて、釣瓶綱を掛くる滑車。㊁すべて物を吊し又は引くに用ふる滑車の稱。㊂ろくろがな」の略言。㊃傘の柄の上端に裝置するもの、骨をこれに集め傘の開閉の用をなす。㊄ちやうちん。まんりき。——**がね**[轆轤鉋]（名）木地細工又は錫製の器の圓き物を造る具、軸の端に刃器を裝置し、軸に革紐を繞(ヒ)ひ足にて踏みて旋轉せしめ、作らんとする器具の材を其刃器にあてゝろくりけづる。——**がんな**[轆轤鉋]（名）前條に同じ。——**ぎり**[轆轤錐]（名）「まひぎり」に同じ。——**くび**[轆轤頸]（名）頸甚だ長く、自在に伸縮すといふもの。ぬけくび。飛頸。——**ざいく**[轆轤細工]（名）轆轤鉋にて器具をつくること、又、其細工物。——**ざ**[轆轤師]（名）ろくろ細工をなす職工。（旋盤匠）。——**ざい**[轆轤臺]（名）圓形なる陶器を造る臺、木製の圓盤にして下に軸あり、盤上に陶土を載せ足にて軸を踏みて圓盤を旋轉し、其旋轉するにつれ手にて陶土を種々の形のごとみ、即ち元嘉曆・宋の文帝の元嘉曆中、何承天の作にして、持統天皇の初世に用ひられしもの・儀鳳曆（唐の高宗の儀鳳年中に唐より傳來し、持統天皇の御宇に初め元嘉曆と共に併用し後專用せられしもの・大衍曆（唐の玄宗の開元年中、僧一行の作にして、淳仁天皇の天平寶字七年に儀鳳曆を停めて用ひられしもの・五紀曆（唐の代宗のとき郭獻之等の作にして、文德天皇の齊衡三年大衍曆と併用せられしもの・宣明曆（唐の穆宗長慶年中徐昂の作にして、淸和天皇の貞觀三年に大衍曆を停めて用ひられしもの・貞享曆（元の授時曆と明の大統曆とを損益して作られしもの）の稱。

一字音　〃個語方言　++古語

につくる。——びき［轆轤挽］（名）ろくろざいく。

（ろく-ろく［碌碌］（名、副）役に立たぬさま又は何事をもなすかもなきさまにいふ語。「いふ語。

（ろく-ろく［漉漉］（名、副）もれ出たゝ、ゐさまに

（ろく-ろく［陸陸］（副）十分に、よく。「—構はぬ」

（ろく-ろく-ぎょ［六六魚］（名）《鱗三十六ありといふより名づく》鯉の異稱。

（ろくわ［爐火］（名）ろろりの火。

（ろくわ［蘆花］（名）あしのはな。

（ろくわ［瀘過］（名）水をこすこと。

（ろくわ［露臥］（名）野外にふすこと。

（ろくわい［蘆薈］（名）［植］《羅甸語 Aloa の音譯》百合科に屬する植物。熱帶地方に產す。其分泌せる液汁を採取したるものは、色黑く光澤ありて藥用に供せらる。

†ろくゐ-のくらうど［六位藏人］（名）藏人の相當位は五位なれど、六位にして特に藏人に叙せられたるもの、轉、昇殿を許さる。

（ろくゐふ［六衞府］（名）左右の近衞府・兵衞府・衞門府の稱。

（ろ-けん［露見］（名）密事などのあらはるゝこと。

（ろ-げん［露顯］（名）あらはれいちぢるしきこと。

ロ-ご［露語］（名）「ロシヤ語。

（ろ-こつ［顱骨］（名）あたまのほね。

（ろ-とつ［露骨］（名）むきだし、ありのまゝ。

（ろ-とん［露根］（名）樹木の根の地上にあらはれいてたるもの。

（ろ-ざ［露坐］（名）屋なき處に坐すること。

ろ-さい［羅漿］（名）㊀托鉢。㊁乞食の異稱。

（ろ-さりゃ［魯桑］（名）［植］桑の一種、葉大にして厚し、もと支那より舶來せるもの。

ロザニリン［Rosaniline］（名）［化］アニリンより得る一種の誘導體、染料に用ひらる。

（ろ-ざ［鷓鴣］（名）［動］ゐまつどりに同じ

（ろ-ざ［露次］（名）野宿、野陣。

（ろ-ざ［路次］（名、副）ひもすがら。

（ろ-ざう［蘆洲］（名）あしのおひたる洲(ス)。

（ろ-ざや［盧舍］（名）こゝ。

（ろ-ざやう［路上］（名）みちなか、みちのべ。

ロシヤ-がは［露西亞革］（名）「ロシア國より產出する革、光澤ありて滑かなり。

（ろ-ざゆ［魯酒］（名）《莊子に出づ》氣のうすき酒。

（ろ-ざゆく［露宿］（名）野宿。

（ろ-ざゆつ［露出］（名）㊀あらはれ出ること。㊁寫眞術にて、撮影の際、寫眞器械の「レンズ」の蓋をして光線を一時に入射せざること。

（ろ-ざゆん［蘆筍］（名）あしのめ。

（ろ-ざん［路寢］（名）もてなさき。

（ろ-ざん［路人］（名）道路を往來する人。みちゆく人。「ひと。「行人」

（ろ-ざん［露刃］（名）ぬきみ。

†ロ-スケ［露助］（名）㊀《ロスキーの轉》「ロシア人をのゝしりていふ語。㊁轉じて、人をのゝしりていふ。「いふ語。

ろせい-のゆめ［盧生夢］（名）「かんたんのゆめ」（邯鄲夢）に同じ。

（ろ-せき［鹵瘠］（名）地味のあしきこと。

（ろ-ぞく［蘆粟］（名）［植］禾本科に屬する植物。ろとしに似、近年支那より渡來せるものにして、多量の澱分を含み製糖の料に供せらる。

（ろ-だい［露臺］（名）㊀屋根無き臺。㊁舞を演ずるために設けたる床を張りて屋根なき臺。

ロ-たん［露探］（名）（自露戰爭のとき露國のため我國の事情を探報せるもの）人をいたくいやしめていふ語。

（ろ-ぢ［路地］（名）㊀門內又は庭上の通路。㊁家と家との間に在る狹き路。

ロヂウム［Rhodium］（名）［化］灰色を帶びたる堅硬なる稀有の金屬。

（ろちゃう-こつ［顱頂骨］（名）頭蓋骨の一部にして上部の側壁をなすもの、扁平方形にして左右一對あり。

（ろ-てい［路程］（名）みちのり。

（ろ-てい［露呈］（名）あらはし出めすこと。

（ろ-てん［露點］（名）［理］大氣の溫度下りて溫氣が液化せんとするときの溫度。

（ろ-てん［露店］（名）はしかせ。

（ろ-ど［爐土］（名）多量の植物質を含有する土壤。

（ろ-とう［路頭］（名）みちばた。——にまよふ生活し得ずして乞食するにいふ。

（ろ-とう［爐頭］（名）ゐろりのそば。

（ろ-とう［露頭］（名）かぶりものをかぶらず頭をあらはすこと。

（ろ-どん［魯鈍］（名）もろかにしてにぶきこと。

†ろ-なり［無論］（副）もちろん。

†ろ-なし［無論］（形、一）もちろんなり、いふまでもなし。「論にかくる縄。

ろなは［艫繩］（名）船の床に製作して、艫の上

ろ-の-ま［爐間］（名）爐のまうけある室。

†ろ-は（名）《只の字を分りていふ》代金の入らぬこと。

†ろ-ひ（名）公園などにそなへたる共同椅子、席料を要せざるよりいふ。ふていす。

（ろ-ば［驢馬］（名）［動］うさぎうまに同じ。

（ろ-ばり［路傍］（名）みちばた、みちのほとり

ロ-たん［露探］（名）（自露戰爭のとき露國のため我國の事情を探報せるもの）人をいたくいやしめていふ語。

（ろ-ぢ［路地］（名）㊀門內又は庭上の通路。㊁家と家との間に在る狹き路。

ロヂウム［Rhodium］（名）［化］灰色を帶びたる堅硬なる稀有の金屬。

（ろちゃう-こつ［顱頂骨］（名）頭蓋骨の一部にして上部の側壁をなすもの、扁平方形にして左右一對あり。

（ろ-てい［路程］（名）みちのり。

（ろ-てい［露呈］（名）あらはし出めすこと。

（ろ-てん［露點］（名）［理］大氣の溫度下りて溫氣が液化せんとするときの溫度。

（ろ-てん［露店］（名）はしかせ。

（ろ-ど［爐土］（名）多量の植物質を含有する土壤。

（ろ-とう［路頭］（名）みちばた。——にまよふ生活し得ずして乞食するにいふ。

（ろ-とう［爐頭］（名）ゐろりのそば。

（ろ-とう［露頭］（名）かぶりものをかぶらず頭をあらはすこと。

（ろ-どん［魯鈍］（名）もろかにしてにぶきこと。

†ろ-なり［無論］（副）もちろん。

†ろ-なし［無論］（形、一）もちろんなり、いふまでもなし。「論にかくる縄。

ろなは［艫繩］（名）船の床に製作して、艫の上

ろ-の-ま［爐間］（名）爐のまうけある室。

†ろ-は（名）《只の字を分りていふ》代金の入らぬこと。

†ろ-ひ（名）公園などにそなへたる共同椅子、席料を要せざるよりいふ。ふていす。

（ろ-ば［驢馬］（名）［動］うさぎうまに同じ。

（ろ-ばり［路傍］（名）みちばた、みちのほとり

——の-ひと［路傍人］（名）自己に何等の關係もなき人にいふ語。——の-やなぎ［路傍柳］（名）《誰にても手折り得る意》遊女などの稱。

（ろ-ばん［露盤］（名）塔の心をなす柱、上に高く突出せるもの。

（ろ-ひ［路費］（名）道中の費用。路用。

ろ-びらき［爐開］（名）茶人の家にて、陰曆十月朔日に地爐を開き用ふること。「ふれ。

（ろ-ふ［露布］（名）㊀封をなさゞる書狀。㊁戰捷の

（ろ-ぶち［爐緣］（名）㊀爐の邊。㊁爐の緣の框(ワク)。

（ろ-へり［路標］（名）みちぢるべ。

（ろ-へん［爐邊］（名）ゐろりのほとり。

（ろ-へん［路邊］（名）みちばた、みちのべ。

ろ-べた［總臍］（名）船端(ハタ)に小さく突出せるもの、綱の孔に旋(ハ)ひる用とす。

（ろ-ぼ［鹵簿］（名）行幸の行列。みゆきのつち。

（ろ-めい［露命］（名）はかなきいのち。——をつなぐ　辛うじて生活す。

（ろ-よう［路用］（名）旅の入費、ろどん。ろひ。

（ろ-りゃく［鹵掠］（名）かすめとること。

（ろ-れつ［臚列］（名）つらねならぶること。「臚陳」。

（ろ-れつ［呂律］（名）物をいふ調子。——がまはらぬ　酒にゑひて言語の分明ならざるにいふ。

（ろん［論］（名）㊀のべとくこと。のべかたること。㊁いひあらそふこと。あげつらふこと。㊂意見。見解。

（ろん-い［論意］（名）議論の主意。

（ろん-かく［論客］（名）よく議論する人。

（ろん-ぎ［論議］（名）㊀論じはからふこと。論じさだむること。㊁ぎろん。

（ろん-ぎ［論擬］（名）決斷して刑にあつること。

（ろん-きり［論究］（名）理をかんがへきはむること。

（ろん-きつ［論詰］（名）議論を以てせめなじること。

（ろん-きふ［論及］（名）論じおよぼすこと。

（ろん-きょ［論據］（名）議論のよりどころ。

ロング-トン［長噸］（名）米國重量の單位、二二四〇封度(ポンド)の稱。

（ろん-ぐわい［論外］（名）論ずるに及ばざること。

（ろん-けつ［論結］（名）議論をむすぶこと。

（ろん-けつ［論決］（名）論じてきむること。

（ろん-とう［論功］（名）功をはかりさだむること。「一行賞。

ろん-ど-よみ［論語讀］（名）《論語は孔子の言行を記せる書の名にして、これを讀みて理解し得るもの、轉》——の書物上の理會は出來得るもの、稱。

ろん-ど-まらず　徒に書物上の理會にとゞまりて、これを實行し得ざるものをのゝしりていふ語。

（ろん-ぎり［論爭］（名）論じあらそふこと。いひあふと。あげつらふこと。

（ろん-ざい［論罪］（名）犯罪を審理して刑の適用を定むること。

（ろん-ざく［論策］（名）議論又は方策をのぶる文章。

（ろん-ぶ［論旨］（名）議論の主旨。

（ろん-ぶ［論士］（名）議論をなす人。

（ろん-ぶや［論者］（名）前條に同じ。

（ろん-ぶよう［論證］（名）㊀事理をわけて證明すること。㊁特に、確實なる原理に基き、理路をたどりて斷案をひき出すこと。

ろん-ぶ-せいせつ［論、仙、さ型］㊀かんがへわかつ。かんがふ。㊁說明す。のぶ。とく。㊂かたる。はなす。㊃議定す。はかる。㊄審理す。さばく。㊅いひあらそふ。いひあふ。

（ろん-せつ［論說］（名）意見をのべとくこと。——ぶん［論說文］（名）意見をのべとく文。

（ろん-せん［論戰］（名）議論をたゝかはすこと。

（ろん-だい［論題］（名）議論の題。又、論文の題。

（ろん-だん［論斷］（名）論じて斷案を下すこと。

（ろん-だん［論談］（名）ときのぶること。

（ろん-だん［論壇］（名）議論をたゝかはする範圍。

又、議論をのぶる場席。

（ろん-てい［論定］（名）論じてきむること。

（ろん-てん［論點］（名）議論の要點。

（ろん-なん［論難］（名）論じて非難すること。

（ろん-ば［論破］（名）いひやぶること。ときやぶること。

（ろん-ぱふ［論法］（名）議論のたかた。

（ろん-ぱく［論駁］（名）論じて其非をうつこと。

（ろん-ぱん［論判］（名）㊀論じて其理非を判ずること。㊁いひあひ。

（ろん-ぶん［論文］（名）事物を論議する文。——ぶけん［論文試驗］（名）論題を掲げて論文を草せしめ、それによりて及落を判する試驗。

（ろん-べん［論辯］（名）意見をのべとくこと。

（ろん-ぼう［論鋒］（名）議論のほこさき。

（ろん-り［論理］（名）㊀議論のすぢみち。又、論證のすぢみち。㊁「ろんりがく」の略言。——がく［論理學＝Logic］（名）一の公理にもとづきて正確なる理路を辿り、斷案をひき出す法則を研究する科學。思考の形式に關する法則を研究する科學。

わ

おうぶ

おうぶ

おうぶ

（わうど）[黄土]（名）赤土より製する繪具。
（わうとう）[王統]（名）帝王のちすじ。
（わうどう）[黄銅]（名）眞鍮の異稱。
（わうなん）[横難]（名）思ひよらざるさいなん。
（わうにょ）[皇女]（名）天子の御娘。ひめみこ。
（わうにょ）[王女]（名）㊀王の御娘。㊁内親王のなき皇族の御女子。ひめおほぎみ。
（わうにょご）[王女御]（名）皇女・王孫女の女御となりたまへる御方の稱。
（わうねん）[往年]（名）過ぎにし年。むかし。
（わうのはね）[王墓]（名）墓の高く突き出てたる假面。猿田彦の相なりといふ。
（わうは）[横波]（名）【理】物質の各部分の順次振動する方向が、振動の傳はる方向に直角なる波動。
（わうは）[王覇]（名）王者と覇者と。又、王道と覇道。
（わうばい）[黄梅]（名）【植】木犀科に屬する小木本、葉は三個の小葉より成る、春の頃六瓣黄色の花開く、觀賞用として栽培せらる。（迎春花）。
（わうばく）[黄蘗]（名）㊀【植】きはだに同じ。㊁わうばくさゆうの略言。——ぶゆう[黄蘗宗]（名）【佛】禪宗の一派、臨濟宗の流派にして、明の黄蘗山萬福寺の隱元禪師が承應三年に清の亂を避けて來朝し、山城國宇治に一寺を創立して黄蘗山萬福寺と稱せしより其流派の稱とす。
（わうはふ）[王法]（名）王者の法。
（わうはふ）[枉法]（名）法の正理をまげること。又、よこしまなるおきて。
（わうばん）[黄幡]（名）陰陽家にて祭る八將神の一、東陣の守護神なりといふ。
（わうばん）[椀飯]（名）㊀＋椀に盛りてすゝむる飯。㊁＋中世、正月に一家親族を集めて催したる盛なる饗應。㊂わうばんふるまひの略言。——おるまひ[椀飯振舞]（名）㊀椀飯をふるまふこと。㊁多數の人々に誰彼の差別なくふるまふ饗宴。
（わうひ）[王妃]（名）王のおきさき。
（わうふ）[王父]（名）死にたる祖父。
（わうふく）[往復]（名）㊀ゆきかへり。ゆきき。㊁手紙のやりとり。㊂わうふくきっぷ又はわうふくはがきの略言。——きっぷ[往復切符]（名）ゆきとかへりとの乘車切符を綴合して一枚となしたるもの。——はがき[往復葉書]（名）證信用と返信用とを綴合して一枚となしたる郵便葉書、證信者は證信用のものに認めて其まゝ郵送し、返信者はこれを半截して返信用のものゝみとしこれに認めて郵送す。
（わうふるまひ）[王不留行]（名）【植】ばらうそわんさう」に同じ。
（わうぶん）[横文]（名）よこもじ。
（わうへい）[横柄]（名）おごりたかぶり人に對して禮なきこと。「（往復）。
（わうへん）[往返]（名）ゆきとかへりと。ゆきゝ。
（わうぼ）[王母]（名）死にたる祖母。
（わうほふ）[王法]（名）【佛】國王の法令。
（わうまち）[往亡日]（名）凶日の名、一年に十一日ありて、此日は出陣又は外出を忌むといふ。「民。
（わうみん）[王民]（名）帝王の統治の下にある
（わうめい）[王命]（名）帝王の命令。
（わうもくおうひ）[横目縱邑]（名）目は横にて鼻は縱なるを、即ち人間の面相をいふ語。
（わうもくしゅ）[王位]（名）帝王のくらゐ。
（わうもん）[王威]（名）帝王の御威光。
（わか）[和歌]（名）やまとうた。國詩の對。
（わかい）[若]（名）をさなきもの。
（わかい）[和解]（名）㊀やはらぎとくること。なかなほり。㊁（法）訴訟者が互に讓歩して相互間の爭ひを止むること。
（わかいおゆ）[若衆]（名）㊀一村内又は一町内の總代などとなりて、祭禮其他の事件の世話をする者。㊁商家などに使はるゝ小僧より年長なるけたるもの、稱。㊂すべて勞働し又は使役せらるゝ壯年の男子の稱。——がしら[若衆頭]（名）一村内又は一町内の若衆の頭となり世話をやくもの。

（わかいもの）[若者]（名）㊀＋わかいおゆに同じ。㊁わかうど。——がしら[若者頭]（名）「わかいおゆがしらに同じ。
＋わかうど[若人]（名）わかもの。少年。壯年。
わかえ[若枝]（名）わかきえだ。（嫩枝）。
＋わかえひすがた[若生姿]（名）いとけなきすがた。
＋わかがへにエガ（副）わかきときに。
わかがへりエリ[若返]（名）わかがへること。
わかがへるエル[若返]（自ら四）老人などの再び若きさまに返る。
わかがみ[若髮]（名）わかき人の頭髮。
わかき[若氣]（名）「わかげ」に同じ。「木。
わかぎ[若木]（名）おひ出でゝまだ年を經ぬさる
わかぎみ[若君]（名）㊀年若き主君。（幼君）。㊁主君の子の若き御方。
＋わかきんだち[若公達]（名）年わかき公達。
（わがく）[和學]（名）我日本の和歌・文章・有職等の學問。國學。（皇學）。
わかくさ[若草]（名）㊀芽だちの草。なえだちの草。（嫩草）。㊁かさねの色目、表は萌き青にして裏は濃き青なるもの。——の（枕）[若草]「妻」に冠らする詞。
（わがくしゃ）[和學者]（名）和學を修むる人。
又、和學に長じたる人。「年の血氣。
わかげ[若氣]（名）年わかきもの、はやり氣。少
＋わかご[若子]（名）みどりご。
わかこま[若駒]（名）生れ出でゝまだ年經ぬ馬。
わかさかり[若盛]（名）年わかくいきほひ最もさかんなる頃。
わかさぎ[若鷺]（名）【動】喉鹿類中わかさぎ科に屬する魚、形はえに似、大さ一二寸、背、若色にして側部に銀色の條線あり、河海の間に產す、東海より東北にかけて多し。

[ぎきかわ]

わかきぬり[若狹塗]（名）若狹國小濱より產出する模樣塗の漆器、津輕塗に似て金銀色をなす。
＋わかきぶ[若樣]（名）貴族の子弟の敬稱。
わかざり[輪飾]（名）藁を編みて輪狀となし、下方に數條の藁を垂れさげたるもの、正月に門戸又室内などにかざる。
（わかさんおん）[和歌三神]（名）和歌の神と仰ぐ三體、即ち住吉の表筒男命・中筒男命・底筒男命をいふといひ、又衣通姫・柿本人麿・山邊赤人なりともいふ。
（わかさんせい）[和歌三聖]（名）歌聖と仰ぐ三人、即ち衣通姫・柿本人麿・山邊赤人の稱。
わかし[若]（形、一）㊀いとけなし。をさなし。（稚）。㊁血氣さかんなり。壯年なり。㊂あをとへず。老いず。㊃はえ出で、未だ久しからず。（嫩）。㊄未熟なり。
わかおに[若死]（名）若年にて死去すること。（夭、
わかおゆ[若衆]（名）㊀わかうど。わかもの。㊁昔時、未だ元服せずして前髮ある男子の稱。㊂かげま。——わげ[若衆髷]（名）昔時、十五六歲の男子の結びし髮。「髮。（稚髮）。
わかおとこ[若白髮]（名）若年より生ふる白
わかすがせ[若菜]（名）㊀春のはじめに生ずる若き菜。㊁古昔、正月の上の子の日に、禁中にて内膳司より其年の七種のわか菜を羹として奉りしもの「一の

わかい—わかさ　　わかさ—わかた　　わかた—わかね　　一六〇五

わかたち[我黨]（名）自分のなかま。同志。——の[我黨士]（名）自分のなかまの人。同志の人。
わかたか[若鷹]（名）鷹の一歲なるもの、稱。
＋わかたち[若立]（名）ひこばえ。わかめ。
＋わかたち[若立]（自、た四）わかめ生ず。
＋わかたつそま[我立杣]（名）㊀自分の住む山。又自分の住む寺。㊁轉して比叡山をいふ。
わかだんな[若旦那]（名）主人の長子。㊁富豪の子弟の敬稱。「差別。
わかち[別、分]（名）けじめ。わいだめ。差なし。區別。
わかつたち[別、分]（他、た四）㊀志きる。かぎる。㊁わる。さく。㊂はなす。解く。㊃異にす。別にす。㊄判斷す。わけさだむ。㊅辨別す。わきまへ。㊆えだを出す。分出す。㊇くばり與ふ。配當す。
＋わかづく[若附]（他、か四）わかやぐ。
＋わかつり[機巧]（名）（別釣の義）機巧のあやつる處の稱。「やつる。
わかつる[機巧]（他、ら四）わかつりをあ
わかどころ[和歌所]（名）村上天皇の天曆五年に置かれたる和歌撰集の事をつかさどりし所、別當・開闔・寄人等の職あり。
わかどしより[若年寄]（名）德川時代の執政第二の職、老中に次ぎしもの。
わかとの[若殿]（名）㊀いとけなき主君、幼君。「ち。㊁主君の世子。
わかとのばら[若殿原]（名）貴族のわかうどた
わかどもがら[我輩]（代）われ〳〵ども。（吾曹）。
わかなすがせ[若菜]（名）㊀春のはじめに生ずる若き菜。㊁古昔、正月の上の子の日に、禁中にて内膳司より其年の七種のわか菜を羹として奉りしもの「一の

＋古語　〜俚語方言　〜字音

「るもの、稱。

わかね-ど[若魚子](名)【動】より の七八寸許なる。

わか-ね-へ[若苗](名)わかばのなへ。——**いろ**[若苗色](名)〔二〕かされの色目、表も裏も淺き萌黃色なるもの。〔三〕あを色。

わが-ぬ[若根](名)生じて未だ久しからぬ根。

わが-ね[若根](名)生じて未だ久しからぬ根。

(わがねる(他)「わがぬ」の訛。

わか-ば[若葉](名)生じて未だ久しからぬ葉。(嫩葉、新葉)。

わが-はい[我輩](代)われ〳〵ども。われら。わ「がともがら。

わか-はえ[若生](名)ひこばえ。わかめ。

わか-びと[若人](名)わかきひと。

わか-ぶ[若](自、は上二)若く見ゆ。

(わが-あ[和合](名)やはらぎあふこと。むつびあたしむこと。なかよきこと。

わか-まつ[若松](名)〔一〕生ひ出で、久しからぬ松。〔二〕年のはじめの式に用ふる小松。〔三〕かきれの色目、表は青にして裏は紫なるもの。

わが-まま[我儘](名)我心のまゝにふるまふこと。自分勝手になすこと。きまゝ。ほしいまゝ。さがゆ。(放肆)。

わが-み[我身](名)自分の身。——**をつむ**自分の身にひきくらべて、他人の事をおもひやる。

わが-み[我身](名)〔一〕自稱の代名詞。われ。〔二〕親しき目下の者に用ふる對稱の代名詞。

わか-みづ[若水](名)もとは立春朝はやく汲む水の稱。後には正月の元旦に汲む水の稱。これを飲めば其年の邪氣を除くといひ傳ふ。

わか-みどり[若緑](名)〔一〕松の若葉。〔二〕かかまつ(三)に同じ。

わか-みや[若宮](名)〔一〕幼き皇子を申す語。〔二〕親王家の御世繼の御方を申す語。〔三〕神社の內にある其神の御子を祭れる社。

わか-むさや[若武者](名)年わかき武者。あはさむらさいき。

わか-むらさき[若紫](名)うすむらさき。(淡紫)。

わか-め[若布](名)【紐】褐色藻に屬する海藻、有柄の葉狀をなし羽狀に分裂す、昆布に似、綠色にして滑かなり、食用に供せらる。にぎめ。(褐帶藻)。

わか-め[若芽](名)生(ハ)えて程經(ヘ)ぬ芽。

わか-もち[若餅](名)元三日の間に搗ツく餅。

わか-もの[若者](名)年わかき人。わかうど。少年。壯年。

わが-もの[我物顏](名)己の所有物。——**がほ**[我物顏](名)己の所有物らしくもつかふこと。

わか-やか[若](名)若きさま。

わか-やく[若役](名)年わかきもの、役。

わか-や-ぐ[若](自、か四)若く見ゆ。

わか-ゆ[若鮎](名)「わかあゆ」の約言。

わか-ゆ[若](自、や下二)若くなる。

わかり[分](名)わかること。のみこみ。さとり。會得。了解。

わか-る[分](自、ら四)覺(サ)り知る。會得す。のみこむ。さとる。

わか-る[別](他、ら四)〔一〕はなる。〔二〕別になる。〔三〕へだたる。〔四〕別つく。〔五〕きけわる。區別つく。〔六〕たばらく相會すると能はざるやうになる。ふたゝび相會すると能はざるやうになる。(訣別)。〔七〕枝となる。「道—」。

わかれ[別](名)〔一〕わかるゝこと。分離。〔二〕いとまごひ。訣別、別離。〔三〕わかれ出でたるもの。えだ。——**ぢ**[別路](名)〔一〕別かれて行く路。冥途のみち。〔二〕えだみち。岐路。〔三〕死にてゆく路。冥途のみち。——**の-くし**[別櫛](名)〔一〕古昔、齋宮の伊勢へ出發せらるゝに、さきだち、主上み手づから齋宮の御髮にかざし與へ給ひし櫛。〔二〕緣を絕つまるしとして與ふる櫛。——**の-そで**[別袖](名)わかれのかたみにと裂きておくる自己の衣服の袖。又、わかれをしみてひきとむる衣の袖。——**の-とこ**[別床](名)きぬ〴〵のわかれの床。——**のみち**[別路](名)「わかれぢ」に同じ。——**みち**[別路](名)はなれ〴〵。べつ〴〵。——**る**(自)「わかる」の訛。——**をれくる**旅立つ人を見送る。

わか-わかし[若若](形、二)〔一〕いたく若やぎて見ゆ。〔二〕いたく未熟なり。

わか-わか-と[若若](副)いとわかやかに。

(わかん[和姦](名)男女合意上の私通、強姦の對。

(わかん[和漢](名)和と漢と、日本と支那と。

わかん-どほり(ド)(名)皇子の血筋。「—ばらの君」とて、母もなき娘をはす。

わかんむり[冠](名)(片假名のワの字に似たれば、いふ)漢字の冠の名。冥・宜などの上にある「冖」の字の稱。ひらかむり。

(わかん-やう[和漢洋](名)和漢と西洋と。

わかん-らん[和漢闌](名)會得のゆかざること。を笑やれていふ語。

わき[脇](名)〔一〕胸の側面にして、肩腕の下なる所。(腋、掖)。〔二〕衣の腋の當たる部分の稱。〔三〕能狂言にて、仕手(シ)の相手の稱。わき方。〔四〕かたはら。そば。〔五〕(傍)。

わき[別](名)わかれ。

わき[沸](名)わくこと。にえたつこと。「—が遲い」。

(わ-き[和氣](名)〔一〕のどけき時氣。あたゝかき時氣。〔二〕おだやかなる氣色。むつまじきけはひ。

(わ-き[和議](名)和睦の議。なかなほりの議議。

わき-あが-る[沸上](自、ら四)〔一〕はげしくにゆ。にえたつ。(沸騰)。〔二〕底よりはげしく湧(ユ)きのぼる。

わき-あげ[腋明](名)〔一〕袍(ホウ)の腋の下を開(ア)きて縫はず擬(ス)なきもの。〔二〕幼兒又は婦女などの衣服の腋の下を縫はざるもの、左右各四つ宛あるが故に、一にやつくちともいふ。

わき-あて[腋當](名)「わいだて」に同じ。

わき-い-づ[沸出](自、た下二)わきて出づ。ふきいづ。

わき-うり[脇賣](名)店をもたずしてものを賣る商賣。わきうそ。ありか。(狐臭、胡臭)。

わき-が[腋香](名)腋下より一種の惡臭を放つ皮膚病。わきくそ。

わき-かへ-る[沸返](自、ら四)〔一〕はげしくしてにえたつ。にえくりかへる。〔二〕いたくさわぎ立つ。

わき-くそ[腋臭](名)わきが。

わき-げ[腋毛](名)わきつぼに生ふる毛。

わき-ざし[脇差](名)〔一〕こしがたな。まもりがたな。〔二〕道具の刀。〔三〕傍にある附添人。「もの。

わき-だち[脇師](名)能狂言に、仕手の相手をなす

わき-た-つ[脇立](名)「けふぎ」(夾侍)(二)に同じ。

わき-た-つ[沸立](自、た四)〔一〕にえたつ。〔二〕はげしくふき出づ。〔三〕醱酵す。

わき-づ-く[脇突](名)「けふそく」。(脇息)に同じ。

わき-づけ[脇附](名)書狀を送るに、直接に其人にあてずして其侍者にあつること。

わき-つ[脇壺](名)わきの下のくぼみたる所。

わき-て[脇手](名)側面の方。

わき-て[別](副)とりわけて。わけて。

わき-で[脇手](名)〔一〕わきて。〔二〕側腦。

わき-ど[脇戶](名)門の脇の入口。

わき-の-ふた[腋下](名)腋とうでとの間。

わ-きば-む[挾](他、ま四)腋下にはさむ。

わ-きば-む[他、ま四]いつくしむ。

わき-ばら[脇腹](名)〔一〕腹の側面。よこばら。〔二〕めかけばら。妾腹。(庶出、庶腹)。

わ-きへ[我家](名)「わがいへ」の約言。

わき-ぼね[脇骨](名)「わきこつ」(肋骨)に同じ。

わき-まふ[辨](他、は下二)〔一〕知り分く。見わく。辨別す。識別す。〔二〕つぐのふ。辨償す。

わき-まへ[辨](名)わきまふること。辨別。識別。分別。——**どころ**[辨心](名)わきまへをなす心。識別する知能。〔——る(他)「わきまふ」の訛。

わき-み[脇見](名)其ものを見ずして他をみること。よそみ。わきめ。

わ-きみ[吾君](名)敬意をあらはす對稱の代名詞。

わき-みち[脇路](名)よこみち。えだみち。岐路。傍路。

わき-め[脇目](名)わきみ。よそめ。(傍目)。

わ-きも[吾妹](名)次條に同じ。

わ-きもと[吾妹子](名)(我妹子の約言)愛する女を親しみ呼ぶ語。

わ-きり[輪切](名)圓くして長きものを直橫に切ること。「大根の—」。

わき-ろ[脇艫](名)艦艦(ロ)を助くるため舷(フナ)に裝置する艫。

(わ-きん[和金](名)【動】金魚の一種、身長く尾短にあてずして其侍者にあつること。

わく[擢](名)〔一〕絲を繰(ク)ふ具、一雙以上の材を對(ツ)はしめ、間に横木を入れて支へ中心に軸あるもの。をだまき。(絡車、絲析幀)。〔二〕細き材の骨又は綠の稱。かまち。(木框木格)。

[くわ]

わ-く[沸](自、か四)〔一〕地中より噴(フ)き出づ。ふきいづ。(湧、涌)。〔二〕下底より生出す。〔三〕水など熱す。にゆ。〔四〕鑛解す。とろく。〔五〕熱のためにもれて生ず。〔六〕きかんに起る。はげしく發す。「議論—」。〔七〕發生す。化成す。「蟲—」。

わ-く[別](他、か四)區別す。わかつ。

わ-く[紐](他、か下二)わかぬ。

(わ-く-と[若子](名)〔一〕わかき兒。わかご。〔二〕壯年。

(わ-く-せい[惑星](名)遊星。

(わ-く-でき[惑溺](名)迷ひて本心を失ふこと。よひもほるゝこと。

わ-ぐ-む[紐](他、ま四)わかぬ。

(わ-く-もん[或問](名)〔一〕文章にて、或人の問を設ひこれに對(ヘ)て自己の意見をいふもの。〔二〕疑問。

わく-ら-ば[病葉](名)すかれたる葉。

わく-らば-に[邂逅](副)たまさかに。たま〳〵。まれに。

(わく-らん[惑亂](名)まどひみだるゝこと。又、まどはしみだすこと。

(わくわ-どうぎん[和光同塵](名)〔一〕自己の智をつゝみかくして世の中に共にたがひまじること。〔二〕(佛)佛乃至菩薩が本地をかくして人間に垂跡すること。

(わ-くん[和訓](名)漢字に和語を當てゝ讀むこと。

天地を「あめつち」と讀むが如き類。

わけ［譯］(名) ㊀理を說き分くること。㊁すぢ。ゆゑ。仔細。理由。

わけ［分］(名) ㊀相撲にて、雙方の力士とりつかれて勝負つかざるとき、わけて勝負なしとすること。ひきわけ。㊁互に勝負なくして止むこと。

わげ［髻］(名) 髮(モト)のあまりを鬘(ツ)がね結(ユ)ひたるもの。まげ。(角子)。

わげ［和解］(名) 外國文を日本語に解すること。

わげあひ(イヤ)［譯合］(名) すぢ。ゆゑ。

わげがら［譯柄］(名) 前條に同じ。

わげぎ［分葱］(名) 【植】葱の變種、莖細くして根白く、實を結ばず、苗を分けて植うるが故に此名あり。(冬葱)。

わげぎ［輪掛裝］(名) 裝束の一種、帽二寸許にして環の如く作り、頸にかけて胸に垂るゝもの。

わけて［別］(副) ことさらに。別して。とりわけて。わきて。

わけ-ざり［分取］(名) わけて各自にとること。

わけ-へだて［別隔］(名) ㊀わかち。區別。㊁かたぶちのとりあつかひ。㊂親疎の差別。

わけ-まへ(エ)［分前］(名) わりまへ。とりまへ。

わけ-め［分目］(名) ㊀分けたる所。㊁成敗を分け定むる機會。

わげ-もの［繒物］(名) まげもの。(曲物)。

わげる(他)(わく)の訛。

わこ［若子］(名) 小童の美稱。(和子)。

わご［和語］(名) 日本のことば。我國の語。

わごう［和寇］(名) 明時代に、支那の沿海を抄掠せし我國の海賊の稱。

わ-ごく［和國］(名) 日本のくに。

わ-ごくわう(ワウ)［輪後光］(名) 輪狀を成せる後光。

わ-ごせ［我御前］(名) 對稱の代名詞。(多く婦人に用ふ)。「る役者。

わごせ-ぶ［和事師］(名) 男女間のぬれ事を演ず

わ-ごりょ(ゴリヤウ)［我御料］(名) 對稱の代名詞。(多く婦人に用ふ)。

(わ-ごん［和琴］(名) やまとごと。あづまごと。

(わごん-かんさい［和魂漢才］(名) 日本固有の精神と支那傳來の學問と。

わさ—［早］(接頭) 武語に冠して、早き意を表はす語。「—苗」「—穂」。

わ-さ［輪差］(名) 紐を輪狀にむすびたるもの。

わざ［事］(名) ㊀なす事。する業。ふるまひ。㊁技術。㊂法事。佛事。㊃十女子の子を生むこと。

(わ-ざうゥ［和裝］(名) 日本風のよそほひ。

わざ-うた［謠歌］(名) 世に流行する俗歌。はやりうた。(童謠)。

わざ-ざ［早酒］(名) 早づくりの酒醋。

わざ-づの(名) 鹿の角を頭部に著けたる杖。

わざと［態］(副) ㊀特別に。わけて。㊁故意に。ことさらになしたるちし。——**おぼ-しし**(シケレ)**く**［態］(形、二)。——**ぞ-つたし**(タシ)**く**［態］(形、二)。——**め-く**［態］(形、二) 見ゆ。——**ら-し**［態］(形、二) わざとなすさまなり。

わざ-ぎ［早苗］(名) 「さなへ」に同じ。

わざ-ぎはひ(イヤ)［災］(名) (「わざ」は鬼神の所爲、「はひ」は延の義)身に心配・難儀・疾病・其他不意の事變のかゝること。まがごと。殃禍。災難。(凶事)。

わざび［山葵］(名) 【植】十字花科に屬する草、葉は心臟形にして下部に位せるものは長き葉柄を具す、綠色にして光澤あり、花は四瓣白色にして、後に莢を結ぶ、根は石莒に似、味辛く香氣高く、食味の調理に供せらる。(山葵菜)。——**ぢ-ろし**［山葵卸］(名) 銅製又は陶製にて面に小き突起ありてわさびを擦(ス)りおろすもの。(薑擦子)。——**ぢ-やちゆ**(ケーショ)［山葵醬油］(名) 擦(ス)りたるわさびを加へたる醬油。——**すまし**［山葵清］(名) 一種の料理、醬油と味醂との煮出汁の中に、山葵をすりおろしたる汁をまじへたる吸物。——**づけ**［山葵漬］(名) わさびを酢又は鹽に漬けたるもの。——**もち**［山葵餅］(名) わさびを搗(ツ)き込みたる餅。

［びさわ］

わざ-びと［俳優］(名) わざをぎ。やくぎや。

わざ-びと［業人］(名) 技術のすぐれたる人。「もの。

わざ-ば［早穂］(名) 早稲の穂。

わざもの［業物］(名) 野菜などのはしり。はしり

わざもの［業物］(名) 名工の鍛(タ)ひつくりたる鋭きれもの。(快刀、利刀)。

わざ-わざ［態態］(名、副) ㊀特別になすさまにいふ語。㊁故意になすさまにいふ語。

わざ-わざし(シケレ)**く**［態］(形、二) ことさらなるさまなり。故意なるさまなり。

わざ-をぎ［俳優］(名) ㊀さまざまの面白く可笑しき事をなして舞ひ歌ひ神人の意を和ぐるもの。又、其技を演ずる人。㊁役者。

(わ-きん［和謹］(名) 【佛】經文の偈(ゲ)を和語にて謠ふもの。

(わ-さん［和産］(名) 日本の產出。

(わ-さん［和算］(名) 我國在來の算術、算盤にて行ふもの。

わし［鷲］(名) 【動】猛禽類中たか科に屬する鳥、大形にして翼を張ること一丈餘に達するものあり、背・翅は黑色にして腹部は白く、爪強く、嘴銳し、強鷙猛烈にして狐・狸などを捕食す、我國の深山にも產すれど、「アジア」大陸に最も多し。(鵰)。

［しわ］

(わし［私］(名) 「わたくし」の略言。

(わ-ぢ［和字］(名) ㊀日本の文字。假名。㊁日本にて作りたる漢字、即ち辻・峠の類。(國字)。

(わ-ぢう［和讃］(名) 他人の詩歌に和したる詩歌をもくなると。

(わ-ぢふ(シ)［和習］(名) 日本國のならひ。

わぢま-ぬり［輪島塗］(名) 能登國輪島より多く產出する漆器、堅牢にして最も食器に適す。

わ-ジャウ(ショウ)［和上］(名) 【佛】「ワジャウ」(和尚)に同じ。(眞言宗にていふ)。

わ-ぢゃうらう(ショウロウ)［和上郎］(名) 婦人の對稱の代名詞。(和上頭)。

(わ-ぢゆく［和熟］(名) やはらぎむつむこと。仲よき

(わ-ぢゆん［和順］(名) 氣候の順なること。時氣のおだやかなること。

(わ-ぢよ［和書］(名) 和文の書物。

わし-る(ラリ)**る**(ラレ)(自、ら四) 「はしる」に同じ。

(わ-ぢん［和親］(名) 國際間のよしみ。またしみ。

わ-すせ(シ)**す**(サ)、［和］(自、さ變) 「くわすに同じ。

わ-すせ(シ)**す**(サ)、［和］(他、さ變) 「くわすに同じ。

わする(ラレ)**る**(ラレ)。［忘］(他、ら下二) ㊀記憶なくなる。既往を忘れて居らず。㊁かれて思ひたるに、心づかずして打過ぐ。㊂おきわすれをなす。(遺)

わすれがたみ［忘紀念］(名) ㊀忘れぬための紀念物。㊁父の死後母の胎內にのこる子。(遺腹)。

(わ-すれ-がち［忘勝］(名) わすれやすきこと。

わすれ-ぐさ［忘草］(名) ㊀萱草の一名。㊁鹿葱の異稱。

わすれ-がも［忘鴨］(名) わかれがも。

わすれ-ぬ(ナ)**よすが**(名) むかひめ。本妻。

わすれ-ぬっ-ぼい(形) わすれ易し。健忘なり。

わすれ-みづ［忘水］(名) 野中などを流れて人の知らぬ水。

わせ［早稻］(名) 【植】稻の一種、最も早く熟するものゝ、なかで又はおくてに比すれば粒小し。

(わ-せい［和製］(名) 日本にて製したるもの。

わせ-だ［早稻田］(名) 早稻をつくる田、「ね。

(わ-せん［和戰］(名) 和すると戰ふと。

(わ-せん［和船］(名) 我國在來のつくりかたのふね。

わた［海］(名) うみ。

わた［曲］(名) まがりたること。

わた［腸］(名) はらわた。

わた［綿］(名) ㊀眞綿(ワタ)。㊁もめんわた。㊂【植】「きわたに同じ。

わた［私］(代) わたくし。わたし。

わた-いれ［綿入］(名) 衣と裏とありて、中に綿を入れて縫ひたる衣。わたぎぬ。(袷衣)。——**ぎも**の［綿入着物］(名) 着物の綿入なるもの。——**ばおり**［綿入羽織］(名) 羽織の綿入なるもの。

わた-ぢ(ト)［我黨］(代) なんぢ等。其方だち。

わたし［渡］(名) ㊀わたすこと。㊁ふなわたし。㊂わたしば。(津)。——**がね**［渡金］(名) ㊀てっ

わたりの和製の紙。

わたり-ち［綿打］(名) ㊀うち綿をつくること、又、其の職人。(彈花匠)。㊁わたうちゆみの略言。——**ゆみ**［綿打弓］(名) 「わたゆみ」に同じ。

わた-か［腸香］(名) 【動】喉鹽類に屬する魚、形鰡に似、體長五六寸、暗苔(ヒ)し、酢醬として珍重せらる、淡水に棲息す、琵琶湖の產最も名あり。(鮠魚)。

わだかまり［邪曲］(名) 心中に妄念あること。よこしま。

わだかまる(ラリ)**る**(ラレ)、［蟠］(自、ら四) 輪狀にかゞまりめぐる。うづなりにまかる。(盤)。

わた-ぎぬ［綿衣］(名) わたいれ。「袷とほしたる、—の、汗のかなどかわき。

わたくし［私］(名) ㊀個人間の關係なること。一身上の事件なること。公事にあらざること。㊁內密なること。ない事なること。公然にあらざること。㊂かたぶちなること。かたひいきなること。公平にあらざること。㊃自己一己にて占有すること。ひとりにて持つこと。㊄自己のみの利益をはかること。味方のひのためをたくらむこと。——**ごと**［私事］(名) わたくしなる事柄。——**ごま**［私樣］(名) 前條に同じ。

もの［私物］(名) 自分一身のもの。

わたくし［私］(代) 自稱の代名詞。わたし。

わた-くり［綿繰］(名) ㊀綿につゝまれたる綿種をくりてとること。㊁「わたくりぐるま」の略言。——**ぐるま**［綿繰車］(名) 綿花をとりて其綿種を擂(カ)き去る具。(擂車)。

わた-げ［綿毛］(名) にこげ。うぶげ。

わた-こ［綿子］(名) 小兒などの綿入の衣服。

わたし［渡］(名) ㊀わたすこと。㊁ふなわたし。㊂わたしば。(津)。——**がね**［渡金］(名) ㊀てっ

きう」の一名。㊁耳鹽の上にわたしかけて、はぐるめの具を越(ノ)する板。——せん[渡錢](名)船渡の賃錢。——ちん[渡賃](名)前條に同じ。——ば[渡場](名)ふなわたしのある所。渡船場。——ぶね[渡船](名)渡場にて人其他のものをのせて渡す船。——もり[渡守](名)渡船のかこ。わたりもり。(津人、渉人)。

わたし[私](代)「わたくし」の略音。

わたす[渡](他、さ四)㊀船又は筏にのせて水の上なこの岸よりかの岸へ送りやる。㊁此方より彼方へ引き張る。(亟)。㊂此方より彼方へむくり移す。(徙)。㊃交付す。さづく。㊄あまねく及ぼす。むよぼす。㊅濟度す。すくふ。

わたせ[渡瀬](名)川瀬の渡るべきところ。

わただね[綿種](名)綿の中につゝまれたる種子。——あぶら[綿種油](名)綿種より搾(シ)り取りたる油。

†わたたび[水天蓼](名)【植】(ス)「ギンエ」の古稱。(ヨ)「またたび」の古稱。

わたたる[腸檜](名)者屋又は料理屋などにて、魚の腸を入れおく桶。

わたち[轍](名)車の輪の痕(ア)。

†わたつ[海](名)㊀海のつゝみ。うみ。㊁海の神。

†わたつみの[海](名)はそどの。殿下。

†わたつみの[海殿](名)海のもなか。

†わたに[腸煮](名)一種の料理。鰒(ビ)の肉と其腸とを煮たるもの。

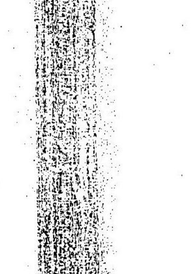
わたぬき[綿抜](名)綿入れの綿を抜きたる袷。

†わたぬき[腸抜](名)腸をぬき去りたる魚。

†わたの-そこ[海底](名)うみぞこ。「海原」。

†わたの-はら[海原](名)うなばら。おほうみ。

わたの-はらあ[綿帽子](名)眞綿を摘(ツ)みひらげてつくりたる帽子。もとは老官女の用ひしものなりしが、後世には、婚禮にて新郎の顔を被(オ)ふに用ふ。かづきわた。(紙帽)。



「の造花。

†わた-ばな[綿花](名)男蹈歌の時にかざし、綿

†わた-ぼし[渡座](名)やうつり。ひきこし。

わた-ゆみ[綿弓](名)繰(ク)綿をはじき打ちて打綿とする具。形弓の如くこれに弦(ツ)をかく。弦はもと牛の筋を用ひしが、今は鯨の筋を用ふ。

†わたらひ[渡](名)よわたり。すぎはひ。(渡世、生計)。

わたり[辺](名)あたり。ほとり。

わたり[渡](名)㊀わたること。㊁わたしば。㊂わたりもの。(津)。㊃外國よりの船來。「古ー」。(徑)。——あ-ふ(ハ)わたりいた。㊄さしわたし。——ふ-ぶ(ハ)[渡合](自、は四)きりあふ。たゝかふ。——いた[渡板](名)船より岸へかけわたす通路の板。あゆみいた。(板道)。——かせぎ[渡稼](名)此處彼處とへめぐりて稼をいとなむこと。——おは-が[渡川](名)みつせがは。三途川。「泣く涙、雨と降らなん」。——せ[渡瀬](名)かちぞめ[渡始](名)橋の落成して開通式を行ふとき、始めて其橋を渡ると、多くは高齢の人を渡らす。(所橋)。——だん[渡段](名)わたりせに同じ。——で[渡出](名)「わたりせ」に同じ。——どの[渡殿](名)「わたどのに同じ。——どり[渡鳥](名)季節を定めて來去する鳥。即ちつばめの類。(候鳥)。——ば[渡場](名)㊀わたるべき場所。㊁わたしば。——びと[渡人](名)わたり奉公するもの。——ぶね[渡船](名)わたしぶね。——ぼりとり[渡奉公](名)此處彼處と主人を更へ奉公してあるくこと。——もの[渡物](名)㊀外國より船來したる品物。㊁わたり奉公する者。㊂主人より渡る給料。——もり[渡守](名)「わたしもり」に同じ。——そつげる 交渉す。

わた-る[渡](自、ら四)㊀此岸より彼岸へ越(コ)え行く。(濟)。㊁一方より一方へ橋き行く。(亟)。㊂此處より彼處へ徙(ウ)り行く。「わたる日の影もかくるひ」。㊃彼地より此地へ來り著く。㊄遍く(子)及ぶ。ひろく至る。「世ひろく」。㊅ひろく通ず。あまねく知る。「諸書に—」(渉)。㊆經過す。すぐ。「世を—」。㊇たまはる。さづかる。「給料が—」。

†わだ-わだ[戰戰](名、副)わな〳〵。

(わだん[和談](名)和睦の相談。

わ-ちがひ[輪違](名)紋所の名。二つの輪の打ち違へて半ば重なりたる形をなせるもの。

†わち-き[吾](代)わたし。わたい。

わづか[纔](名、副)㊀すこしばかり。いさゝか。(僅)。㊁かつ〳〵。

†わづき[差別](名)わかち。

わづく-る[輪作](自、ら四)まるくなる。わなりになる。「負ふと。

わっそく[速](名)右の肩より左の腋にかけて太刀を背

ワット[Watt](名)【理】工率の單位。一馬力の七百四十六分の一。電氣工業に用ひらる。

わっと(副)急に聲をあげ又は泣き出すさまにいふ語。「—たまぎる女の泣聲」。

わっぱ(名)㊀《わらはこの音便》童子をのゝしりていふ語。㊁並子の無理わがまゝをいふこと。

わっぷ[割賦](名)わりつくること。くばること。わりつけ。——きん[割賦金](名)わりつくる金。

わづらはし(ワツラシ)[煩](形、シク)㊀うるさし。いとはしゝ。めんどうなり。㊁亂れて秩序なし。をきめ易からず。㊂繁多なり。ものげし。いそがし。——が-る(ラ四)[煩](自、ら四)いとはしく思ふ。うるさがる。

わづらはす(ワツラ)[煩](他、さ四)㊀くるしむ。なやます。㊁手數をかく。面倒をかく。(累)。

わづらはせる(他)「わづらはす」の訛。

わづらひ(ワイツ)[煩](名)㊀わづらふこと。なやむこと。くるしむこと。㊁病氣にかゝること。やむ。

わづらふ(ワツラ)[煩](自、は四)㊀惱み思ふ。くるしみもだゆ。㊁病氣にかゝる。やむ。

わ-ざら[話頭](名)はなしのこぐち。

わざをの[和殿](名)對等に用ふる對稱の代名詞。

わざめ[輪留](名)阪を上下するとき、車輪の走り下らぬために裝置するもの。

わ-ど-る(ラ四)[輪取](自、ら四)輪狀をなす。

わね[綯](名)㊀繩を輪狀にし、獲獸の脚にかけて、縛して之をとらふるもの。(係蹄)。㊁詭計を設けて人を陷るゝもの。

†わね-く(カ下一)[絞](自、か四)くびる。

ワナヂウム[Vanadium](名)【化】銀に似たる脆き稀有の金屬。

わねてん[輪索天](名)「けきらヂピロード」の一名。

わねなき-どぶ[戰慄聲](名)わなゝきふるふこゑ。

わねね-く(カ下一)[戰慄](自、ら四)身體ふるひ動く。をのゝく。

わねみ[吾](代)對稱に用ふる自稱の代名詞。

わね-わね[戰戰](名、副)わなゝきふるふさまにいふ語。わなゝく。ふるゝく。わだゝく。

わぬり[輪形](名)輪のかたち。圓狀。

ワナン[和南](名)【佛】梵語Uandami)禮拜。

わに[鰐](名)【動】「がくぎょ」(鰐魚)に同じ。

あし[鰐足](名)人の歩みざま、其兩足のさきを、外に向くるをそとわにといひ內に向くるをうちわにといふ。——ぐち[鰐口](名)㊀【佛】佛堂の前面にかけつる方圓の具。扁圓中空にして下方に横に長き口あるもの。其前に布にて繩(ヒ)みたる繩をつるし下ど、詣でたるもの、其繩をとりて打ち鳴らす。ごんぐ。㊁人の口の横に廣きもの、稱。——ぎめ[鰐鮫](名)【動】(ス)「ふか」の「名。(ろ)「わにの一名。

ワニス(名)《イギリス語Varnishの訛》一種の塗料。樹脂をアルコホル又は「エーテル」若しくは「テレビン」油に溶解したるもの、總稱。(假漆)。

わ-ぬし[吾主](代)對稱の代名詞。

わ-ぬけ[輪抜](名)身ををどらせて輪をぬけくぐる曲藝。

わのり[輪乘](名)輪の如くに馬を乘り廻(ム)ら

わび[侘](名)㊀思ひ煩ふこと。㊁わびずまひ。幽居。

わび[詫](名)過を謝すること。謝罪。——い-る(ら四)[詫入](自、ら四)ひたすらにわびをいふ。ひたあやまりにあやまる。

†わび-うた[侘歌](名)わびしさにくちずさむ歌。

わび-ごと[侘言](名)わびることば。

わび-ごと[詫言](名)謝罪の言。

†わび-どる[侘](名)㊀わびしさに發する聲。

わび-し(しくしき)[侘](形、シク)㊁難儀なり。なやましし。㊂さびし。靜かなり。

わび-ずみ-ひ[侘住](名)わびしきすまひ。(幽居)。

わびる(他)「わび」の訛。

わ-ぶ(ば)[侘](自、は上二)㊀思ひわづらふ。心配す。もだゆ。㊁靜かに住む。さびしくくらす。

わ-ぶ(ば)[詫](他、は上二)謝す。あやまる。

わ-ふう[和風](名)㊀わたゝかき風。春の風。㊁「地」樹藥を動かす程の風。

わ-ふく[和服](名)日本從來の衣服。

わ-ぶん[和文](名)日本の國文。

わ-へい[和平](名)やはらぎてたひらかなること。

わ-ぼく[和睦](名)㊀やはらぎむつむこと。(和熟、和合)。㊁たひらぎ。なかなほり。

わ-みやう[和名](名)物事の日本に於ける名。

わめ-く(カ四)[叫、喚](自、か四)をめく。

わ-やう[和洋](名)日本と西洋と。——せつちゆう[和洋折衷](名)日本風と西洋風とをとりあはすこと。

わやう[和樣](名)日本のさま。日本の風。

わやく[和譯](名)外國の言語文章を日本の言語文章になほすこと。

わやく(名)無理なる言。邪魔をなす言。「—をいれる」。(京阪地方の方言)。

わや-わや(名、副)多人數の聲の亂れ聞こゆるさまにいふ語。(嗷嗷)

わら[藁](名) 稻又は麥の莖を乾(ホ)したるもの。
わら-うち[藁打](名) 藁を柔かにするため杵にてうちたゝくこと。
＋わらうづ(ワラウヅ)[藁沓](名)「わらぐつ」の音便。
わらか-すがし(ワラカスガシ)[笑](他、さ四) わらはす。
わら-がとび[藁圍](名) わらにかこふこと。
わら-がみ[藁紙](名) 藁を原料として漉(ス)きたる紙、裂け易し。「はらゝぐ。
＋わら-ぐつ(ワラグツ)[藁沓](名) 藁を編(ア)みてつくりたる履、雪中などを行くに穿つもの。わらんず。
わら-ざ[藁座](名)「ゐんざ」(圓座)に同じ。「草座。
わら-ざうり(ワラザウリ)[藁草履](名) 藁にてつくりたる
わら-ざべ[藁](名) 稻の藁の心(シン)。わらみご。
わら-すべ[藁](名) 前條に同じ。
わら-ぢ[草鞋](名)「わらんぢ」の略言。——く
ひイ[草鞋食](名) 草鞋のはなをにすれて足のいたむこと。——むし[草鞋蟲](名)【動】「むめむし」に同じ。
わら-づつみ[藁苞](名) 次條に同じ。
わら-づと[藁苞](名) 藁にて編みたる苞(ツト)。藁にて包みたるもの。
わら-にんぎやう(ワラニンギヤウ)[藁人形](名) 藁を束ねてつくりたる人形。(贄人、藁人。
わら-は(ワラハ)[童](名) ㊀十歲前後の兒供。こども。わらはべ。わらべ。㊁召仕の兒供。童男女。(僮)。
わらは-あそび(ワラハアソビ)[童遊](名) 兒童の遊戲。
＋わらはは-ねひ(ワラハハネヒ)[童生](名) 兒童ゐひたち。
わらはは(ワラハハ)[妾](代) 婦人の自稱の代名詞。「む。
わらはは-か-す(ワラハハカス)[笑](他、さ四) 笑はし
＋わらはは-ぐ(ワラハハグ)[ぜぜぜぜ]〔笑〕(自、か下二) 童のさまに見ゆ。
わらはは-げ(ワラハハゲ)[童氣](名) こどもらしきこと。
わらはは-ごころ(ワラハハゴコロ)[童心](名) こどもこゝろ。わらふべし。をかし。
＋わらはは-しふ(ワラハハシフ)[笑](形、二) わらふべし。
＋わらはは-ずがた(ワラハハズガタ)[童形](名) こどものすがた。
＋わらはは-ずるおん(ワラハハズルオン)[童隨身](名) 童にして隨身をつとむるもの。
＋わらはは-てんおゆ(ワラハハテンオユ)[童殿上](名) 古昔、禁中の作法を見習ふため、貴人の子の殿上につかへしもの。「きのともだち。
わらはは-ともだち(ワラハハトモダチ)[童友達](名) をさなき時の名。
＋わらはは-ねな(ワラハハネナ)[童名](名) 童の如くに泣くこと。
わら-はひ(ワラハヒ)[蘰](名) 藻を燒きたる灰。
＋わらはは-べ(ワラハハベ)[童部](名) (「べ」は群の義) ㊀召仕の兒供。(僮)。ども。わらんべ。わらべ。㊁召仕の兒供。(僮)。
わらはは-まひ(ワラハハマイ)[童舞](名) わらはのなすまひ。
＋わらはは-めを(ワラハハメヲ)[童女](名) 女のわらは。
＋わらはは-やみ(ワラハハヤミ)[瘧](名) ぎやく。おこり。「—をしてあたりびに待りければ。
わらひ(ワラヒ)[笑](名) わらふこと。㊁あざけり。ものわらひ。嘲、嘲笑。——**をもらす** 少しく笑ふ。
わらび[蕨](名)【植】水蹄科に屬する羊齒植物、地下莖は長く地中に匍匐す、春の頃嫩葉を出す、其端末まきて形拳の如し、成長すれば長大なる葉となる、葉は長き葉柄を有し數回複葉にして小葉は鋸刻あり、嫩葉は食用に葉柄は種々の用に供せられ、根莖よりは澱粉を採取す。
わら-び[藁火](名) 藁をもす火。
わらひ-い-ゐ(ワラヒイヰ)[ぢりゐる][笑入](自、ら四) いたわらひ。「くわらふ。
＋わら-ふた(ワラフタ)[藁筆](名) わら巻にてつくりたるもの。
わらひ-がほ(ワラヒガホ)[笑顏](名) わらふかほつき。
わらひ-ぐさ(ワラヒグサ)[笑種](名) 笑ふべき種。(笑資)。
＋わらひ-きか-ゆ(ワラヒきかゆ)[笑樂](自、や下二) いたくよろこばしげにわらふ。ゑみさかゆ。
わらひ-おやうど(ワラヒオヤウド)[笑上戶](名) 醉へばよく笑ふ癖の人。又、つねによく笑ふ癖の人。
わらひ-たけ(ワラヒタケ)[笑茸](名)【植】菌類の一、有毒にして、食へば人をして笑はしむといふ。まひだけ。をどりたけ。
わらび-で[蕨手](名) ㊀拳の形をなせる早蕨、さわらび。㊁早蕨の如く卷曲せる形のもの。
わらび-ねは(ワラビネハ)[蕨繩](名) 蕨の根莖をもつてなひたる繩、色黑くよく水に堪ゆ。
わらび-の-と[蕨粉](名) 蕨の根莖より採取したる澱粉、蕨糊又は蕨餅などに製す。
わらび-のり[蕨糊](名) 蕨粉にて製したる糊、柿澁に加へて傘・提燈・雨具などをはるに用ふ。
わらひ-ボトケ(ワラヒボトケ)[笑佛](名) 傳大士(フダイシ)の像を
わらひ-ぼん(ワラヒボン)[笑本](名) 笑話の冊子。「見よ。
わらび-もち[蕨餅](名) わらびのこを葛ねりの如くに製したる餅。墨廣。
わらひ-ゑ(ワラヒエ)[笑繪](名) まくらゑ。春畫。
わら-ゐ(ワラヰ)[ぢぢぶ][笑](自、は四) ㊀喜び又は興じて、壓を立て又は面色をくづす。㊁蓋(ツボ)ひらく。花さく。咲。㊂縫目はなれあく。「ゐ。(咲)。
わら-ふ(ワラフ)[ぢぢぶ][笑](他、は四) あざける。そし
わら-ぶき[藁葺](名) 屋根を藁にて葺くこと。又、其屋根。——**ねや**[藁葺屋根](名) 藁にて葺きたる屋根。又、其家。「屋。
＋わら-ふた(ワラフタ)[藁筆](名) わら巻にてつくりたるもの。

わら-ブトン[藁蒲團](名) 稻のかはりに藁のはかまを入れたる布團。
わら-べ[童](名)「わらんべ」の約言。
わら-べと[稚](名) わらの心。わらすべ。
わら-むしろ[藁莚](名) 藁にてあみたるむしろ。
わら-や[藁屋](名) わらぶき屋根の家。
＋わら-らか[笑](名) にこやか。
わらんぢ[草鞋](名)《「わらんづ」の轉》藁にてつくれる一種の履物、緒長くして周邊に乳あり、緒を乳に通して足にむすびつくるもの。
＋わらんづ[草鞋](名) わらぢつ。わらうづ。
わらんべ[童](名)「わらはべ」の音便。
わら-わら(名、副) 散りひだるゝさまにいふ語。
わり[割](名) ㊀わると。㊁割前。割合。㊂十分の一の歩合。
わり-あ-つ(ワリアテツ)[割宛](他、た下二) 分けてあてがふ。分配す。
＋わりあてる(他)「わりあつ」の訛。
わり-あひ(ワリアイ)[割合](名) ㊀歩合。比。㊁くらべ。比較。——に[割合](副) ㊀比較して。くらべて。㊁案外に。
わり-いん[割印](名) 分離せる二個の書面に、其互に相連なれることを證するため、雙方へかけて一個の印を捺すもの。ふしきり。(半印、分契)。
(わりう)[和流](名) 日本の流。我國の體。
わり-がき[割書](名) 本文の間に註を割りて書き入れたるもの。
＋わり-き[割木](名) 割りて細くしたるたきぎ。薪。(京阪地方の方言)。
わり-ぐり[割栗](名)「わりぐりいし」の略言。
——**いし**[割栗石](名) 地形(ヂギ)のとき礎の下につめこむ石。「るもの。
わり-ご[破子](名) 一種の辨當箱、内に薪きりあるもの。
わり-こみ[割込](名) 芝居にて、樓敷又は土間などの一法きりの内に、同伴にあらざる人と共に坐すること。(東京の方言)。
わり-こ-むしめる(ワリコムシメル)[割込](自、ま四) 間に押し入る。
わり-ざん[割算](名)【數】一數が他數の幾倍にあたるを見出す算法。除法。
わり-ざた(名) 鳥肉などを煮るつゆ、味醂と醬油とをわりたるもの。
わり-だし[割出](名) ありだすこと。
わり-だす(ワリダス)[割出](名)(自、さ四) ㊀起算す。算出す。㊁もとゞきて考へ出す。
わり-ちゅう[割註](名) 割書の註。(挿註)。
わり-つ-く(ワリツクケ)[割附](他、か下二) 割りてあてがふ。わけて配る。わりふる。
わり-つけ[割附](名) わりつくること。
(他)「わりつくの訛。
＋わり-ね[無理](名) わりなきこと。
＋わり-ねし(ワリネシ)[無理](形、し) ㊀ことわりなし。㊁區別なし。㊂せん方なし。仕樣なし。㊃はなはだし。かぎりなし。
わり-ね-しき(ワリネシキ)[別無](形、し) 未だしくして隔てなし。互に親密なる關係なり。「なく。
わり-ねしに[理無](副) はなはだしく。かぎり
わり-ばきみ[割挾](名) 竹などの端をわりて物をはさむもの。
わり-ばし[割箸](名) 一本の杉の木の小さき薄に割目を入れ、おき、割れば箸となるやうにつくりたるもの。
わり-はん[割判](名) わりいん。「るもの。

わり-びき[割引](名) ㊀一定の價格の中より若干の額を減ずること。㊁手形割引。——**ぶあひ**(イ)[割引高](名) 割引すべき金高。——**ぶあひ**(イ)[割引歩合](名) 割引を行ふときの利率。
わり-びし[割菱](名) 武田菱。
わり-ふ[割符](名) ㊀木片に文を記し、これを二つに割りて證印を間に押したるもの、一片を與へて他の一片をとゞめおき、合はせ見て後日の證となすもの。(符契、符節)。㊁すべて合せ見て後日の證となすもの、一種。「札。
わり-ふだ[割札](名) ㊀前條に同じ。㊁割引の
わり-ふ-るる(ワリフルル)[割振](他、ら四) わりつく。
わり-まし[割增](名) 一定の額より若干の額を增し加ふること。
わり-まつ[割松](名) 割りたる松のまき。
わり-まへ(ワリマヘ)[割前](名) 割りあつる高。分配の額。わけまへ。當配。
わり-むぎ[割麥](名) ひきわりむぎ。
わり-め[割目](名) わりたるきめ。
わり-もどし[割戻](名) わりもどすこと。又、其額。
わり-もど-す(ワリモドスケ)[割戻](他、さ四) 一旦受取りたる金額の中幾分を戻す。
わり-わた-す(ワリワタス)[割渡](他、さ四) わりつく。
わる[惡](名) ㊀わるきこと。㊁わるもの。
わ-る(ワルル)[割](他、ら四) ㊀こはす。さく。くだく。やぶる。㊁わけ離す。ふし開く。㊂二つ以上にわけ定む。㊃配賦す。くばる。㊄割算をなす。除す。
わ-る(ワルル)[割](自、ら下二) ㊀損じ離る。裂けこはる。㊁二つ以上に分る。わかる。㊂成立せず。とゝのはず。
わる-あそび[惡遊](名) ㊀よからぬあそび。㊁

特に捷奕又は惡所がよひなどの稱。「ら。

わる-いたづら[惡戲](名)人の害となるいたづら。

わる-がしこし[惡賢](形、一)性質よるしからずして才氣多し。廢物なり。

わる-き[割木](名)たきゞ。まき。(中國地方の方言)

わる-き[惡氣](名)惡意。

わる-くしたら(副)ことによると。或場合には。

わる-くする-と(副)前條に同じ。

わる-くせ[惡癖](名)よからぬくせ。

わる-くち[惡口](名)あしざまにいふこと。のゝしること。おくこう。惡言。

わる-ぎ[惡作](名)いたづら。——**ど**[惡作子](名)いたづらなる子。わんぱくなる子。

わる-しこし[惡賢](形、一)「わるしこ」に同じ。

わる-おやれ[惡洒落](名)㊀つたなきたはむれごと。㊁身なりのかざりやうのつたなきこと。

わる-ずれ[惡擦](名)世にすれてあしくなること。

わる-だくみ[惡巧](名)あしきたくらみ。

わる-ち[惡血](名)毒分あり又は腐敗などせる血。

わる-ぢゑ[惡智慧](名)惡事をなす才能。

わる-びる(自、ら下二)「わろびる」に同じ。

わるびれる(自)前條の訛。

わる-ふざけ[惡巫山戲](名)過度のふざけ。

わるもの[惡者](名)㊀卑劣なるもの。㊁惡事をなす人。性質よからぬ徒。(惡漢)。

われ[割](名)㊀わるゝこと。又、われたるもの。㊁互に勝負なきこと。

われ[我、吾](名)㊀自分の國。又、自分の味方。㊁自我。自身。——**にかへる**よみがへる。正氣になる。

われ[我、吾](代)㊀自稱の代名詞。おのれ。(予、余)。㊁對稱の代名詞。なんぢ。

われ-れさらば-と[我不劣](副)互に先をあらそひて。きそひて。

われ-われ[我彼](名)自身を自身か他人かと思ふほど心のほゝゝと。「一の氣色」「一の心地」。

われ-かしこ-に[我賢](副)かしこぶりて。たかぶりて。

われ-がち-に[我勝](副)互に競ひあひて。

われ-さきに[我先](副)前條に同じ。

われ-あらず[我不知](副)無意識に、思はず。

＋われ-げく[我猛](副)得意となりて驕たかく。

＋われて[破](副)あながちに、無理に。是非に。

＋われ-と[我](副)㊀自ら信じて。自ら恃じて。㊁我かち。みづから。——**れもあふ**自ら信じて最もすぐれたりとなす。

われ-と-は-なし-に(副)われ知らず。思はず。

＋われ-にて[我](副)自分の身にくらべて。

われ-にもあらず[不我](副)㊀われ知らず。われとはなしに。㊁心に任せず。不本意ながら。

＋われ-は-が[我顏](名)我は斯くぞと皆ゴミ。れる顏つき。自慢せる面持。

われ-は-と(副)「我」に同じ。

われ-ひと[我人](名)われもひとも。自他。

＋われ-ぼめ[我褒](名)自ら自分をほむること。ま。

われ-め[破目](名)切れたるところ。

われ-もかも[破帽額](名)[植]薔薇科に屬する草。一根に數十莖叢生す。莖藤に似、羽狀複葉なり、秋の頃、數莖ぬき出でゝ、莖頂に花を著く、花は小形にして穗狀に排列し、淡色又は紅白色を呈す。觀賞用として栽培せられ、嫩葉は食用に供せらる。あやめたむ。えびすれ。(地檢、吾木香、我毛香)。「と。

われ-も-われ-も-と[我我](副)われもとらじ

われ-ら[我等](代)㊀わがともがら。われ〜。㊁其方だち。汝等。

われる[割](自)「わるの訛。

われ-われ[我我](代)わがともがら。われら。

——ども[我我共](代)前條に同じ。

わろ-し[惡](形、一)㊀善からず。あし。わるし。㊁劣りてあり。つたなし。「る。隱す。

わろび-る[廬](自、ら下二)こゝろおくれする。

＋わろ-ぶ[惡](自、は上二)わろく見ゆ。

＋わろ-もの[惡者](名)「わるもの」に同じ。

＋わわ-く(自、か下二)みだれやぶる。みだれさわぐ。

＋わわく-る(自、ら四)「わわく」に同じ。

＋わわけ(名)つゞれ。ぼろ。

＋わわ-し(形、一)さわがし。

＋わわらば-に(副)みだれにみだれて。

わ-ゐん[和韻](名)他人の詩作の韻を用ひて答詩を作ること。

わん[椀](名)㊀食物を盛る木製の器。多くは漆塗にしたるもの。㊁椀に盛りて出す肴。㊂わんもりの略。

わん[灣](名)海水の彎曲して陸地に入りこみたる所。いりえ。うら。「入海、海灣」。

わん[腕](名)うで。「袖至—」。

わん—[灣](接頭)亞洲にて、或物事に歷して內地のものより劣等なる意を表する語。「—官吏」。

—わん[椀](接尾)椀にもりたる飲食物を數ふる語。

わん[唁](感)犬の吠ゆる聲。

わん-きよく[彎曲](名)弓なりにまがること。

わん-くつ[彎屈](名)まがりかゞまること。

古語　個語方言　字音

わんげ[灣月](名)ゆみはりづき。うゝを形成する八個の小丹。

わん-とつ[腕骨](名)人力現。

わん-ぬや[腕車](名)兒供が無理をいひ又はたづらをなすとき。小供のふるまひの手にあまること。「同じ。

わん-ぱく[腕白](名)又、其小供。わっぱ。

わんもり[椀盛](名)「ちゃわんもり」(茶碗盛)に同じ。

わん-りう[灣流](名)[地]大西洋に於ける赤道流の一。メキシコ灣より東北に流れて「ヨーロッパ」の西岸に達して南流するもの。

わん-りよく[腕力](名)㊀腕の力。㊁うでだて。ちからづく。——**ざた**[腕力沙汰](名)けんくわ。なぐりあひ。くみうち。

わん-わん[唁唁](名、副)㊀犬の鳴くさまにいふ語。㊁轉じて犬の稱。(小兒の語)。

ゐ

ゐ　母音うを從音とし母音いを主音としたる綴音。

ゐ[井](名)地を掘りて地下の水をたゝへ、これを汲みて取るやうにしたるもの。ゐど。「堤)。

ゐ[堰](名)用水をたゝへおくところ。ゐせき。(堰

ゐ[猪](名)[動]いのしゝ。又はぶたなどの總稱。(ゐ)「ゐのしし」の特稱。

ゐ[亥](名)㊀十二支の一、最終のもの。㊁晉時の時の名。今の午後十時に當る。㊂方角の名。西北の北によりたる方。

ゐ[蘭](名)[植]燈心草科に屬する草。濕地に生ず、莖は長圓形にして密生す、即ち細節(ホソ)・太節(フト)。

ゐ[居](名)ゐること。をること。

ゐ[胃](名)㊀消化器の主要部、高等動物のは食管中特に膨大せる部にして筋肉質の大囊なり、胃壁は數層の筋肉より成り、內部に無數の胃腺ありて胃液を分泌す。㊁[天]二十八宿の一。

ゐ[蝟](名)[動]「はりねずみ」に同じ。

ゐ[帷](名)横に引き張りてかこひとなすたれぎぬ。ひきまく。——**をくだす**[下帷](名)塾の總稱。

ゐ[圍](接尾)兩手をひろげてかゝふる大きさ。およそ六尺なり。「一の琴」。

ゐ[威](名)他を畏服せしむるいきほひ。ゐくわう。

ゐ[圍](接尾)兩手をひろげてかゝふる大きさ。

ゐ-あい[遺愛](名)死者の生前に愛したるもの。

ゐ-あい[畏愛](名)おもんじ恐たしむと。

＋ゐ-あかす[居明](他、さ四)ゐて夜をあかす。夜のあくるまでゐを居る。

ゐ-あく[帷幄](名)㊀ゐけばりとひきまくと。㊁ゐる。作戰を計畫する陣所。

ゐ-あつまる(自、ら四)あつまりゐる。

ゐ-あは-す(ワス)[せさせすせる](居集)[自、ら四]ゐあつまりも共所にて居る。

ゐ-あはせる(自)「ゐあはす」の訛。

ゐ-あん[慰安](名)㊀なぐさめやすんずること。㊁やすらかにもちつくこと。

ゐ-あひ(イア)[居合](名)劍術の一派、坐りたるまゝ佩刀を自在に拔き、敵を切り又は敵となゝかふもの。「林崎重信より起る。——**ぬき**[居合拔](名)大道などに長き佩刀を自在に拔く藝を演ずるもの。

ゐ-い[透迤](名、副)斜に行くさまにいふ語。

ゐ-い[遺意](名)㊀死者生前の意思。㊁古人の後世にのこしたる意匠。

ゐ-いう[畏友](名)皿んじうやまふべき友人。

ゐ-いん[遺音](名)古人の後世にのこしたる音。

ゐ-えき[胃液](名)胃腺の分泌せる消化液。「調。

ゐ-かい[位階](名)くらゐの主な、現今にては一位より八位まで各正從ありて、都合十六階なり。

ゐ-かい[遺骸](名)死人の體軀、なきがら。

ゐ-かう(ワコ)[遺稿](名)死後に遺コしたる草稿。

ゐ-かう(ワコ)[遺香](名)のこれるかをり。

ゐ-かう(ワコ)[雜綱](名)㊀ゐはもと。㊁ゐはづな。

＋ゐ-がくる[居隱](自、ら下二)隱るゐるやうにして居る。「稱。

ゐ-カタル[胃加答兒](名)溜飲又は食滯等の總

ゐ-かは-る(ワル)[居替](自、ら四)かはりて居る。「職。

＋ゐ-かひ(イカ)[猪養](名)古語、ゐのこを飼養せし

ゐ-かん[遺憾](名)のこりをしきこと。殘念。

ゐ-かん[遺勘](名)天子のおほせにそむくこと。

ゐ-がん[偉岸](名)體軀大いにして人品のきはだつこと。

ゐ-がん[胃癌](名)胃に癌腫を發する病。胃に疼痛を生じ上腹部に硬き塊を生ず、飲食し得ず。

ゐ-き[位記](名)叙位の旨を記したる文書。くらゐがき。「一返上。

ゐ-き[喪記](名)部類をわけてまるすこと。

ゐ-き[遺棄](名)㊀携帶物をすておくこと。(委棄)。㊁すておきてとらぬこと。

ゐ-き[居木](名)馬の鞍の尻の當たるところ。

ゐ-き[威儀](名)㊀正しくかめしきたちふるまひ。㊁たちふるまひの作法。†——**ぶ**[威儀師](名)古昔、儀式の指圖をなし、僧。

古語　個語方言　字音

ゐきへんおうり[位記返上]（名）位を剝奪せられたる官吏其位記を返上すること。

ゐきよく[委曲]（名）㊀くはしきことわけ。つまびらかなる事情。㊁こまやか。つぶさ。（委細）。

ゐきん[遺金]（名）わすれおきたる金錢。

ゐぐ[長慮]（名）おそる〻こと。はるかなること。ひく〻すること。

ゐぐち[猪口]（名）【植】菌類の一。秋の頃濕地に生ず。菌傘は表は褐色にして裏は黄白色を呈し、端末はほそく猪の口の狀をなす。食ふべからず。

ゐくび[猪首]（名）頸短かく猪の如きもの。

ゐぐひ[堰杙]（名）ぬせきに打ちたる杙。

ゐぐひ[居食]（名）なす事もなく空しく食ひて日を過ごすこと。一すれば山も盡くるたとへ。

ゐくわう[威光]（名）いかめしきいきほひ。おそれうやまふべきいきほひ。

ゐくわうちやう[胃擴張]（名）胃の筋肉の收縮力が乏しくなりてひろがること。

ゐくわん[位官]（名）位階と官職と。「の總稱。

ゐくわん[尉官]（名）陸海軍の大尉・中尉・少尉

ゐくわんそく[維管束]（名）【植】維管組織の稱。高等植物にては全體を通して束狀をなすよりいふ。「さを。

ゐくん[偉勳]（名）大いなるてがら。殊勲のい

ゐくん[遺訓]（名）死する際に遺コしたる教へ。

ゐけい[畏敬]（名）おそれうやまふこと。

ゐけい[維繫]（名）つなぐこと。

ゐけいさい[違警罪]（名）【法】重罪輕罪以外なる最も輕き罪。拘留又は科料に處せらるゝもの。

ゐけいれん[胃痙攣]（名）癪のきしみ。

ゐけりう[渭橋]（名）磁器の異稱。

ゐげた[井桁]（名）㊀井戸の地上の圍ひの木又は石を方形に組みたるもの。（井欄）。㊁ゐげたの形、即ち井の字の形、一に組む。

ゐげふ[偉業]（名）偉大なる事業。

ゐげふ[遺業]（名）死者の後にのこせる事業。

ゐけん[威權]（名）他人の意思を強制して服從せしむる力。いきほひ。權威。

ゐけん[違憲]（名）憲法に違反すること。「と。

ゐげん[威嚴]（名）もどかなること。いかめしき

ゐげん[遺言]（名）なかたがひのことば。

ゐげん[遺言]（名）㊀臨終に遺コす言。ゆゐごん。㊁死者が自己の死亡後に法律上の効力を生ぜしむる目的を以てなしたる意思表示。

ゐご[圍碁]（名）碁を圍むと、碁をうつこと。

ゐこう[偉功]（名）大いなるいさを。（偉勳）。

ゐこう[遺功]（名）死後にのこれる功。

ゐこつ[遺骨]（名）死者のほね。

ゐごばん[圍碁盤]（名）ごばん。

ゐこぼる[居溢]（自、下二）溢るゝ程充滿して居る。「りこぼす。

ゐこむ[居籠]（他、ま下二）中にすわ

ゐこん[遺恨]（名）㊀のこるうらみ。怨恨。（宿怨）。

ゐさい[委頑]（名）「ゐげん」に同じ。

ゐさい[委細]（名）くはしきこと。つまびらか。つぶさ。（委曲）。

ゐさい[遺財]（名）死後にのこせる財産。

ゐさいそく[居催促]（名）其場にすわりこみて催促すること。

ゐさく[遺作]（名）ふさく。図作。

ゐさふらふ[居候]（名）他人の家にかゝりて養はるゝ人。人の家にゐて厄介になる人。（食客）。

ゐさま[居樣]（名）ゐずまひ。

ゐさらひ[臀]（名）尻。「分。（臀部）。

ゐさり[来底]（名）からすきの底の地に着く部

ゐさり[居行]（名）㊀ゐざること。（膝行）。㊁足の立たぬ不具。（蹇）。

ゐざる[居行]（自、ら四）㊀すわりながら進み行く。膝行。㊁尻を地につけながら進みゆく。

ゐさん[遺産]（名）㊀計畫の相違。㊁勘定の相違。かんぢやちうがひ。

ゐさん[遺産]（名）死亡者の一身に專屬せざる財産にして未だ相續者に歸せざるもの。——さうぞく。

ゐさん[遺産相續]（名）【法】相續の一。死亡者の遺産をうけつぎて自己の所有となすこと。被相續者の死亡によりて開始せらる。——さうぞくにん。

ゐさんにん[遺産相續人]（名）【法】遺産を相續する人。法定の順位は、第一は直系卑屬・第二は配偶者・第三は直系尊屬・第四は戸主にして、直系卑屬又は直系尊屬の間に於ては親等の近きものを先きにし、同親等のものは同順位に於て共に相續人となる。

ゐさんまい[居樣]（名）ゐざま。すわりやう。

ゐし[遺子]（名）わすれがたみの子。

ゐし[遺志]（名）死者生前の意志。「り。

ゐし[遺矢]（名）大小便をとりはなすこと。いびた

ゐし[遺旨]（名）むねにたがふこと。

ゐし[圍司]（名）古實官禁の帶鎗及田網をつかさどりし職名。

ゐし[遺事]（名）㊀古來のこり傳はれる事跡。㊁生前になしおきたる事跡。㊂もれもちたる事跡。

ゐし[慰藉]（名）なぐさめのことば。

ゐしつ[遺失]（名）とりおとすこと。わすれゝこと。

——しつぶつ[遺失者]（名）物を遺失したる當人。

——しつぶつ[遺失物]（名）遺失したるもの。

ゐしつ[長日]（名）《左傳の註に夏日可畏とある」に出づ》夏日の稱。

ゐしふ[蝟集]（名）蝟（ハリネズミ）の毛の如くに、物事の集まり寄ること。

ゐしや[慰藉]（名）㊀なぐさめたすくること。㊁心をなぐさむること。

ゐしやう[圍障]（名）かき。かこひ。

ゐしやく[胃弱]（名）胃の消化力の衰弱する病。

ゐしゆく[長縮]（名）おそれてちゝこまること。「びさること。

ゐしゆく[委縮]（名）なえちゞむこと。かしけてのびさること。

ゐしよ[位署]（名）㊀くらゐ。坐位。㊁古昔、官と位とを連れて記する式、官と位と相當なる時は官を上にし、又、相當せざる時は位を上にし、位高くして官卑しき時は間に行の字を加へ、位卑くして官高き時は間に守の字を加へ、若し兼官あるときは、相當の官を上とし餘官を下とす。

ゐしよ[遺書]（名）㊀かきおき。㊁死後にのこしたる書。㊂後世にのこしたる書。「大學孔氏之一」。

ゐしよく[居職]（名）家に居て業に從事し得る職、即ち醫師・板木師の類これなり。

ゐしん[位次]（名）くらゐ。ついで。

ゐしん[居敷]（名）㊀座。座。㊁わきらひ。恥。

ゐしき[遺式]（名）法式にたがひたること。

ゐしき[尻當]（名）衣服の尻の邊に縫ひつくる布きれ。ゐりあて。

ゐしつ[委悉]（名）こまか。委細。

ゐしつ[遺失]（名）とりおとすこと。わすれゝこと。

——しつぶつ[遺失者]（名）物を遺失したる當人。

——しつぶつ[遺失物]（名）遺失したるもの。

ゐしつ[長日]（名）《左傳の註に夏日可畏とある」に出づ》夏日の稱。

ゐしふ[蝟集]（名）蝟（ハリネズミ）の毛の如くに、物事の集まり寄ること。

ゐしや[慰藉]（名）㊀なぐさめたすくること。㊁心をなぐさむること。

ゐしやう[圍障]（名）かき。かこひ。

ゐしやく[胃弱]（名）胃の消化力の衰弱する病。

ゐしゆく[長縮]（名）おそれてちゝこまること。「びさること。

ゐしゆく[委縮]（名）なえちゞむこと。かしけてのびさること。

ゐしよ[位署]（名）㊀くらゐ。坐位。㊁古昔、官と位とを連れて記する式、官と位と相當なる時は官を上にし、又、相當せざる時は位を上にし、位高くして官卑しき時は間に行の字を加へ、位卑くして官高き時は間に守の字を加へ、若し兼官あるときは、相當の官を上とし餘官を下とす。

ゐしよ[遺書]（名）㊀かきおき。㊁死後にのこしたる書。㊂後世にのこしたる書「大學孔氏之一」。

ゐしよく[居職]（名）家に居て業に從事し得る職、即ち醫師・板木師の類これなり。

ゐしん[維新]（名）㊀萬事すべて改まり新しくなること。㊁明治初年の改革の特稱。

ゐしん[遺臣]（名）滅亡したる朝廷又は大名の舊臣のもとにのこれるもの。

ゐしん[威信]（名）威光と信任と。

ゐしん[長慎]（名）かしこみつゝしむこと。「人。

ゐじん[偉人]（名）偉大なる人。いとすぐれたる人。

ゐすくまる[居竦]（自、ら四）すわりたる「に同じ。

ゐすくむ[居竦]（自、ま四）「ゐすくまる」

ゐすまひ[居住]（名）すわりたるさま。ゐざ「ま。

ゐすわり[居坐]（名）ゐすわること。

ゐすわる[居坐]（自、ら四）㊀一處に坐して動かず。㊁其儘にて動かず。

ゐすゑ[萎悴]（名）なえまほむこと。

ゐせい[威勢]（名）㊀他をしておそれ懼らしむる力。いきほひ。㊁驕動いさましきさま。意氣さかんなさま。

ゐせい[遺精]（名）睡眠中に我知らず精液をもちすこと。もうざう。「もの。

ゐせい[遺制]（名）むかしの制の後にのこれる

ゐせうり[遺詔]（名）帝王の御遺言。

ゐせき[井堰]（名）用水をせきとめたる所。ゐ。

ゐせき[遺跡]（名）㊀舊跡。古跡。㊁死者の跡「目。

ゐせき[偉績]（名）偉大なる功績。

ゐせき[偉蹟]（名）偉大なる事蹟。

ゐせん[緯線]（名）地球上赤道に平行に引きたる假想線。緯度を表はせる線。

ゐぞう[遺贈]（名）㊀おくること。つかはすこと。㊁【法】遺言を以て、自己の財産を無償にて他人に與ふること。

ゐぞく[委囑]（名）まかせたのむこと。

ゐぞく[遺囑]（名）死者が生前に死後の事に就きてなしたるたのみ。「俗、

ゐぞく[遺俗]（名）のこれるむかしながらの風

ゐぞく[遺族]（名）死者の後にのこれる家族。

——ふぼよれう[遺族扶助料]（名）遺族を扶助するために給與する金。

ゐそん[遺存]（名）あとにのこりあること。

ゐだ[畏懼]（名）おそるゝこと。ちづること。

ゐない[偉大]（名）すぐれてふときも。ひいでゝ「のむこと。大いなること。

ゐたく[委託]（名）ゆだねまかすること。あづけたこと。

ゐたく[遺澤]（名）㊀のこれるつや。㊁のこれる恩澤。

ゐたく[唯諾]（名）他よりいひかけたる言のうけこと。

ゐたくはんばい[委託販賣]（名）商品を委託して販賣せさすること。

ゐたくぶつ[委託物]（名）委託したる物品。

——ひせう[委託物費消]（名）他人より委託を受けたる物品を委託者の承諾を經ずして任意に費消すること。

ゐたけ[居丈]（名）坐したる時の身の高さ。——だか[居丈高]（名）居丈を高くし稍や憤怒せる狀をなすこと。

ゐたち[居立]（名）たちゐ。起居。「たちゐす。

ゐたつ[居立]（自、た四）すわりまた立つ。

ゐたつ[居立]（自、た四）㊀關係す。㊁いりこむ。

ゐだつ[遺脫]（名）ぬけ。もち。

ゐだてん[韋駄天]（名）《サダ」は梵語 Veda》佛法守護の神、俗に魔王の佛舍利を奪ひて逃げ去

〇字音　〇個語方言　＋＋古語

りたる時、これを追ひて取り戻したりといひ傳へて
よく走る神とす、一に韋天將軍といふ。——**ばし**
り[韋陀天走](名) いとすみやかに走ること。
(ゐだんぢ[偉男子](名) ㊀身體のすぐれてたく
ましき男子。㊁性格のすぐれて大いなる男子。
(ゐだち[位置](名) ㊀他のものに對する或物の場
所。㊁くらゐ。地位。「ゐる。
(ゐぢ[維持](名) もちこたふること。たもちきゝふ
(ゐちやり[帷帳](名) たれぎぬ。とばり。
(ゐちやりふ[偉丈夫](名) 偉男子に同じ。
(ゐちよく[違敷](名) 敗命にたがふこと。
(ゐつう[胃痛](名) 胃のいたみ。
(ゐつき[居着](名) おつくと。——**ぢぬし**[居
着地主](名) 其地面内に住居せる地主。
(ゐつく[居着](自、か四) ㊀其地に安んじ
住む。すみつく。㊁其家に安んじ居る。すみ馴る。
(ゐづつ[井筒](名) 井戸の地上の圍ひの木又は
石を圓形に繞へたるもの。「つゝ」—にかけしま
ざかたけ。
(ゐつづけ[居續](名) ㊀他所にとゞまり居て日
を重ねること。㊁將棋、碁などにとゞまりあそびて
日を重ねること。(流連。
(ゐで[井手](名) ゐせき。(井堰。
†ゐでのおびおび[井手下帶](名) (古實、男
もり、山城國井手といふ處にて、己が帶を或女に與
へたりしが、數年を經(こ)て、再び其女に邂逅せりと
いふ故事に因び)別れ居りたるまたしかりし男女の
めぐりあふことにいふ語。
(ゐでん[位田](名) 古實、位階によりて給はりた
る田、現王は一品の八十町より次第に下りて四品の

三十町に至り、臣下は正一位の八十町より次第に下
りて從五位の八町に至る。
(ゐでん[遺傳](名) 生物の有する性質の傾向が、
其系統を受けて生じたるものにのこり傳はること。す
ぢをひくこと。——**びやり**[遺傳病](名) 祖
又は親より遺傳したる病氣。
(ゐど[韋圖](名) 朝鮮にて製する一種の陶器。
(ゐど[緯度](名) [地]地球上或場所の赤道よりの
角距離の稱、北に測るを北緯といひ南に測るを南緯
といふ。
ゐど[井戸](名) 地を掘りて地下の水をたゝへこと
れを汲み取るやうにしたるもの。ゐ。——**かは**[井戸側](名) 井戸の側壁を圍みて土のくづれも
つるを防ぐために設くるもの、多くは長大なる圓筒
狀をなす。——**がへ**[井戸替](名) 井戸の
水をさらへて清くすること。——**ぐるま**[井戸
車](名) 井戸の上にかけたる横木に吊り、井戸繩
をかけて釣瓶(つるべ)を上下せしむる滑車。——**ぎ**
らへ[井戸浚](名) おどがへ。——**なは**[井戸
繩](名) 次條に同じ。——**づな**[井戸
繩](名) 釣瓶(つるべ)につけて水を汲みあぐる繩。つる
べなは。——**ばた**[井戸端](名) 井戸のほと
り。——**ばたくわいぎ**[井戸端會議]
(名) 共同にて使用する井戸の
女房などが、水を汲み又は他の用をなしつゝとり
〳〵のうはさをなしあふこと。——**ぼり**[井戸
堀](名) 井を掘ること。又、其業の人。
(ゐどく[威德](名) 威と德と。又、威あることかに
して德高きこと。
(ゐとく[遺德](名) 後世にのこる德。
ゐどと[居所](名) ゐどころ。

ゐどころ[居所](名) 居るところ。ゐばしよ。
ゐなか[田舍](名) ㊀都會ならぬ地。鄙邊。㊁ゐなかまるとの略言。——**うた**[田舍歌](名) 田舍に行はる
ゝ俗歌。ひなうた。(巴調)。——**うど**[田舍人](名) 田舍に住む人。——**かせぎ**[田舍稼](名)
都のものが田舍に行きて稼ぐこと。——**ことば**
[田舍語](名) 田舍の人のつかふことば。——
ざけ[田舍酒](名) 田舍にてかもしたる酒。
——**ざむらひ**[田舍侍](名) 田舍に住ま
へる武士。——**ぶ**[田舍熟](自、ま
四) 田舍風となる。ひなぶ。ゐなかぶ。——**まる**
と[田舍汁粉](名) つぶし餡(ゐ)の汁粉。†——
せかい[田舍世界](名) 田舍を世界として都
のさまを知らざること。——**だち**[田舍立](名)
田舍にて育てられて都の事を知らぬこと。——**べ**
(名) ゐなかもの。——**ねまり**[田舍訛](名)
田舍語のなまり。†——**はひで**[田舍這出](名)
(名) やまだし。ぼっとで。——**びと**[田舍人]
(名) 田舍にてくらす人。——**ぶ**[田舍人]
舍(自、は上二) ゐなかまむ。——**ふう**[田舍
風](名) 田舍のてぶり。ひなびたる風。——**ぶ**
ま[田舍武士](名) ゐなかざむらひ。——**ま**
[田舍間](名) 家の廣狹を測るに、六尺を一間と
しての稱。京間の對。——**まはり**[田舍巡]
(名) 方々の田舍をめぐりてかせぐこと。——**ま**
んぢゆう[田舍饅頭](名) つぶし餡の饅頭。
——**ミソ**[田舍味噌](名) 家製にてつくりたる味噌。——**むまや**[田舍武者](名) ゐなか
ざむらひ。——**めく**[田舍](自、か四)
ゐなからしく見ゆ。——**もの**[田舍者](名) ㊀

ゐなかの人。(田夫、野人。)㊁不作法の人をのゝしり
ていふ語。——**わざ**[田舍態](名) 田舍のさ
ま。†——**わたらひ**[田舍渡](名) 田舍に
田稼して商賣すること。
ゐなかのつき[亥中月](名) 陰曆二十日の夜
ゐながら[乍居](副) すわりたるまゝ、家に居つ
つ。「歌人は—名所を知る」(居伏)。
ゐなじむ[居馴染](自、ま四) 久しく居
てなれ親たしむ。
ゐなほり[居直强盜](名) 竊
盜にはひりたるものが、其家の人に見つけられなど
して、急に態度を變じて強盜となること。
ゐなほる[居直](自、ら四) ㊀座を
改めてすわる。すわりかへて姿勢を正す。㊁ふるま
ひをかふ、態度を變ず。
ゐねむ[居並](自、ま四) 次條に同じ。
ゐならぶ[居並](自、は四) ならびてすわ
る。席をつらねてすわる。
(ゐにん[委任](名) ㊀ゆだねまかすること。㊁
[法]當事者の一方が、相手方に法律行爲をなすことを
委託し、相手方がこれを承諾すること。——**ぢやう**
[委任狀](名) 委任の意思を表示したる證
書。——**だいり**[委任代理](名) [法]委任を
受け本人に代はりて法律行爲をなすこと。「と。
(ゐねり[圍繞](名) とりまくこと。かこみめぐる
ゐねり[遺尿](名) いびたり。よつぱり。
ゐねぶり[居睡](名) 次條に同じ。
ゐねむり[居睡](名) すわりたる儘にて眠ること。
すわり居てねむること。(坐睡。打瞌睡。
ゐねり[織蔑](名) 機(ゐ)のたて絲を巻く具。

ゐの[井中](名) ㊀井戸のなか。㊁眼鏡き
界。——**のかはづ**[井中蛙](名) (「せいあ」
(井蛙)に同じ。
ゐのんど[蒔蘿](名) [植]茴香(ゐうきう)の葉の小な
るもの、果實は黑茸に類す。
(ゐはい[位牌](名) 死者の名號を記したる木牌。
(木位、靈位。——**だう**[位牌堂](名) 位牌
を安置せる堂。
(ゐはい[違背](名) たがひそむくこと。もとること。
ゐはち[位袍](名) 位階によりて異なる各種
ゐはち[飛報](名) あつめたる報知。「の袍。
ゐはち[遺芳](名) ㊀後世にのこれるかんば
しき名。㊁後世にのこれる業績。
ゐばう[威望](名) いきほひとはまれと。
ゐばち[遺忘](名) わすること。忘却。
ゐはく[威迫](名) おそれしめて從はしむること。
どしせまること。(脅迫。
ゐばく[帷幕](名) 「ゐあく」(帷幄)に同じ。
ゐばしよ[居場所](名) 居る場所。居所。「み。
ゐはつ[遺髮](名) 死者のかたみにのこるか
ゐはふ[違法](名) 法度に違(た)がふこと。(反則)。
ゐはふ[遺法](名) 古人ののこせし法。
ゐばり[威張](名) ゐばること。
ゐばる[威張](自、ら四) ㊀勢つよきさま
もをなす。㊁たかぶりはこる。
ゐはん[違犯](名) 法にもとりたがふこと。
ゐはん[違反](名) たがふこと。もとること。
ゐび[萎靡](名) 上わりちゞむこと。いきはひなく
なること。「能屈」。
ゐふ[威武](名) たけさこと。又、いきはひ。「—ネル
ゐふ[慰撫](名) なぐさめやすんずること。

ゐ-ふう[遺風]（名）㊀のこれるならひ。㊁のこれるをしへ。
ゐ-ふう[威風]（名）威光の他に及ぶこと。
ゐ-ふく[遺腹]（名）父の死後に生まれたる子。わすれがたみ。「一の子」。
ゐ-ふく[喪服]（名）おそれ慎たがふこと。「こと。
ゐ-ふく[威服]（名）おそれしめ慎たがはしむること。
ゐ-ぶくろ[胃袋]（名）胃。「みのもの。
ゐ-ぶつ[遺物]（名）死後に遺(こ)れるもの。かたみ。
ゐ-ぶん[遺文]（名）死者のつくりもきたる文章。
ゐ-へん[遺編]（名）契約などを履行せざると。約束にそむくこと。
ゐ-へん[韋編]（名）かはとぢの書籍。
ゐ-ぼん[遠犯]（名）「ゐはん」に同じ。
ゐ-ま[居間]（名）常に起臥する室。(齋)。
ゐ-まち[居待]（名）坐してまつこと。——**づき**[居待月]（名）「ゐまちのつき」に同じ。——**づき**[居待月]（名）枕）「あかし」に冠らする詞。「一、あかしのとゆは」。——**の-つき**[居待月]（名）陰暦十八日の月。
ゐ-まはる[ワ](ゐもとをる)[居廻]（自、ら四）車坐にゐなちぶ。
ゐ-まん[萉慢]（名）まく。ひきまく。
ゐ-むしろ[間席]（名）筵の座にて編(こ)みたる席。
ゐ-むら[居村]（名）自分の居住する村。「け。
ゐ-めい[遺命]（名）死際にいひ遺(こ)せるいひつ
ゐ-もり[居守]（名）其所に居てまもること。
ゐ-めい[委命]（名）いのちをまかすること。
ゐ-めい[遺命]（名）いひつけたがふと。
ゐ-もり[井守]（名）【動】有尾類に屬する兩棲動物。池・沼などに棲む。形やもりに似、色黒く腹赤し、長さ二三寸許、四肢不充分にして歩行に適せず、尾は扁(ヘラ)くして游泳の用をなす、水に棲息すれど肺を以て空氣を呼吸す。(蠑螈)。
ゐ-もん[關門]（名）おくどてん。後宮。
ゐ-もん[慰問]（名）なぐさめおとづること。なぐさめみまふと。——**ぶくろ**[慰問袋]（名）田征軍人を慰問するため、戰地にて[ゐ]つかはさる、使者。——**おやう**[慰問使]（名）慰問のためにおくりやる書狀。——**ヂント**[慰問狀]（名）慰問——[名]田征軍人を慰問するため、戰地の隨所に「テント」を張り、中に娯樂又は便宜の設備をせるもの。——**ぶくろ**[慰問袋]（名）田征軍人を慰問するため、思ひ〳〵にさま〳〵の日用品などを入れて戰地に送る袋。各個別封にして多人數のものより醵集し、其筋の手を經(こ)て軍隊にくばる。
ゐ-や[禮]（名）うやまひ、れい。禮儀。
ゐ-や[居家]（名）すまひする家。
ゐ-やく[違約]（名）約束にたがふと。——**きん**[違約金]（名）違約の損害賠償として支拂ふ金。
ゐ-やー-ごと[禮事]（名）禮儀に關する事。
ゐ-やー-ぢり[禮代]（名）次條に同じ。
ゐ-やー-ぢろ[禮代]（名）禮として おくる物。
ゐ-やー-なし[ナシ](ゐやなし)[禮無]（形、一）禮儀なし。不作法なり。なめし。
ゐ-やー-ぶ[禮ブ](ゐやぶ)[禮]（他、は上二）ゐやまふ。
ゐ-やー-ぶ[禮ブ](ゐやぶ)[敬]（他、ば四）うやまふ。
ゐ-やー-ぶか[禮深]（形、二）うやゝ〳〵し。
ゐ-やー-ぶか[敬]（名）禮儀正しきさま。
ゐ-やー-ぶか-し[禮深シ](ゐやぶかしし)[恭敬]（形、二）うやゝ〳〵し。
ゐ-ゆ[慰諭]（名）なぐさめさとすこと。
ゐ-より[威容]（名）いかめしき容儀。
ゐ-らう[ラウ](ゐらう)[慰勞]（名）なぐさめいたはること。ねぎらふこと。——**くわい**[慰勞會]（名）慰勞のため に催す會。
ゐ-り[委吏]（名）支那の古昔、會計を掌りし職名。
ゐ-りう[遺留]（名）死後にのこしとゞむること。——**ぶん**[遺留分]（名）【法】被相續人の遺産中、其自由に處分するを禁じ必ず遺留すべきものと規定せられたる部分、即ち法定の家督相續人たる直系卑屬は被相續人の財産の半額を受け、其他の家督相續人は三分の一を受け、又、遺産相續人たる直系卑屬は被相續人の財産の半額を受け、遺産相續人たる配偶者又は直系尊屬は被相續人の財産の三分の一を受くべきものとす。
ゐ-りよく[威稜]（名）いつ。かいつ。
ゐ-りよく[威力]（名）他を強制して服從せしむる力。いきはひ。ちから。
ゐる[居]（自、わ上一）其場處にあり。を。
ゐる[艤]（自、わ上一）船砂に著きて動かず。すわる。（舟艤）。
ゐる[齬]（自、わ上一）酢(ス)きものなどを食ひて齒うく。
ゐる[將]（他、わ上一）引き連れゆく。ひきゐる。（帥、率）。
ゐる-ゐる[遺類]（名）のこれるやから。
ゐる-ゐる[飛類]（名）たぐひ。
ゐる-れい[威嚴]（名）いかめしくたふとき力。
ゐる-れい[違例]（名）㊀例にたがふこと。㊁疾病に冒さる、こと。貴人にいふ語。
ゐ-れい[遺戾]（名）たがひもとること。
ゐ-れつ[威烈]（名）いきはひ。かくわう。
ゐ-れつ[偉烈]（名）すぐれて大いなる功績。
ゐ-れつ[遺烈]（名）のこれる功績。
ゐ-ろう[遺漏]（名）もれ。あち。

十古語　〃俚語方言　一字音

ゐ-ろく[位祿]（名）㊀くらゐと祿と。㊁古昔、位の高下によりて賜はりたる祿。——**さだめ**[位祿定]（名）古昔、位祿をさだめられし公事。「る。
ゐ-わく[ワク](ゐはく)[居分]（自、か下二）わかれ居
ゐ-ゐん[委員]（名）團體の中にて、或事を擔任する特定の人。——**ふたく**[委員附托]（名）議案の審査などを委員にまかすること。
ゐ-ろー-り[圍爐裏]（名）「ろ」に「爐」に同じ、「地爐」。
ゐん[院]（名）㊀周圍に垣を設けたる壯大なる建物。㊁上皇の御所を申す語。「一の御所」。㊂上皇の御身を申す語。㊃僧侶の居所。テラ。㊄道士の居所。㊅學者の居所。
ゐん[韻]（名）㊀音の末尾のひゞき。㊁漢字を其の韻の類似によりて區別したる稱、古昔は二百七韻に分ちたれど、後には百六韻となし、これを平・上・去・入の四聲に分つ。㊂文辭の中に、同一若しくは類似の音を隨意又は一定の間隔毎に響きあはすもの。㊃ひゞき。こゑ。「松—」。㊄詩賦。歌曲。㊅あもむき。やうす。——**に-おす**[次韻]次韻をなす。——**を-さぐる**[探韻]二人以上のものが集りて詩作するとき、韻を分つに、人ごとに韻字本を無心にひろげ、其ひきたる所の韻を其人の作るべき詩の韻とするにいふ。——**を-ふむ**[踏韻]韻をふす。——**を-ほす**[歩韻]他の詩作の句脚の韻字を其まゝ、もちひて詩作す。
ゐん[尹]（名）㊀古昔、彈正臺の長官。㊁長官。
ゐん[院]（接尾）㊀宮殿又は官舍などの稱號に添(テ)用ふる語。㊁寺などの稱號に用ふる語。㊂すべて人の多く集まる家などの稱號に用ふる語。
ゐん-がく[韻學]（名）音韻を研究する學。
ゐん-きゃく[韻脚]（名）詩の句脚の韻を押(ウ)みたるもの。
ゐん-ぐわい[員外]（名）定員の外なること。
ゐん-げ[院家]（名）門主の隱居處。
ゐん-ざん[院參]（名）院の御所に參上すること。——**ものゆり**[院參衆]（名）院參の公卿。
ゐん-し[院司]（名）古昔、院の御所の事を掌りし官。
ゐん-じ[韻事]（名）風流なる事。
ゐん-じ[韻字]（名）韻脚に用ふる文字。——**ぼん**[韻字本]（名）漢詩に用ふる韻字を記載せる本。
ゐん-しゅ[院主]（名）寺院などの主。
ゐん-ず[員數]（名）かず。たか。
ゐん-せき[隕石]（名）【天】空中より時として落下する石、流星の破片ならん、多くは酸化第一鐵の鑛石なり。
ゐん-せん[院宣]（名）上皇の勅旨。
ゐん-だい[院代]（名）虚無僧の住む寺院の住持。
ゐん-ち[韻致]（名）風雅なるおもむき。おもむき。
ゐん-てつ[隕鐵]（名）隕石の鐵分最も多く殆ど純鐵に近きもの。
ゐん-ない-そうり[院內總理]（名）帝國議會の開會中、衆議院內に於て、自黨に屬する代議士を指揮引率する代議士。
ゐん-の-ごしよ[院御所]（名）上皇のまします御所。仙洞。
ゐん-の-ちやう[チヤウ][院廳]（名）上皇の政をきゝたまふ所。
ゐん-ふたき[韻掩]（名）古昔の遊戯、一座の人々左右に座を分かち、古詩の韻字を去り、これを推測していひあてしもの。
ゐん-りつ[韻律]（名）詩の形式。韻格。

十古語　〃俚語方言　一字音

ゑ

ゑ[餌]（名）㊀鳥獸魚の食物。㊁人を誘ひ招くたとへ。「わいゞわ。めのもの。
ゑ[繪、畫]（名）物の形象をゑがき寫したるもの。く
ゑ[會]（名）多數の人の集まりて事を行ふこと。「仁王—」。「放生—」。
ゑ[慧]（名）事理を區別する力。智の作用。
ゑ[感]（名）感歎の意の發聲。「われはさぶし—」。
ゑ-あはせ[ワセ][繪合]（名）一種の遊戯、左右の組を立て各繪を出して其優劣を爭ふこと。
ゑい-ぎ[衛士]（名）まもりの兵士。
ゑい-せい[衛星]（名）遊星の周圍を回轉しながら、其遊星と共に太陽を周るもの。（陪星）。
ゑい-せい[衛生]（名）飲食・衣服・住居其他身體上に關する百般の物事に注意して身體の健康をはかり、已に發したる疾病はよく治療を怠らざると。——**きよく**[衛生局]（名）內務大臣の統轄の下に屬し、流行病の豫防・種痘・檢疫・衛生會・病院・其他醫師・藥劑師・藥品・毒劇等に關する事務を取扱ふ內務省の一局。——**くみあひ**[イア][衛生組合]（名）衛生に關する事務を取扱ふため、町村內及は區內にて、各處區域をかぎりて設立したる組合。——**やうせい**[ヤウセイ][衛生行政]（名）國民一般の健康を保つため、危害の豫防を講じ、已に發したる疾病は力めて其蔓延を防止する行政。——**きよく**[衛生局]（名）內務大臣の統轄の下に屬し、流行病の豫防・種痘・檢疫・衛生會・病院・其他醫師・藥劑師・藥品・毒劇等に關する事務を取扱ふ內務省の一局。——**くみあひ**[イア][衛生組合]（名）衛生に關する事務を取扱ふため、町村內及は區內にて、各處區域をかぎりて設立したる組合。——

十古語　〃俚語方言　一字音

ゑげんぶよ[衛生試驗所](名) 内務大臣の管轄に屬し、衛生上の試驗に關する事項を取扱ふ所。

ゑい-へい[衛兵](名) まもる兵卒。

(ゑい-ほう)[衛矛](名)【植】「まゆみ」に同じ。

ゑ-いり[繪入](名) 文書の間に畫を挿入せるもの。

(ゑ-いん[會陰](名)【生】人身の陰部と肛門との間、即ち左右の股の上部の相接する所。

(ゑ-えん[會厭](名)【生】人身の喉頭にありて軟骨より成り、瓦斯を出入せしめ飲食物の侵入をふせぐもの。「一軟骨」。

(ゑ-か[會下](名) 輩僧の門下。「人。

+ゑ-が[垣下](名) 主人をたすけて來賓に應接する。

(ゑ-かう[同向](名)【佛】(い)讀經して死者の追福を祈ること。(ろ)功德をめぐらして衆生に仕向くること。(は)普行をめぐらして菩提に向ふこと。

ゑ-かき[繪書](名) 繪を書くことを業とする人。又、繪を書くことに長じたる人。(畫師、畫工)。

ゑ-が-く[餌](名) 鳥獸などに餌をあたへて飼ひならすこと。又、其事をなす人。

ゑ-がほ[笑顏](名) ㊀ゑみを含む顏。「愛顏」。㊁よろこぶこと。

ゑ-がみ[繪紙](名) 種々彩色の摸樣ある紙。女兒供の弄ぶもの。

ゑがらし[蘇辛](形、一) ゑぐ、してから「し。

(ゑがらっぽい(形) ゑぐ、してから東京の方言。

+ゑ-き[機氣](名) けがれたる氣。

ゑ-きぬ[繪絹](名) 繪を書くに用ふる生絹。

+ゑぐ「女裝」(名)【植】草の名、實物詳かならず。

ゑぐ-いも[慈芋](名)【植】芋の一種、地下莖は普通の芋に似たる細長きものと球のごとき形をなすものとあれど、共に味ゑぐし。

ゑぐ-し[慈](形、一) のんどを刺戟していちく する如き味あり。(苦、酸)。

ゑ-くぼ[凹](名) ㊀笑窪の轉。笑ふ時、頰に生ずるくぼみ。㊁へこたれた。

ゑ-ぐ-る[抉剔](他、ら四)(彫り刻りの轉)㊀浮き入れて廻はす。くじる。㊁(かはりたる趣向を以て人を驚かす。

ゑ-ぐい[慈](形) ゑぐし。

ゑ-ごころ[繪心](名) 繪の趣味を解し得る心。

+ゑ-こひ[餌乞](名) 餌を乞ひもとむること。

ゑ-さ[餌](名)「ゑ」餌に同じ。

ゑ-さう[畫像](名) ゑがきたる肖像。

ゑ-さう-し[繪草紙](名) ㊀繪入の草紙。㊁芝居に出きる、――や居の狂言をゑがきたる書物。㊂ゑなどをうる家。

ゑ-さし[餌差](名) 鷹の餌とする小鳥をさして捕ふること。又、其人。

ゑ-さ-ほり[餌掘](名) 魚のゑさにする蚯蚓などを掘ること。又、其人。

ゑ-し[繪師](名) ゑかき。畫工、畫師。

+ゑ-し[衛士](名) ㊀古昔、諸國より京に召され、每年交替して禁闕を守りし者。㊁誤りて、仕丁の稱。――ふ[衛士府](名) 古昔、衛士に關する事を掌りし所、左右二府に別れたり。後に衛門府といふ。

(ゑ-しき[會式](名)【佛】(い)寺院にて行ふ法會。(ろ)特に日蓮宗にて、陰曆十月十三日即ち祖師日蓮の忌日に行ふ法會。おめいかう。

ゑ-しき[餌食](名) ㊀餌として與ふるもの。㊁食慾なる欲望の犧牲。

(ゑ-しゃく[會釋](名) ㊀うなづきて承知すること。㊁挨拶(リヤウ)すること。

(ゑ-しゃ-ぢゃうり[會者定離](名)【佛】萬有は無常にして、會ひ合ふ者は必らず離るといふこと。

+ゑ-しれもの「怨」(他、さ變)「ゑんず」に同じ。「ゑ」じきこゑたまへば」。「の。

ゑ-すがた[繪姿](名) 人の姿を畫きたるもの。

ゑ-そ[繪](名)(動)「えそ」に同じ。

ゑ-そらごと[繪空事](名) 繪は多く種々の作意を加へて、實形より異なりたるさまにかきなすものなるより、物事の虛僞なることにいふ語。

ゑ-た[穢多](名) 中古以後、平民の下級にありし賤民の稱。諸國に散在し、獸を屠(ホフ)り皮を剝(ハ)ぐ等の不潔なる事を業とし、他の階級との交際を忌まれたりしもの。明治以後、新に平民と同等に列せらるゝに至れり。――むら[穢多村](名) 穢多の部落。

+ゑ-たくみ[畫工](名) ゑかき。ゑ師。――の-つかさ[畫工司](名) 古昔、中務省の被官にして、繪畫一切の事を掌りしつかさ。

ゑ-ぢく[繪軸](名) 繪の掛物。

ゑ-ぢど-おどり[越後獅子](名) ㊀越後國蒲原郡の神社にて行ふ獅子舞。㊁同郡月潟邊より出づる獅子舞、初夏より諸國を遍歷し、秋末に歸る、小童獅子頭を被りて種々の藝をなす。かくべおい。

ゑ-ぢど-ぢみ[越後縮](名) 越後國魚沼・刈羽・頸城三郡より產出する縮、からむしにて織りたるもの、質甚だ強し。

ゑ-ぢど-ぬの[越後布](名) ゑぢどぢみ。

ゑ-づ[繪圖](名) 家屋・庭園・建設物其他の平面圖。

(ゑ-つ-いん[越陰](名) なみきのこかげ。

ゑづき[嘔吐](名) ゑづくこと。

ゑ-づ-き[餌附](名)「ゑづくこと。

ゑ-づ-く[嘔吐](自、か四)(餌衛くの轉)のみこみる食物をはきいだす。はきもどす。

ゑ-づ-け[餌附](自、か四) 餌を食ふやうになる。「鳥かー」。「けん。

(ゑ-っ-けん[越權](名) 職權の範圍をこゆること。をつ

(ゑ-つ-ごく[越獄](名) 獄屋をこえてのがれ出づること。ろうぬけ。

(ゑ-っ-そ[越訴](名) 訴ふべき普通の手續をこえて、直に上官に訴ふること。をつそ。

ゑ-っちゆう-ふんどし[越中褌](名) ㊀三四尺許の半幅の布に紐をつけたる男子用の褌、紐(ヒモ)を後より前に廻はして結び、布の端を前に挾むもの。㊁一名「と」。又、其人。

ゑ-づひき[繪圖引](名) 繰を引き繪圖をつくること。

ゑ-つぼ[餌壺](名) 鳥の餌を入るゝ器。ゑぶくろ。

ゑ-つぼ[笑壺](名) 愉快なく笑ひ興ずること。「に入る。――の-くわい[笑壺會](名) ゑつぼに入るよりあひ。

ゑづめん[繪圖面](名) 繪圖。

+ゑつらか-すがせ[嘲](他、さ四) あざける。

(ゑ-ど[穢土](名) ㊀佛「穢」なれたる世界。娑婆世界。㊁畫の異稱。

ゑ-とき[繪解](名) ㊀繪にかきたる事實の說明。㊁繪を以て說明をむぎなふこと。

(ゑ-とく[會得](名) 心に愛り知ること。のみこみの行くこと。がてんすること。了解、知得。

ゑ-どころ[繪所](名) 古昔、禁中にありて繪の事を掌りしつかさ。

+ゑ-とり[餌取](名) ゑさり。

ゑ-とり[繪取](名) ゑどること。

ゑ-ど-る[繪取](他、ら四) ㊀きいたく、いろどる。㊁書きたる字の上を更に墨を以て塗る。

ゑなか[鷹雀](名)【動】鶺鴒類中やまがら科に屬する鳥。形四十雀に似、體長短小なり、嘴は小さくして尖る。

+ゑ-な-く[嘔](自、か四) うなる。うめく。(呻吟)。

(ゑ-なん[淮南](名) 豆腐の異稱。

+ゑに-す[桃](名)【植】「ゑんぎゆ」の古言。

+ゑぬ[狗](名) いぬのこ。又、ちんころ。――ころ[狗兒](名) いぬのこ。いぬころ。

+ゑぬ-の-とくさ[狗尾草](名)【植】ゑのころぐさに同じ。

ゑ-の-ぐ[繪具](名) 繪の彩色に用ふる料。(顏料)。

ゑの-ころ-ぐさ[狗尾草](名)【植】禾本科に屬する草、原野に自生す。苗・穗共に粟に似、穗は紫色又は綠色にして、其形狗の尾に似たれば名とす。

ゑば[餌](名)「ゑ」餌に同じ。

ゑ-はち[惠方](名)「えほう」(吉方)に同じ。

まゐり[惠方詣](名) 正月元日に、惠方にあたりたる神社又は佛閣に參詣すること。

ゑ-ばり[烏帽子](名)「えぼし」に同じ。

ゑ-はがき[繪葉書](名) 通信文を記むる面に繪畫ある葉書、宛名を記むる面の三分の一以下に線を劃して通信文を認めて發送するもの。

ゑ-ばけ[繪刷毛](名) 畫をかくに用ふる刷毛。

+ゑは-すせ[醉](他、さ四) 醉はしむ。

ゑ-はんきれ[繪半切](名) 繪のある半切紙。

ゑひ[醉](名) ゑひに乘じてなす。――にのる[乘醉]

ゑ-ひ-ごこち[醉心地](名) 酒にゑひたる時の心地。

ゑ-ひ-くる-ふ[醉狂](自、は四) 醉ひて心亂れくるふ。すゑきやうす。

ゑ-ひ-ごと[醉言](名) 醉ひていふことば。

ゑ-ひ-ごと[醉事](名) 醉ひてするわざ。

+ゑ-ひ-さま-たぐ-る[醉樣亂](自、ら下二) いたくゑひて心亂る。

+ゑ-ひ-さま-た-る[醉樣亂](自、ら下二) 前條に同じ。

ゑ-ひ-さめ[醉覺](名) 醉ひて眠りたる後に目醒むること。

+ゑ-ひ-ま-る[醉痴](自、ら下二) 醉ひて物事の見さかひなくなる。

+ゑ-ひつ[繪櫃](名) 彩色繪ある飯櫃形の曲物、昔時、雛節句に飯を入れしもの。

ゑ-つ-ぶ-す[醉潰](他、さ四) 醉ひて徒に其日を過す。

ゑ-つ-ぶ-る[醉潰](自、ら下二) いたく醉ひて倒れる。

(ゑ-つぶれる(自) 前條の誤。

+ゑ-ひ-ねぶ[醉泣](名) 醉ひて心みだれ少し「いぬ。

ゑ-ひ-ふ-す[醉伏](自、さ四) ゑひて

(ゑ-ふ[衛府](名) 近衛府・兵衛府・衛門府の稱。

ゑ-ふ[醉](自、は四) ㊀酒を飲みて酒氣全身にめぐる。㊁酒を飲みて精神亂る。㊂或事件に對して大なる興味を感じ、心恍惚となる。㊃船・車などに乘り、其動搖によりて心地惑しくなる。㊄魚

[ゑつび]

肉の中毒によりて、黴を起こす。

ふ・ぶ[繪符](名)品物につくる忘るしふだ。

ふ・ぶくろ[餌袋](名)㊀「ふつぼ」餌壺に同じ。㊁十古貫、旅行のとき食物を入れて携帶せし袋。㊂鳥の胃袋。㊃人の胃袋。

ふ・ふで[繪筆](名)筆を書くに用ふる筆。

＋**ふ・ふの・かみ**[衛府督](名)古昔、近衛府及兵衛府の長官。

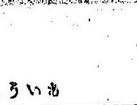
＋**ふ・ふの・すけ**[衛府佐](名)近衛府及兵衛府の「次官。

ふ・ふみ[繪蹈](名)德川時代に、人民に蹈繪をふましめしと。

ふ・ぼし[烏帽子](名)㊀一種のかぶりもの、古昔、貴人は冠・袍ならざるときに用ひ、賤者は常の儀式のときにかぶりたり、もと墨色の絹にてつくりしが、後には紙にてつくり漆にて黑く塗りかためたり、位階によりて形と塗樣とを異にし、種々の名目あり。——**うさ**[烏帽子魚](名)【動】「かつを」の異稱。——**えぼし**[烏帽子親](名)古昔、男子元服のとき、其人に烏帽子を著けさせ烏帽子名をつけし人。——**かけ**[烏帽子掛](名)烏帽子をかけおくため床柱にうちもく折釘、又、其折釘にかくるために鼓匿せる烏帽子の紐。——**がひ**[烏帽子貝](名)【動】腐鰓類に屬する貝、介殼は形烏帽子に似、青黑色を呈す、肉白し。——**ど**[烏帽子兒](名)烏帽子親より、其烏帽子を著け烏帽子名をつけたる人を指していふ稱。——**な**[烏帽子名](名)古昔、男子元服のとき、初名をあらためて別につくる名、烏帽子親が自己の名の一字を與ふるもの。——**づつ**[烏帽子筒](名)烏帽子の紐をいる、部分。——**をり**[烏帽子折](名)烏帽子を作る職人。

ふ・ぼん[繪本](名)「ゑざうし」(一)に同じ。

ふ・ま[繪馬](名)馬の繪をかきたる額、神社佛閣に奉納するもの、轉じて、すべて神社佛閣に奉納する額の稱。


[まゑま]

ふ・まき・もの[繪卷物](名)繪を卷物になせしもの。

＋**ふ・ま・し**[笑](形、二)ゑむべし。

ふ・まだり[繪馬堂](名)神社・佛閣などの繪馬を掲げおく堂。

ふ・まで・ん[繪馬殿](名)前條に同じ。

＋**ふ・まは・し**[笑](名)「ゑみ」に同じ。

＋**ふ・まひ**[笑](名)「ゑみ」に同じ。

＋**ふ・ま・ふ**[笑](自、は四)「ゑむ」に同じ。

ふ・み[笑](名)ゑむこと。わらひ。

＋**ふ・み・がほ**[笑顏](名)ゑみを含みたるかほ。

＋**ふ・み・ぐさ**[笑草](名)【植】「あまな」の一名。

＋**ふ・み・と・ば・る**[(自、ら下二)いたくわらふ。「わらひごゑ。

＋**ふ・み・ど**[笑聲](名)打ちゑみてものいふ聲。

＋**ふ・み・ぬか・ゆ**[笑榮](自、や下二)ゑましと思ふ心の屆がほつくりて滿足す。

＋**ふ・み・の・まゆ**[笑眉](名)ゑむ時の眉にあらはるゝこと。

＋**ふ・み・ひろ・ぐ**[笑廣](自、か下二)大口あきて笑ふ。「しく笑ふ。

＋**ふ・み・ひろ・ど・る**[笑廣](自、ら四)甚だ

＋**ふ・み・まが・る**[笑曲](自、ら四)「ゑみこだるる」に同じ。「けてゑむ。

＋**ふ・み・ま・く**[笑設](自、か下二)思ひ設けてゑむ。

ふ・み・わ・る[(自、ら下二)喫の他「ゑみわれる」(自)「ゑみわる」の訛。

＋**ふ・み・ゑ・み**[笑笑](名、副)ゑみをふくみたるさまにいふ語。にこ〳〵。

ふ・む[含む](他、み四)㊀花咲く、ひらく。㊁雙蟹(ガニ)など裂け開く。

ふ・もと[繪元](名)「ゑもとゆひ」の略言。

ふ・もと・ゆひ[繪元結](名)いれもとゆひ。

ふ・ものがたり[繪物語](名)繪入の物語本。

(**ふ・もん・ふ**[衛門府](名)古昔、禁中の諸門を守衛し又は巡邏して警戒するを掌りしつかさ。

＋**ふ・ら・ぐ**[歡笑](自、か四)樂しみ笑ふ。

ふ・ら・ふそく[繪蠟燭](名)繪をかきて彩色せる蠟燭。

＋**ふ・ら・ふ・ら・に**[笑笑](副)わらひ〳〵て。

ふり[彫](名)ゑること。——**いた**[彫板](名)「はんぎ」版木に同じ。——**い・る**[彫入](他、ら下二)木石の面などにきざみこむ。——**も**[彫物](名)ほりもの。「鐫」

ふ・る[彫](他、ら四)ほりきざむ。ちりばむ。

＋**ふ・わらひ**[歡笑](名)ゑわらふこと。

＋**ふ・わらふ**[歡笑](自、は四)ゑみわ

ふん[寃](名)無實の罪を被むること。「らふ。

ふん[園](名)その。には。

ふん[圓](名)㊀まるきこと。㊁【數】一つの線にて圍まれたる平面形にして、其線上の各點が一定點より等距離にあるもの。㊂貨幣の單位、錢の百倍。

(**ふん・あり**[鴛鴦](名)【動】「をしどり」に同じ。

——**の・ふすま**[鴛鴦衾](名)男女ともねのふ。「すま。

(**ふん・いう**[兎圓](名)その。

(**ふん・いう**[遠遊](名)遠き他郷に遊ぶこと。

(**ふん・いう・くわい**[圓遊會](名)許多の客を圓内にて攫離すること。

(**ふん・いん**[援引](名)ひくこと。ひっぱること。

(**ふん・か**[遠遐](名)とほきこと。はるかなること。

＋**ふん・かい**[垣下](名)「ゑが」に同じ。

(**ふん・かい**[遠海](名)遠く〳〵だゝりたる海。

(**ふん・かう**[遠行](名)遠き處に行くこと。

(**ふん・かう**[遠郊](名)とほきのべ。

(**ふん・かう・きん・とう**[遠交近攻](名)支那の戰國時代に、秦の范雎のたてたる策、遠き國と交りを結びて近き國を攻めとること。

(**ふん・かく**[遠隔](名)遠く〳〵だたること。「遙絕」。

ふん・かの・こま[轅下駒](名)(車のながえの下にある馬、即ち車をひく馬の義)他人の都下に屬して其側柳をうくるものにいふ語。

(**ふん・かん・すう**[圓函數](名)【數】三角函數の値が與へられたるとき、これに對する角度を其與へられたる三角函數に對する圓函數といふ。

(**ふん・がん・きょう**[遠眼鏡](名)遠視眼のもの、用ふる眼鏡。「眼鏡の條を見よ」。

(**ふん・きう**[圓球](名)まるきたま。

(**ふん・きょう**[遠鄕](名)とほき他鄕。

(**ふん・きょう**[遠境](名)とほき國ざかひ。とほきくに。

(**ふん・きょく**[蜿曲](名)ゐだやかにして躍骨なちざるやうにいふと。とほきはしにいふと。

(**ふん・くわつ**[圓滑](名)㊀かどだゝぬこと。㊁故障なく行はるゝこと。

(**ふん・ぐん**[援軍](名)すくひの兵。加勢。援兵。

(**ふん・きん**[遠近](名)㊀とほきとちかきこと。㊁壹にて遠きと近きとのかきわけ。

(**ふん・けい**[圓形](名)まるきかたち。

(**ふん・けい**[遠景](名)遠見(トホ)の景色。

(**ふん・げい**[園藝](名)蔬菜・果樹又は花草等の栽培。——**のう**[園藝農](名)園藝を專業とする農。「み。

(**ふん・けん**[遠見](名)遠方を望み見ること。とほ

(**ふん・げん**[怨言](名)うらみていふこと。うらみのことば。

(**ふん・げん**[淵源](名)物事のおこりもとづく所。

(**ふん・げん・だう**[袁彥道](名)博奕の異稱。

(**ふん・ご**[援護](名)たすけまもること。

(**ふん・ご**[蜿語](名)とほまはしにいふ言、躍骨なちざる言。

(**ふん・ど**[怨語](名)うらみのことば。

(**ふん・とう**[猿猴](名)【植】毛茛科に屬する動物の總稱。——**ぎり**[猿猴草](名)猿猴類に屬する動物の總稱。——**ぎり**[猿猴類](名)【動】人類に接屬する草、水邊に生ず、葉は圓形心臟狀にして、長き花莖を有す、花は小形黃色にして、盆栽として高く賞する時は、花莖を垂れて手長猿の手の如きより此名あり。——**るる**[猿猴類](名)【動】人類に接近する動物、體は直立し四肢皆な手の作用をなす、指端に扁平なる爪あり、全體毛多けれど面部に毛少く、口吻短くして容貌いと人に類す、性活潑喧噪にして狡智あり、よく他を模倣す、果實・昆蟲等を捕食す、さる・ましゃう・ひひ等これに屬す。

(**ふん・とう・るる**[圓口類](名)形は鹽(ヤウ)に似、皮肉帶かにして鱗形の口を有し他物に吸着す、八目鰻等これに屬す。

(**ふん・ど・く**[遠國](名)遠く〳〵だ、りたる地方。とはきくに。(遠地、遠境。

(**ふん・とん**[怨恨](名)うらみ。

(**ふん・ぎ**[圓座](名)藁・菰などにて編(ア)のごとく圓く編(ア)みたる座褥(ネ)。——**がき**[圓座柿](名)柿の一種、實大きく圓し。——**むし**[圓座蟲](名)【動】やすでの一名、(京阪地方の語)。

(**ふん・ざい**[寃罪](名)無實の罪。「はやま。

(**ふん・ざん**[遠山](名)とほく〳〵だ、りたる山。と

(**ふん・ざん**[援助](名)たすけ、助勢。

(**ふん・ざん**[遠竄](名)遠き所へのがれながし。

(**ふん・ぢ**[遠邇](名)とほきとちかきと。

(**ふん・ぢ**[遠視](名)㊀遠きを見ること。㊁遠方の見ゆること。㊂ゑんぢがんの略言。——**がん**[遠視眼](名)眼球の水晶體が扁平なるため又は眼底の淺きため、近き物體をよく視ること能はず、却て遠き物體をよく視得る眼、老人及航海者などの眼に多し、近視眼の對。

(**ふん・ぢ・り**[圓周](名)【數】圓を圍める線、——**りつ**[圓周率](名)【數】一つの圓の周圍の長さと其直徑との比、三・一四一六弱とす。

(**ふん・ぢ・り・りう**[遠州流](名)㊀活花の一派、小堀遠江守政一より始まる。㊁活花の一派、其だしく花を撓むるをよしとするもの。「ん」に同じ。

(**ふん・ぢつ・てん**[遠日點](名)【天】ゑんにちて

(**ふん・ぢゆ**[遠隔](名)とほきかたゝなか。

ふん・ぢゆ[槐](名)【植】豆科に屬する木、葉は羽狀複葉にして小葉は帶白色の下面に附き、花は淡白色にして蝶形をなす、初夏の頃に開き、複總狀花序に排列す、莢(ヤ)を結ぶ、木材は種々の用に供せられ皮は染料に供せらる。

(**ふん・ぢん**[遠人](名)遠國の人、「一を懷柔す」。

(**ふん・ぢん**[圓心](名)【數】圓周の各點より等距

離にある點。圓の中心。

(ゑんぶ)ん-りよく[遠心力](名)【理】運動せる物體が求心力の作用を受くるとき、物體は其慣性により求心力に抗す、此抗抵起るを以て、物體は恰も求心力と等しく且つ反對の力の作用を受けつゝあるものと考ふべし、此假想的の力を遠心力といふ。

++ゑん-ず[怨](他、さ變)うらむ。あやしうはかりしことにて此月ごろゑんじたまへば。

(ゑん)-すい[遠陣](名)「ゑんぢゆ」に同じ。

(ゑん)-すけ[圓助](名)一圓の隱語。

(ゑん)-する[遠離](名)とはきくにざかひ。

++ゑん-する[淵醉](名)古昔、禁中にて酒食(キヂ)などの後に行はれし宴。

(ゑん-せい[遠征](名)㊀遠き地方を征伐すること。㊁遠き地方にもむくこと。

(ゑん-する[圓錐](名)「ゑんすゐたいの略言。

——きよくせん[圓錐曲線](名)【數】楕圓・拋物線及雙曲線の稱、直圓錐體を斜に切る切口は楕圓にして、母線に平行なる切口は拋物線なり、又、一の直圓錐面と其對頂圓錐面との軸に平行なる平面にて切りたる二つの切口は雙曲線なり。

——たい[圓錐體](名)【數】圓錐面とこれを切る平面との間に含まるゝ立體、直圓錐面の軸に垂直なる平面に界する立體は卽ち直圓錐體なり。

——づはふ[圓錐圖法](名)次條に同じ。

——ほうえい[圓錐投影法](名)【地】地球の表面を圓錐面に投影してこれを展開したる地圖。

——ぼく[圓錐木](名)幹長大にして枝は下部最も長く上方に行くに從ひ漸々短くして圓錐形をなすもの、即ちすぎもみ等これなり。

——めん[圓錐面](名)【數】直線が定點を過ぎ且つ定點と同平面上にあらざる曲線に常に交はる樣に動きて生ずる表の面中央點を界とする一半、他半はこれに對して對頂圓錐面といふ、定點を頂點いとひ、動く直線を母線といふ、與へられたる曲線が圓にして頂點若し圓の中心より立てる垂線上にあらば直圓錐面といひ、此垂線を軸といふ。

(ゑん-せん[婉然](名、副)㊀にこやかなるさまにいふ語。

(ゑん-せん[宛然](副)さながら、あだかも。

(ゑん-そう[淵藪](名)(ふちとやぶとの義)其物事のあつまりつどふ所。

(ゑん-そく[遠足](名)運動のため遠路を步行すること。

(ゑん-だい[遠大](名)あさはかならずして規模の大いなること。

(ゑん-たい[圓壔](名)【數】直線が他の定直線に常に平行に且つ定直線と同平面上にあらざる曲線に常に交はる樣に動きて生ずる表面と、定直線を軸といひ、動く直線を母線といふ、曲線が圓にして二つの平面が軸に垂直なるときは直圓壔なり。

(ゑん-たり[遠島](名)德川時代の刑罰、追放より重く死罪より輕く、伊豆・薩摩の七島・肥後の天草・佐渡・隱岐・壱岐等に流したり。流まながし。

(ゑん-だり[遠道](名)とはきみち。

(ゑん)たらう-ばゐや[圓太郎馬車](名)圓太郎といふ落語家がよく舞臺にて、御者の吹く喇叭をまねて吹きしよりいふ。

(ゑん-ち[遠地](名)とはき土地。

(ゑん-ち[園池](名)そのといけと。

(ゑん-ちてん[遠地點](名)【天】白道上地球に最も遠き點。

(ゑん-ちゆう[圓柱](名)㊀まるきはしら。㊁ゑんたう(圓壔)に同じ。

——たい[圓柱體](名)前條(二)に同じ。

——ぢうえいはふ[圓柱投影法](名)【地】地球の表面を圓柱上に投影し、これを展開したる地圖の製法、卽ち緯線及經線を平面上にて互に垂直なる直線にて表はすもの。

(ゑん-ちゆう-るゐ[圓蟲類](名)【動】蠕形動物の一、體軀は筒狀をなして蚯蚓に似たれど環節なし、概ね雌雄異體にして卵生なり、寄生蟲多し、蛔蟲などこれに屬す。

(ゑん-てい[園丁](名)うゑきや。にはつくり。

(ゑん-てん[宛轉](名)㊀やさしきさまにて動きゆるぐこと。「舞容—」。㊁著(ツ)かず離れず物事にまたがひてめぐること。

(ゑん-てん[圓轉](名)㊀まろくめぐること。㊁かどたゝずに轉ずること。

——くわつだつ[圓轉滑脫](名)ことば又は處置のかどたゝず、よく變化してかゝはる所のなきこと。

(ゑん-ざう[豌豆](名)【植】豆科に屬する植物、田園に栽培せらる、莖は上昇す、葉は藤に似、帶白色なり、春の頃紫色蝶形の花開く、種子及莢共に食用に供せらる。

——ざう[豌豆瘡](名)疱瘡。

(ゑん-さく[怨讐](名)うらみにくむこと。うらみそしること。

——まめ[豌豆](名)ゑんどうの種子。

(ゑんにち-てん[遠日點](名)【天】地球の軌道にて太陽に最も遠き點。

(ゑん-ば[遠馬](名)馬のとほのり。

(ゑん-ばう[遠望](名)遠くをのぞむこと。

(ゑん-ぼう[怨望](名)恨みにおもふこと。怨恨。

(ゑん-ばう[遠方](名)遠き所。遠くの方。

(ゑん-び[婉美](名)やさしくうつくしきこと。

(ゑん-び[猿臂](名)手をのばしてものをつかむときの手の稱。

(ゑん-ぷ[怨府](名)うらみのあつまる所。

(ゑん-ぷん[怨憤](名)うらみいきどほること。

(ゑん-ぺい[援兵](名)すくひの軍勢。加勢。

ゑんま[綸馬](名)「ゑんま」の音便。

ゑん-まん[圓滿](名)㊀十分に滿ち足りてあること。かけたる所なきこと。㊁ふつくりとしてゆたかなること。ふく〳〵しきこと。㊂かどたゝずして人つきあひのよきこと。感情のはげしからざること。

(ゑんもん[轅門](名)《支那の古代、轅(エダ)を以てつくりしよりいふ》軍門。

(ゑん-より[婉容](名)やさしきすがた。

(ゑん-らい[遠來](名)遠方より來ること。

(ゑん-りよ[遠慮](名)㊀遠きもんぱかり。ふかきかんがへ。「—をめぐらす」。㊁轉じて、人に對して慇懃にすること。謙遜。「と、」。

(ゑん-りやく[遠略](名)とほくふかきはかりごと。

(ゑん-りん[園林](名)その、はやし。

(ゑん-るゐ[遠類](名)緣の遠き親類。(疎親)。

(ゑん-ろ[圓顱](名)まろき坊主あたま。

(ゑん-ろ[遠路](名)とほみち。

を

を　母音うを從音とし母音おを主音としたる綴音。

を(名)㊀動物にては精子を有するもの、稱、植物にては雄蕊を具するもの、稱。(牡、雄)。㊁をとこ。男子。㊂をっと。良人。

を[廊](名)㊀[組]「あさ」に同じ。㊁あさ又はからむしなどの莖皮の纖維より採取したる絲。(苧)。

を[緒](名)㊀絲又は紐(ヒモ)などすべてものを結ぶ用にあつる細長き物の總稱。㊁履物にすげて足にかくる紐。履絲。㊂纖器にかくる絲。「琴の—」(絃)。㊃すべて長く續くもの。「たまの—」。

を[尾](名)動物の尻より伸び出でたるもの。ちりを。㊁山の稜(ノ)びたる處。

++を[峰](名)山の高き處。みね。

++を(助)㊀他動詞の目的たる名詞を表する語。「物—取る」。㊁自動詞の行はるゝ地位を表する語。「國—去る」「世—忍ぶ」。㊂事の意外なる意を表する語。「雪とのみふるだにある—櫻花、如何に散れとか風の吹くらん」。㊃語調を助くる無意味の語。「ぬれて—行かむ小夜は更くとも」。

++を(感)感歎の意の發聲。よ。「八重垣造るその八重の—」。

++を[唯](感)うけがひたる場合にこたふる發聲。はい。「人のめす柳いらへには、男はよと申し女は—と申すなり」。

を—[小](接頭)㊀細かき又は小さき意を表する語。「—山」。㊁すこし。いさゝか。「—止む雨」。

(を-あい[汚埃](名)けがれたるちり。

を-あさ[雄麻](名)[組]麻の一種、淡綠色なる小形の花開く、果實生ぜず。けむし。

を-あはせ[緒合](名)絃ある樂器の合奏。

をい(感)㊀十「をゑ」唯に同じ。「—をえ」。㊁呼びかけの聲。「づきて」。

++を-いくさ[男軍](名)をとこいくさ。

をい-をい(感)「をい」を重ねたる語。

++をう(感)驚く時の發聲。「—といひてにげにけり」。

++をうと[夫](名)をっと。を。++**——のをさと**[夫男](名)前條に同じ。

++をうね[女](名)をんな。「たとへば、繪にかける—を見て」。

++——ど[女子](名)前條に同じ。

(を-えつ[嗚咽](名)むせぶこと。又、むせびなき。

をか[岡](名)㊀土地の小高き所。(阜、丘)。㊁うへ。

をか[陸](名)地球の表面の水におはれざる地。くがゝくぬが。陸地。

をか[傍](名)かたはら。そば。局外。「—目」。

(を-かり[汚行](名)けがれたるおこなひ。

をかさはら-りう[小笠原流](名)武家の禮式の一派、足利義滿の時、小笠原長秀のはじめて定めたるもの。

をか-し[可笑](形、二)㊀笑ふべし。そしるに堪へたり。㊁++面白し。興あり。

をかし-がる[陸稻](名)をかぼ。

をかし-ばね[陸蒸氣](名)汽車の俗稱。

をかし-およりき[犯](自、さ四)「おかす」に同じ。

をか-すせ[麻桿](名)麻をまきつくるかせ。

をか-ばた[陸田](名)はたけ。水田の對。

++をが-たま-の-を[鬼打木](名)さかきの異稱。といへど、定かならず。

をが-ちいし[雄勝石](名)陸前國桃生郡雄勝より產出する石、色黑くして石盤又は敷石などに用ひらる。《玄昌石》。

をかづき[尾被](名)【動】「むささび」の一名。《鼯》。

をかっ-びき[岡引](名)「をかひき」に同じ。

++を-かつら[風](名)【植】「かつて」に同じ。

ちゃうちゃ　ちゃくりち　ちゃくりゅう　ちゃくりょう　ちゃくりょく　ちゃくりょくけん　ちゃくりょくけんさ　ちゃくりょくけんさき　ちゃくりょくけんさきけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょく　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけん　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつりょくけんしゅつ　ちゃくりょくけんさきけんしゅつりょく

同じ。

ほんだ-りつ 【小月】(名) 暦で、月の大小。

ほんだ-ろく 【本田六】(名) 暦で、月の異称。

ほんだ-わり 【本田割】(名) 二回の勝負で中盤に入り、勝ち負けを決めること。

ほんだ-わり 【小月

おとこ-あるじ [男主] (名) をとこのあるじ。

おとこ-おび [男帯] (名) 男子用のおび。幅狭く尺四五寸詰のもの。

おとこ-おや [男親] (名) 父をば。父。

‡おとこ-かた [男巫] (名) をとこのすがた。

おとこ-がた [男方] (名) をとこのかた。

おとこ-がた [男形] (名) 男子にいたつて役者。女形の對。「[語(三)]と縁のもの。

おとこ-かぶきゆ [男歌舞伎] (名) 男子の歌舞伎。

おとこ-ぎ [男気] (名) をとこだてのこころ。「侠気」。

おとこ-ぎらい [男嫌] (名) 女の男に近づくをきらふこと。

おとこ-ぐき [男岩] (名) 【地】岩の一種。

おとこ-ごころ [男心] (形一) 男子の衣服などに男子の身體の如きもの。「面」。

おとこ-ぜんしゅ [男専主] (名) 不倫の夫婦などの初に妻を嫌人に當はる者。

おとこ-ごろし [男殺] (名) ❶男をころすこと。❷男をたらし誘はすことのみをよとそ女。

おとこ-ざか [男盛] (名) 男子壮年の頃。男子の最も強壮なる年ばえ。

おとこ-ざたい [男世帯] (名) 男子のみにて女のなき世帯。「頭子」。

‡おとこ-ずき [男(自)き型] 男子と情を通ずること。

おとこ-すがた [男姿] (名) 男子のすがた。

おとこ-ずき [男好] (名) ❶男子の好むこと。一の[ナる]頃。❷女子の美理にして男を好むこと。

おとこ-たらし [男誑] (名) 男の誑惑。(誑惑)

おとこ-だて [男主] (名) をとこのあるじ。

おとこ-だて [男帯] (名) 男子用のおび。幅狭く尺四五寸詰のもの。

おとこ-だて [男親] (名) 父をば。父。

‡おとこ-だて [男(自)侠] (名) をとこのすがた。

おとこ-だて [男方] (名) をとこのかた。

おとこ-だて [男形] (名) 男子にいたつて役者。女形の對。「[語(三)]と縁のもの。

おとこ-だてゆ [男侠伝] (名) 男子の侠を[ナる]頃。

おとこ-ぢ [男気] (名) をとこだてのこころ。「侠気」。

おとこ-ぢらい [男嫌] (名) 女の男に近づくをきらふこと。

おとこ-ぢゃ [男茶] (名) 【植】茶の一種。

おとこ-ぢゃ [男茶] (名) 【植】茶の一種。

おとこ-ぢゃ-し [男炎] (形一) 男子の衣服などに男子の身體の如きもの。「面」。

おとこ-ぢょうにん [男職人

ぎょうこう

ぎょうこう

ぎょうこう

をろがむ・**むをがむ**。[拜](他、ま四)「をがむ」に同じ。

をろち[巨蛇](名)だいじゃ。うはゝみ。大蛇。

をろちのかがみ[尾鏡](名)山鳥の尾の影が水にうつるをなりといふ。

をを[唯唯](感)應(ヲウ)ふる聲。

をを・**しし**。[雄雄](形、二)いさましし。たけし。さかんなり。をとこらし。めゝしの對。

をを・**るるるれれ**。[撓](自、ら四)枝たわむ。たわみまがる。「やまべには花咲きをり」。

をん[雄](名)をす。をの對。

をんえき[瘟疫](名)はやりやみ。やくびやう。

をんが[溫雅](名)ものやはらかにして座亞ひさきと。ものやはらかにして座亞ひさきと。ものやはらかにして座亞ひさきと。おだやか。

をんがん[溫顏](名)柔和なる顏つき。

をんき[瘟鬼](名)疫病の神。

をんき[溫氣](名)あたゝかみ。暖氣。「きと。

をんきよう[溫恭](名)おとなしくうやゝしく。

をんけつ[溫血](名)あたゝかき血。——**どうぶつ**[溫血動物](名)哺乳類又は鳥類などの如く、體溫の外氣の溫度よりあたゝかき動物。

をんけん[穩健](名)文章のかき方又は議論のたて方の、穩當にして、かゝりしたること。

をんげん[溫言](名)やさしきことば。

をんこと[溫故](名)ふるきをたづねること。「なること。

をんこ・**とう**[溫厚](名)ものやはらかにして篤實の事をはむること。「一知新」。

をんご・**く**[遠國](名)とはきくに。ゑんごく。

——**ぶぎやう**[遠國奉行](名)德川時代に、江戸より遠く隔りたる地におきたる奉行の稱。即ち奈良・堺・伏見・長崎などの奉行これなり。

をん・**ざ**[穩座](名)貴人などの饗應に、つぎのまにありて相伴すること。

をんさ・**ん**[遠志](名)【植】ひめはぎに同じ。

をんさう[怨讐](名)うらみ。かたき。あだ。

をんさう[溫柔](名)ものやはらかなること。すなはちなること。——**きやう**[溫柔鄕](名)遊廓。色里。

をんさつ[溫室](名)あたゝかき室。むろ。

をんさふ[溫習](名)くりかへして習ふこと。「さらふと。復習。

をんさや[溫藉](名)座亞ひろくして擧動ものやかなること。

をんさやく[溫石](名)輕き石を燒き、綿又は布などに包みて、冬日又は病氣などのとき懷中して身體の暖を取るもの、鹽を固めて燒き赤くしたるものをも用ふ。をんなどを暖に包みて燒きたるものをも用ふ。

をんしの略言。溫石は穩和に包むが故にいふ)穩和を著たる人をあざけりていふ語。——**いし**[溫石石](名)信濃國高遠より產出する石、色黑し。溫石に用ふるに適す。

をんしゅん[溫順](名)おとなしくして人に忤(サカ)らはざること。ものやはらかなること。

をんしよく[溫色](名)立腹せる顏色。

をんしよく[溫職](名)いそがしかちすして利得ある職務。

をんせん[溫泉](名)地中より湧出する高溫度の水。いでゆ。をんせんば。「に同じ。——**ば**[溫泉場](名)溫泉のある場所。湯治場。——**やど**[溫泉宿](名)をんせんばの旅人宿。

をんぜん[溫然](名、副)おちつきたるさまなる又はおだやかなるさまにいふ語。

をんたい[溫帶](名)地(ヂ)[溫帶と寒帶との間の地帶、即ち夏至線の北冬至線の南に於ける氣候溫和なる地帶の稱。【植】森林植物帶の一、緯線三十六度より四十五度の間の稱。——**ぶよくぶつ**[溫帶植物](名)【植】溫帶に繁殖せる森林植物、栗・櫟等の如く落葉する濶葉樹これなり。

をんたう[溫湯](名)適度の溫度なる湯。

をんたう[穩當](名)道理にはまること。至當なること。

をんだん[溫暖](名)あたゝかなること。おとなしきこと。

をんだん[溫暖育](名)蠶を飼ふに、火力を用ひて室内をあたゝかくすること。「散」。

をんてき[怨敵](名)あだかたき。怨讐。「一退

をんど[溫度](名)溫冷の差。溫冷の程度。

をんどり[雉鳥](名)をどり。めんどりの對。

ヲンドル[溫坑](名)朝鮮などにて、室内の床下に土を以てつくりたる坑を通じ、中に火を焚(タ)きて暖を取るもの。

をんな[女](名)(「をみなの音便)人類の女性。めめこ。をうな。をなご。婦人。はしため。つかひめ。下女。下婢。——**になる**女の年頃になりて月經はじまるにいふ。

をんなあるじ[女主](名)女にして一家の主人たるもの。

をんなえや[女親](名)母。はゝおや。「の稱。

をんなかうむり[女冠](名)古昔、女の位

をんながく[女樂](名)女の奏する音樂。

をんながき(名)曆の頃まで、流行せし婦人の笠。

をんなかた[女方](名)女の方。

をんなかた[女形](名)芝居にて、女に出でたつ役者。をやま。

をんなかづら[女蔓](名)【植】「せんきゆう」に同じ。

をんながみ[女神](名)めがみ。ぢよしん。

をんなかみゆひ[女髮結](名)婦人の髮を結ぶことを業とする婦人。

をんなぎ[女氣](名)をなごき。「略言。

をんなぎだい[女義太](名)「をんなぎだいふ」の

をんなぎだいふ[女義太夫](名)女の語る「ざること。義太夫節。又、義太夫を語る女。

をんなきらひ[女嫌](名)男子の婦人を好まざること。

をんなぐさ(名)【植】せんきゆう(川芎)に同じ。

をんなぐるま[女車](名)女の乘る車。

をんなげいしや[女藝者](名)げいしや。藝妓。男藝者の對。

をんなこ[女子](名)㊀むすめ。㊁をんな。

をんなごころ[女心地](名)女のこゝろ。をな

をんなごころ[女心](名)前條に同じ。「ごゝろ。

をんなどもも[女兒供](名)㊀女とこどもと。

をんなどろし[女殺](名)㊀女をころすこと。㊁女を迷はすほどのみめよき男。

をんなぎか[女阪](名)神社又佛閣のある山の阪のけはしからざる方。(陰阪)。「しき頃。

をんなぎかり[女盛](名)女の容貌最もうるはしき頃。

をんなザンマイ[女三昧](名)女色に荒(ス)むこと。女に溺るゝこと。

をんなし[女](形、二)をんならし。

をんなおよたい[女世帶](名)をなごのみにて男のなき世帶。

をんなすがた[女姿](名)をんなのすがた。女らしきすがた。

をんなずき[女好](名)男子の女色を好むもの。

をんなたいふ[女太夫](名)興業物などの演藝を職とする女。

をんなたちか[女蹈歌](名)女の蹈歌、蹈歌の條を見よ。

をんなづかひ[女使](名)古昔、二月・十一月の上の申の日、大和國春日神社(勅使として向ひられし內侍。又、加茂祭にもありたり。男使の對。

をんなつき[女付](名)をんなぶり。

をんなつぶり[女振](名)をんなの居る所。

をんなどころ[女所](名)をんなの居る所。

をんなで[女手](名)㊀平假名の稱。男手の對。㊁女のたわざ。

をんなのこと[女子](名)わかき女。

をんなびでり[女旱](名)思ひをかくる程の女のなきこと。

をんなぶぶぶぶ。(自、は上二)女らしくなる。

をんなぶり[女振](名)女のかたち。

をんなべや[女部屋](名)㊀侍女又は下婢などの部屋。㊁すべて、女の居る室の稱。(閨房)。

をんなまかせ[女任](名)女中などに物事をまかせておくこと。

をんなみめ[姿](名)をばめ。めかけ。てかけ。

をんなみや[女宮](名)皇女。

をんなもぶ[女文字](名)をんなで、平假名。

をんなやく[女役](名)㊀女のする役。㊁女形。

をんなやくしや[女役者](名)役者の女性なるもの。

をんなゆ[女湯](名)浴場の女の入る方の湯。

をんならし[女](形、二)「をなごらし」に同じ。

をんなわざ[女業](名)女のなすわざ。「ちは。

をんなわらはは[女嬉](名)によおゆ。めめのわ

をんなわらべ[女童](名)㊀めめのわらは、女兒。㊁婢女と小兒と。

をんなを[女甚](名)美人の畫。

をんなぬん[怨念](名)怨みのおもひ。うらみ。

をんの・**ざ**[穩座](名)「をんざ」に同じ。

をんば[穩婆](名)うば。乳母。

をんばう[溫袍](名)綿いれ。ぬのこ。

をんびん[穩便](名)かどたゝぬも。おだやかなること。

をんりう[溫溜](名)腕の背部の灸穴。

をんりやう[怨靈](名)うらみたゝる死靈。

をんりやう[溫良](名)おだやかにしてたゞしきこと。すなほなること。

をんる[遠流](名)ゑんながし。遠島。「一せよとて、伊豆國へ流されける」。

をんれい[溫冷](名)あたゝかきとつめたきと。

をんわ[溫和](名)㊀おだやかにおちつきたること。すなはちおとなしきこと。㊁暖かにしてのどかなること。寒熱其中を得たること。

をんをん[溫溫](名、副)「をんぜん」(溫然)に同じ。

あつめおく辭乃林ちりもせで
ちとせかはらぐ和歌乃うら松

（續千載和歌集）

發音索引

アの部

アイ　あい（藍）
アイ　あひ（間）
アイ　あひ（遇）
アイ　あひ（相）
アイ　あゐ（藍）
アイアイガサ　あひあひがさ（相相傘）
アイウチ　あひうち（相擊）
アイガイ　あひがひ（相生）
アイガモ　あひがも（相鴨）
アイキヨウ　あいきやう（愛敬）
アイコトバ　あひことば（合詞）
アイサツ　あいさつ（挨拶）
アイジヨウ　あいじやう（愛情）
アイシライ　あひしらひ
アイジロ　あひじろ（間白）
アイズ　あひづ（會津）
アイズ　あひづ（合圖）
アイズチ　あひづち（相槌）
アイソウ　あいさう（愛相）
アイダ　あひだ（間）
アイタイ　あひたい（相對）
アイタガイ　あひたがひ（相互）
アイダガラ　あひだがら（間柄）
アイダチナシ　あひだちなし（間斷無）
アイテ　あひて（相手）
アイナシ　あひなし（間無）
アイナメマツリ　あひなめまつり（相嘗祭）
アイノコ　あひのこ（間子）
アイマ　あひま（間）
アイマイ　あいまい（曖昧）
アウ　あふ（會、逢、逢）
アウ　あふ（合）
アウヌク　あふぬく（仰）
アウノキ　あふのき（仰）
アウノク　あふのく（仰）
アウムク　あふむく（仰）
アエ　あへ（饗）
アエグ　あへぐ（喘）
アエテ　あへて（敢）
アエシライ　あへしらひ
アエシラウ　あへしらふ
アエナシ　あへなし（敢無）
アエモノ　あへもの（肴物）
アオ　あを（青）
アオ　あを（襖）
アオイ　あふひ（葵）
アオグ　あふぐ（扇）
アオグ　あふぐ（仰）
アオジ　あをぢ（青磁）
アオジ　あをじ（動物の名）
アオリ　あふり（煽）
アオル　あふる（煽）
アガウ　あがふ（贈）
アガナイ　あがなひ（贖）
アガナウ　あがなふ（贖）
アサウ　あざう（紗）
アサウ　あざふ（淺）
アサウラゾウリ　あざうらざうり（麻裏草履）
アキジイ　あきぢい（明治）
アキナイ　あきなひ（商）
アキナウ　あきなふ（商）
アゲツライ　あげつらひ（論）
アゲツラウ　あげつらふ（論）
アコオジオ　あかほぢほ
アサガオ　あさがほ（朝顏）
アサガレイ　あさがれひ（朝餉）
アサジ　あさぢ（淺茅）
アサジウ　あさぢふ（淺茅生）
アサジワラ　あさぢはら
アザナウ　あざなふ（糾）
アザナワル　あざなはる（糾）
アサユウ　あさゆふ（朝夕）
アザワラウ　あざわらふ（嘲笑）
アザワル　あざはる（糾）
アジ　あぢ（味）
アジ　あぢ（鯵）
アジキナシ　あぢきなし
アジサイ　あぢさゐ（紫陽花）

アシスモウ　あしすまふ
アシナウ　あしなふ（蹇）
アシナエ　あしなへ（蹇）
アシナエグ　あしなへぐ（蹇）
アシビヨウシ　あしびや（足拍子）
アジマサ　あぢまさ（樹の名）
アシマツイ　あしまつひ（蟬）
アシライ　あしらひ
アシラウ　あしらふ
アジロ　あぢろ（網代）
アジワイ　あぢはひ（味）
アジワウ　あぢはふ（味）
アシワラ　あしはら（葦原）
アスナロウ　あすならう
アズマ　あづま（吾妻）
アダイ　あたひ（價）
アタウ　あたふ（能）
アタウ　あたふ（與）
アダウ　あだふ（戲）
アタエ　あたへ（直）
アダナウ　あたなふ（寇）
アタリス　あたはず（交合）
アツカイ　あつかひ（扱）
アツカウ　あつかふ（扱）
アツカワシ　あつかはし（煩）
アツヨウ　あつえふ（厚薬）
アツラウ　あつらふ（誂）
アツラエ　あつらへ（誂）
アテガイ　あてがひ（宛行）
アテガウ　あてがふ（宛行）
アトウ　あとふ（誂）
アトウ　あとふ（聘）
アナエグ　あなへぐ（蹇）
アペカワ　あべかは（安倍川）
アホウ　あはう（阿房）
アボウ　あばふ（庇護）
アホウバライ　あはうばらひ（阿房拂）
アマオサエ　あまおさへ（雨押）
アマカワ　あまかは（甘皮）
アマギラウ　あまぎらふ
アマゴイ　あまごひ（雨乞）
アマツサエ　あまつさへ（剩）
アマノガワ　あまのがは（天河）
アメノウオ　あめのうを（鮠）
アメンボウ　あめんぼう（飴坊）
アメンボウ　あめんぼう（飴棒）
アヤウシ　あやふし（危）
アラウ　あらふ（洗）
アラガイ　あらがひ
アラガウ　あらがふ
アラギヨウ　あらぎやう（荒行）
アラジヨタイ　あらおよたい（新世帶）
アラソイ　あらそひ（爭）
アラソウ　あらそふ（爭）
アラタエ　あらたへ（荒妙）
アラワ　あらは（陽）
アラワス　あらはす（著）
アラワル　あらはる（現）
アリアイ　ありあひ（有合）
アリアワセ　ありあはせ（有合）
アリスイ　ありすひ（蟻吸）
アリドオシ　ありどほし
アルイワ　あるひは（或）
アルワ　あるは（或）
アワ　あは（淡）
アワ　あは（粟）
アワ　あわ（泡）
アワアワシ　あはあはし（淡淡）
アワイ　あはひ（間）
アワオ　あはを（合緒）
アワオ　あわを（沫緒）
アワシ　あはし（淡）
アワジムスビ　あはぢむすび（淡路結）
アワス　あはす（合）
アワセ　あはせ（合）
アワセ　あはせ（袷）
アワタ　あはた（陸）
アワダ　あはだ（粟田）
アワタダシ　あわたただし（慌）
アワダツ　あはだつ（粟起）
アワダヤキ　あはだやき
アワチヂミ　あはちぢみ
アワツ　あわつ（周章）
アワツケシ　あはつけし（淡）

アワテモノ　あわてもの
アワテル　あわてる（周章）
アワビ　あはび（鰒）
アワム　あはむ（淡）
アワモリ　あわもり（泡盛）
アワヤ　あはや
アワユキ　あわゆき（泡雪）
アワレ　あはれ（哀）
アワレ　あはれ（天晴）
アワレガイ　あはれがひ
アワレビ　あはれび（憐）
アワレブ　あはれぶ（憐）
アワレミ　あはれみ（憐）

イの部

イ（疲）　い
イ（膽）　い
イ（猪）　ゐ
イ（酒）　ゐ
イ（亥）　ゐ
イ（堰）　ゐ
イ（胃）　ゐ
イアイ　ゐあひ（居合）
イアウ　いあふ（射合）
イイ　いひ（櫃）
イイ　いひ（飯）
イイ　いひ（謂）
イイガイ　いひがひ（飯匙）
イエ　いへ（家）
イオ　いほ（五百）
イオ　いほ（庵）
イオ　いを（魚）
イオリ　いほり（庵）
イカ　いか（烏賊）
イカ　いか（五十日）
イカ　いか（穗）
イカガ　いかが（如何）
イカキ　いかき（笊）
イガキ　いがき（忌垣）
イカケ　いかけ（鑄掛）
イカス　いかす（活）
イカズチ　いかづち（雷）
イカダ　いかだ（筏）
イガタ　いがた（鑄型）
イカツシ　いかつし（嚴）
イカデ　いかで（爭）
イガミ　いがみ（眦）
イガミ　いがみ（歪）
イカメシ　いかめし（嚴）
イカモノ　いかもの（嚴物）
イカモノ　いかもの（僞物）
イカヨウ　いかやう（如何樣）
イキ　いき（意氣）
イキアウ　いきあふ（行合）
イキオイ　いきほひ（勢）
イキカエル　いきかへる（生返）
イキズカイ　いきづかひ（息遣）
イキチガイ　いきちがひ（行違）
イキドオリ　いきどほり（憤）
イキドオル　いきどほる（憤）
イキワカレ　いきわかれ（生別）
イク　いく（挿、植）
イケイ　ゐぐひ（居食）
イゲイ　いぐひ（齋杙）
イクエ　いくへ（幾重）
イクサ　いくさ（軍）
イクチ　いくち（兎唇）
イクビ　ゐくび（猪首）
イグワイ　いぐわい（意外）
イクワン　いくわん（衣冠）
イケ　いけ（池）
イケイザイ　ゐけいざい
イケガキ　いけがき（生垣）
イケス　いけす（籠）
イケズミ　いけずみ（活炭）
イケドリ　いけどり（生捕）
イケドル　いけどる（生捕）
イケニエ　いけにへ（生贄）
イケハギ　いけはぎ（生剝）
イケバナ　いけばな（活花）
イコウ　いとふ（息）
イコウ　いから（意匂）
イコウ　いから（衣桁）
イコン　ゐとん（遺恨）

イチヨ　いちよ（華）
イチヨ　いちよ（一朝）
イチジルシ　いちじるし（著）
イチズ　いちづ（一途）
イチズヤナシ　いちずやなし（遊廓）
イチミヨウ　いちみやう（一名）
イチヨウ　いちやう（一樣）
イチヨウ　いちよう（破竹）
イツ　いつ（何時）
イツ　いつ（機械）
イツ　いつ（通）
イツキ　いつき（樹）
イツキヨウ　いつきやう（一貫）
イツク　いつく（殺）
イツクシ　いつくし（嚴美）
イツクシミ　いつくしみ（慈）
イツクシム　いつくしむ（慈）
イツヨウ　いつよう（一回）
イツスンボシ　いつすんぼし（一寸法師）
イツツ　いつつ（四）
イツツル　いつつる（四）

イツム　いつむ（愚）
イモ　いも（妹）
イモ　いも（芋）
イモウト　いもうと（妹）
イモノ　いもの（穀物）
イモリ　いもり（井守）
イヤ　いや（嫌）
イヤシ　いやし（卑）
イユ　いゆ（癒）
イラウ　いらう（應）
イラエ　いらえ（應）
イラウ　いらう（惟）
イラツメ　いらつめ（郎女）
イリアイ　いりあひ（入相）
イリエ　いりえ（入江）
イリコ　いりこ（海參）
イリシホ　いりしほ（入潮）
イリシホ　いりしほ（炒鹽）
イリチガイ　いりちがひ（入交）
イリチガウ　いりちがふ（入交）
イル　いる（沃）

イル　いる（鑑）
イル　いる（射）
イル　いる（居）
イル　いる（以將都而）
イル　いる（炒）
イルカ　いるか（海豚）
イレカエ　いれかへ（入替）
イレコウ　いれかう（入替）
イレジエ　いれぢえ（入智恵）
イレチガイ　いれちがひ（入違）
イレチガウ　いれちがふ（入違）
イレカワリ　いれかはり（入代）
イレカワル　いれかはる（入代）
イロアイ　いろあひ（色合）
イロエ　いろえ（繪）
イロナボシ　いろなぼし（色直）
イワ　いは（岩）
イワイ　いはひ（祝）
イワイ　いはひ（齋）
イワウ　いはふ（祝齋）
イワオ　いはほ（巖）

イワキ　いわき（岩城）
イワン　いわん（遺憾）
イト　いと（糸）
イト　いと（絲）
イド　ゐど（井戸）
イトイ　いとひ（厭）
イトウ　いとふ（厭）
イトオシ　いとほし（愛）
イトオシム　いとほしむ（愛）
イトコ　いとこ（從兄弟）
イトナミ　いとなみ（營）
イトナム　いとなむ（營）
イトマ　いとま（閑）
イトマゴイ　いとまごひ（暇乞）
イドム　いどむ（挑）
イトワシ　いとはし（厭）
イナ　いな（稻）
イナ　いな（否）
イナカ　ゐなか（田舍）
イナナク　いなないく（嘶）
イナズマ　いなづま（稻妻）

イニシエ　いにしへ（古）
イニン　ゐにん（委任）
イヌ　いぬ（犬）
イヌ　いぬ（寢）
イヌ　いぬ（戌）
イネムリ　ゐねむり（居睡）
イノシシ　ゐのしし（猪）
イノチ　いのち（命）
イノリ　いのり（祈）
イノル　いのる（祈）
イバラ　いばら（茨）
イバラ　いばら（蕁麻）
イビキ　いびき（鼾）
イブカシ　いぶかし（訝）
イブカル　いぶかる（訝）
イブシ　いぶし（燻）
イブス　いぶす（燻）
イボ　いぼ（疣）
イマヨウ　いまやう（今樣）
イマワ　いまは（今際）
イミナ　いみな（忌名）

イム　いむ（忌嫌）
イモ　いも（妹）
イモ　いも（芋）
イモウト　いもうと（妹）
イモノ　いもの（穀物）
イモリ　ゐもり（井守）
イヤ　ゐや（嫌）
イヤシ　いやし（卑）
イユ　いゆ（癒）
イラウ　いらう（應）
イラエ　いらえ（應）
イラウ　いらう（惟）
イラツメ　いらつめ（郎女）
イリアイ　いりあひ（入相）
イリエ　いりえ（入江）
イリコ　いりこ（海參）
イリシホ　いりしほ（入潮）
イリシホ　いりしほ（炒鹽）
イリチガイ　いりちがひ（入交）
イリチガウ　いりちがふ（入交）
イル　いる（沃）

イル　いる（鑑）
イル　いる（射）
イル　ゐる（居）
イル　ゐる（以將都而）
イル　いる（炒）
イルカ　いるか（海豚）
イレカエ　いれかへ（入替）
イレコウ　いれかう（入替）
イレジエ　いれぢえ（入智恵）
イレチガイ　いれちがひ（入違）
イレチガウ　いれちがふ（入違）
イレカワリ　いれかはり（入代）
イレカワル　いれかはる（入代）
イロアイ　いろあひ（色合）
イロエ　いろえ（繪）
イロナボシ　いろなぼし（色直）
イワ　いは（岩）
イワイ　いはひ（祝）
イワイ　いはひ（齋）
イワウ　いはふ（祝齋）
イワオ　いはほ（巖）

イワシ いわし（鰯）
イワム いはむ（充滿）
イワレ いはれ（謂）
イワユル いはゆる（所謂）
イワンヤ いはんや（況）
インダンマメ いんげんまめ
インゴウ いんごふ（因業）
インコ いんこ（鸚哥）

ウの部

ウイ うゐ（有爲）
ウイウイシ うひうひし（初々）
ウイキヨウ ウキきやう（苗香）
ウイゴ うひご（初子）
ウイコウブリ うひかうぶり（初冠）
ウイザン うひざん（初産）
ウイジン うひぢん（初陣）
ウイタチ うひたち（初立）
ウイタビ うひたび（初旅）
ウイマナビ うひまなび（初學）
ウイロウ ウキラウ（外郎）
ウエ うゑ（飢）
ウエ うゑ（植）
ウエ うへ（餐）
ウエ うへ（上）
ウエノキヌ うへのきぬ（袍）
ウオ うを（魚）
ウオウザオ うわうざを（右往左往）
ウガイ うがひ（嗽）
ウガイ うがひ（鵜飼）
ウカガイ うかがひ（伺）
ウカガウ うかがふ（窺伺）
ウグイ うぐひ（石班魚）
ウグイス うぐひす（鶯）
ウケアイ うけあひ（請合）
ウケアウ うけあふ（請合）
ウケイ うけひ（誓）
ウケウ うけふ（誓）
ウケオイ うけおひ（請負）
ウケオウ うけおふ（請負）
ウケガイ うけがひ（諾）
ウケガウ うけがふ（諾）
ウケジョウ うけぢやう（請狀）
ウケタマワル うけたまはる
ウコナワル うこなはる（集）
ウジ うじ（蛆）
ウジ うぢ（氏）
ウシオ うしほ（潮）
ウシカイ うしかひ（牛飼）
ウシナウ うしなふ（失）
ウズ うず（髻華）
ウズナイ うづない（諾）
ウズナウ うづなふ（諾）
ウスヨウ うすえふ（薄葉）
ウズラ うづら（鶉）
ウタイ うたひ（謠）
ウタウ うたふ（訴）
ウタウ うたふ（歌）
ウタエ うたへ（訴）
ウタガイ うたがひ（疑）
ウタガワシ うたがはし（疑）
ウタリヨウ うたれう（雅樂寮）
ウチアイ うちあひ（打合）
ウチアウ うちあふ（打合）
ウチカエス うちかへす（打返）
ウチガワ うちがは（內側）
ウチヨウテン うちやうてん（有頂天）
ウチワ うちは（團扇）
ウチワ うちわ（內曲）
ウツオ うつほ（空）
ウツユウ うつゆふ（空蟲）
ウツタウ うつたふ（訴）
ウツタエ うつたへ（訴）
ウットウシ うったうし（鬱陶）
ウツロウ うつろふ（移）
ウツロウ うつろふ（映）
ウツワ うつは（器）
ウデオシ うでおし（腕押）
ウナイ うなひ（髑髏）
ウナイ うなひ（髑）
ウナウ うなふ（髑）
ウナジ うなじ（項）
ウバイ うばい（優婆夷）
ウバウ うばふ（奪）

ウベナウ うべなふ（諾）
ウママワリ うままはり（馬廻）
ウマヤジ うまやぢ（驛路）
ウマリヨウ うまれう（右馬寮）
ウヤマイ うやまひ（敬）
ウヤマウ うやまふ（敬）
ウラウエ うらうへ（裏表）
ウラナイ うらないひ（占）
ウラナウ うらないふ（占）
ウラワ うらわ（浦曲）
ウリカイ うりかひ（賣買）
ウルウ うるふ（閏）
ウルオイ うるほひ（潤）
ウルオス うるほす（潤）
ウルワシ うるはし（麗）
ウレイ うれひ（憂）
ウレウ うれふ（憂）
ウレエ うれへ（憂）
ウワオ うはを（後夫）
ウワオオイ うはおほひ（上覆）
ウワオソイ うはおそひ（上襲）
ウワガミ うはがみ（上紙）
ウワカワ うはかは（上側）
ウワキ うはき（浮氣）
ウワコト うはごと（譫言）
ウワサ うはさ（噂）
ウワテ うはて（上手）
ウワナリ うはなり（後妻）
ウワバミ うはばみ（蟒）
ウワベ うはべ（表）
ウワミ うはみ（褶）
ウツロワス うつろはす（移）

エの部

エ え（江）
エ え（枝）
エ え（股）
エ え（胞）
エ え（栖）
エ え（兄）
エ え（榎）
エ え（荏）
エ ゑ（餌）
エ ゑ（繪）
エ ゑ（會）
エイ えひ（鰯）
エウ ゑふ（醉）
エガオ ゑがほ（笑顏）
エクボ ゑくぼ（靨）
エゴイ ゑどい（惡）
エサ ゑさ（餌）
エズ ゑづ（繪圖）
エズク ゑづく（嘔吐）
エゾ ゑぞ（蝦夷）
エゾウシ ゑざうし（繪草紙）
エタ ゑた（穢多）
エダ えだ（枝）
エダチ えだち（役）
エダツ えだつ（役）
エツ ゑつ（鱈魚）
エツボ ゑつぼ（咲壺）
エト えと（兄弟）
エド ゑど（穢土）
エドル ゑどる（繪取）
エナ ゑな（胞衣）
エノキ ゑのき（榎）
エバ ゑば（餌）
エハチ えはち（衣鉢）
エビ えび（海老）
エビ えび（葡萄）
エビス えびす（惠比須）
エビラ えびら（箙、箱）
エボシ ゑぼし（烏帽子）
エミ ゑみ（笑）
エミジ えみじ（蝦夷）
エミワル ゑみわる（靨裂）
エモリ えもり（柄漏）
エモン えもん（衣紋）
エヤミ えやみ（疫）
エラ えら（鰓）
エラブ えらぶ（選）
エリ えり（襟）
エル える（選）

エル　ゑる（彫）
エンジュ　ゑんじゅ（槐）

オの部

オ　を（尾）
オ　を（麻）
オ　を（緒）
オ　を（峯）
オ　を（小）
オイ　おい（老）
オイ　おひ（笈）
オイイダス　おひいだす（追出）
オイカケ　おいかけ（老醫）
オイシ　おいし（甘）
オイタチ　おひたち（生立）
オイタツ　おひたつ（追立）
オイタツ　おひたつ（生立）
オイタテ　おひたて（追立）
オイテ　おいて（於）
オイボレ　おいぼれ（老耄）
オイラ　おいら（己等）
オイワケ　おひわけ（追分）
オウ　おふ（生）
オウ　おふ（負）
オウ　おふ（追、逐）
オウ　をふ（終）
オウゴ　あふご（初）
オウシ　おふし（唖）
オウセ　おふせ（仰）
オウテ　おふて（追手）
オウト　をうと（夫）
オウナ　をうな（女）
オオ　をを（唯々）
オオイニ　おほいに（大）
オオウ　おほふ（覆）
オオカタ　おほかた（大方）
オオカミ　おほかみ（狼）
オオギヨウ　おほぎやう（大形）
オオクナシ、オフケナシ　おほげなし
オオクナシ　おほげなし
オオシ　おほし（多）
オオセ　おほせ（仰）
オオフウ　おほふう（大風）
オオヤケ　おほやけ（公）
オカ　をか（陸）
オカ　をか（岡）
オカ　をか（傍）
オガ　おが（大鋸）
オカシ　をかし（可笑）
オカス　おかす（犯）
オカス　をかす（犯）
オカベ　おかべ（豆腐）
オガム　をがむ（拜）
オガワ　をがは（小川）
オキ　おき（燥）
オキ　おき（沖）
オキ　おき（息）
オギ　をぎ（荻）
オキテ　おきて（掟）
オキナ　おきな（翁）
オギナイ　おぎなひ（補）
オギナウ　おぎなふ（補）
オキナオル　おきなほる（起直）
オギノル　おぎのる（除）
オク　おく（起）
オク　おく（置）
オク　おく（奥）
オクツ　をくつ（麻鞋）
オクテ　おくて（奥手）
オクビ　おくび（社）
オクビ　おくび（欠）
オクビヨウ　おくびやう（臆病）
オクミ　おくみ（衽）
オクリナ　おくりな（諡）
オクル　おくる（送）
オクル　おくる（後）
オケ　をけ（桶）
オコシ　おこし（粗粉）
オコス　おこす（致）
オコス　おこす（起）
オゴソカ　おごそか（嚴）
オコタリ　おこたり（怠）
オコナイ　おこなひ（行）
オコナウ　おこなふ（行）

オコナワル　おこなはる（行）
オコリ　おこり（瘧）
オゴリ　おごり（驕奢）
オコル　おこる（起）
オコル　おこる（怒）
オゴル　おごる（驕奢）
オコワ　おこは
オサ　をさ（長）
オサ　をさ（筬）
オサウ　おさふ（押、抑）
オザス　をさす（建）
オサナゴ　おさなご（幼子）
オサナシ　をさなし（幼）
オサマル　をさまる（治、修）
オサマル　をさまる（收、納）
オサム　をさむ（治、修）
オサム　をさむ（收、納）
オシ　おし（壓）
オシ　おし（押）
オシ　おし（唖）
オシ　をし（惜）
オシ　をし（可愛、可惜）
オジ　をぢ（伯父、叔父）
オシアイ　おしあひ（押合）
オシイレ　おしいれ（押入）
オシオウ　おしあふ（押合）
オシウ　をしふ（教）
オジオジ　おぢおぢ（怖々）
オシカエス　おしかへす（押返）
オシキ　をしき（折敷）
オツケ　おつけ（怖氣）
オシネ　おしね（晩稲）
オシム　をしむ（惜）
オジメ　をぢめ（緒締）
オシロイ　おしろい（白粉）
オス　をす（牡）
オズシ　おずし（鈍）
オズシ　おずし（惇）
オズマシ　おずまし（惇）
オズマシ　をずまし（鈍）
オスワリ　おすわり（座）
オソウ　おそふ（襲）
オソザキ　おそざき（遲咲）
オソシ　おそし（遲）
オゾシ　おぞし（惇）
オゾシ　おぞし（鈍）
オソナワル　おそなはる（遲）
オゾマシ　おぞまし（惇）
オゾマシ　をぞまし（鈍）
オソレオオシ　おそれおほし
オソワル　おそはる（襲）
オダツ　おだつ（煽）
オダマキ　をだまき（苧環）
オダヤカ　おだやか（穩）
オチアイ　おちあひ（落合）
オチアウ　おちあふ（落合）
オチイル　おちいる（陷）
オチコチ　をちこち（遠近）
オチブル　おちぶる（落魄）
オチブレ　おちぶれ（落魄）
オツクウ　おっくふ（億劫）
オット　をっと（夫）
オットセイ　おっとせい
オトウト　おとうと（弟）
オトガイ　おとがひ（頤）
オドカス　おどかす（威）
オドケ　おどけ（諧謔）
オトコ　をとこ（男）
オドシ　おどし（威）
オドシ　をどし（縅）
オトシアナ　おとしあな（陷穽）
オトシイル　おとしいる（陷）
オドス　おどす（威）
オドス　おどす（縅）
オトズル　おとづる（訪）
オトズレ　おとづれ（訪）
オトツイ　をとつひ（一昨日）
オトナ　おとな（大人）
オトナ　おとな（乙名）
オドム　をどむ（沈澱）
オトメ　をとめ（小女）
オトリ　をとり（囮）
オトル　おとる（劣）
オドル　をどる（踊）

オトロウ　おとろふ（衰）
オトロエ　おとろへ（衰）
オナゴ　をなご（女子）
オナジ　おなじ（同）
オナミ　をなみ（男波）
オニ　おに（鬼）
オニガワラ　おにがはら（鬼瓦）
オニヤライ　おにやらひ（鬼離）
オノ　をの（斧）
オノオノ　おのおの（各）
オノズカラ　おのづから（自）
オノノク　をののく（戰慄）
オノレ　おのれ（己）
オバ　おば（祖母）
オバ　をば（伯母、叔母）
オビ　おび（帶）
オビジ　おびぢ（帶地）
オビタダシ　おびただし（夥）
オビヤカス　おびやかす（脅）
オビユ　おびゆ（怯）
オマエ　おまへ（御前）
オミ　おみ（臣、使主）
オミナ　をみな（女）
オミナエシ　をみなへし
オメク　をめく（叫喚）
オモイ　おもひ（思）
オモイイレ　おもひいれ（思入）
オモウ　おもふ（思）
オモエラク　おもへらく（以爲）
オモカイ　おもかい（面擊）
オモカゲ　おもかげ（面影）
オモカジ　おもかぢ（重舵）
オモガワリ　おもがはり（色變）
オモシロシ　おもしろし（面白）
オモダカ　おもだか（澤瀉）
オモテ　おもて（面）
オモト　おもと（萬年青）
オモネル　おもねる（阿）
オモハユシ　おもはゆし（面靦）
オモムキ　おもむき（趣）
オモムロ　おもむろ（徐）
オモヤ　おもや（母屋）
オモリ　おもり（重）
オモワク　おもはく（思）
オモンズ　おもんず（重）
オモンパカル　おもんぱかる
オヤ　おや（親）
オヤジ　おやぢ（親父）
オユ　おゆ（老）
オヨグ　およぐ（泳）
オヨソ　およそ（凡）
オヨブ　およぶ（及）
オリ　おり（澱）
オリ　をり（檻）
オリ　をり（時）
オリタツ　おりたつ（下立）
オリモノ　おりもの（織物）
オル　おる（下、降）
オル　おる（織）
オル　をる（折）
オレ　おれ（己）
オロカ　おろか（愚）
オロカガイ　おろかがひ（稽）
オロシ　おろし（颯）
オロス　おろす（卸）
オロソカ　おろそか（疎）
オロチ　をろち（大蛇）
オワル　をはる（終）
オンナ　をんな（女）

カの部

カイ　かい（櫂）
カイ　かひ（飼）
カイ　かひ（甲斐）
カイ　かひ（貝）
カイ　かひ（峽）
カイ　かひ（卵）
カイ　かひ（顯）
カイ　かひ（匙）
カイアワセ　かひあはせ（貝合）
カイガイシ　かひがひし
カイコ　かひと（蠶）
カイツカム　かいつかむ（掻摑）
カイツクロウ　かいつくろふ
カイツブリ　かいつぶり（鷿鷈）
カイツマム　かいつまむ（掻摘）
カイドリ　かいどり（掻取）
カイナ　かひな（肱、腕）
カイナデ　かいなで（掻撫）
カイボリ　かいぼり（掻堀）
カイマキ　かいまき（掻卷）
カイマミ　かいまみ（垣間見）
カイマム　かいまむ（垣間見）
カイモチイ　かいもちひ（掻餅）
カイモト　かいもと（垣下）
カイヤル　かいやる（掻遣）
カウ　かふ（代、替）
カウ　かふ（戀）
カウ　かふ（支）
カウ　かふ（交）
カウ　かふ（飼、養）
カウ　かふ（買）
カエサマ　かへさま（反樣）
カエス　かへす（返）
カエッテ　かへって（却、反、還）
カエデ　かへで（楓、鶏冠木）
カエナ　かへな（變名）
カエホス　かへほす（乾）
カエリミル　かへりみる（顧）
カエル　かへる（蛙、還、孵）
カエル　かへる（歸）
ガエンズ　がへんず（肯）
カオ　かほ（顏）
カオル　かをる（薫）
カガイ　かがひ（囃歌）
カカエ　かかへ（抱）
カカズラウ　かかづらふ（關）
カカワル　かかはる（係、關）
カキバイ　かきばひ（牡蠣灰）
カキワ　かきは（堅磐）
カケアイ　かけあひ（掛合）
カケガエ　かけがへ（掛替）
カケゴウ　かけがう（掛香）
カゲロイ　かげろひ（陽炎）
カゲロウ　かげろふ（陽炎）
カゲロウ　かげろふ（蜉蝣）
カコイ　かとひ（囲）
カジ　かぢ（梶）
カジ　かぢ（加持）
カジ　かぢ（鍛冶）
カジカ　かじか（鰍）
カシズキ　かしづき（傅）
カシズク　かしづく（傅）
カジョウ　かでう（箇條）
カシワ　かしは（柏）
カシワ　かしは（黄雞）
カシワデ　かしはで（柏手）
カズ　かず（數）
カスガイ　かすがひ（鑿）
カズラ　かづら（蔓）
カズラ　かづら（鬘）
カタイジ　かたいぢ（片意地）
カタガイ　かたがひ（片生）
カタガチ　かたがち（片落）
カタオモイ　かたおもひ（片思）
カタズ　かたづ（固唾）
カタズマ　かたづま（片隅）
カタズム　かたづむ（片詰）
カタホウ　かたはう（片方）
カタライ　かたらひ（語）
カタラウ　かたらふ（語）
カタワ　かたは（片端）
カタソラ　かたはら（傍）
カチアイ　かちあひ（搗合）
カチアウ　かちあふ（搗合）
カチョウ　かちやう（蜘蛛）
ガチョウ　がてう（鷺鳥）
カツオ　かつを（鰹）
カッコウ　かっかう（恰好）
ガッコウ　がくかう（學校）
ガッショウ　がっしやう（合掌）
ガッソウ　がっそう（合奏）
カッタイ　かったる（癩）
カッチュウ　かっちゅう（甲冑）
カッポウ　かっぱう（割烹）
カドワカシ　かどわかし（勾引）
カドワカス　かどわかす（勾引）

カホウ　かはふ（加法）
カホウ　かはふ（家法）
カナウ　かねふ（適）
カナエ　かねへ（冊）
カナズ　かねづ（奏）
カナズカイ　かねづかひ
カニウ　かにふ（加入）
カネアイ　かねあひ（兼合）
カノエ　かのえ（庚）
カマウ　かまふ（構）
カミユイ　かみゆひ（髮結）
カモイ　かもゐ（鴨居）
カモエ　かもえ（鴨柄）
カヨイチョウ　かよひちやう
カヨウ　かよう（斯樣）
カヨウ　かよふ（通）
カヨワシ　かよわし（弱）
カラカウ　からかふ（嘲弄）
カラザオ　からさを（連枷）
カリウド　かりうど（獵人）
カリオ　かりほ（假庵）

カルガユエニ　かるがゆゑに
カレイ　かれひ（鰈）
カレイ　かれひ（鰈）
カロウジテ　からうじて（辛）
カロハズミ　かろはずみ（輕率）
カワ　かは（皮）
カワ　かは（側）
カワ　かは（川、河）
カワボソ　かはぼそ（川瀨）
カワカス　かわかす（乾）
カワク　かわく（乾）
カワゴ　かはご（皮籠）
カワズ　かはづ（蛙）
カワセ　かはせ（爲替）
カワセミ　かはせみ（川蝉）
カワタケ　かはたけ（革茸）
カワタケ　かはたけ（河竹）
カワホリ　かはほり（蝙蝠）
カワヤ　かはや（廁）
カワユガル　かはゆがる（愛）
カワラ　かはら（川原）

カワラ　かはら（瓦）
カワラ　かはら（龍骨）
カワラウ　かはらふ（替）
カワラカ　かはらか（濕酒）
カワラケ　かはらけ（土器）
カワラゲ　かはらげ（川原毛）
カワラヒワ　かはらひは
カワラモノ　かはらもの
カワリ　かはり（代、變）
カワル　かはる（代、變）
カンガウ　かんがふ（考）
カンジキ　かんぢき（樏）
カンジョウ　かんぢやう（勘定）
カンドウ　かんだう（勘當）
カンビョウ　かんびやう（看病）
カンピョウ　かんぺう（乾瓢）
カンボウ　かんぼう（感冒）

キの部

キウス　きふす（急須）

キウダイ　きふだい（及第）
キカウ　きかふ（着替）
キガエ　きがへ（着替）
キキョウ　ききやう（桔梗）
キギョウ　きげふ（起業）
キクイムシ　きくひむし
キクジン　きくぢん（麴塵）
キコウ　きかふ（龜甲）
キコウ　きこう（氣候）
キコウ　きこう（貴公）
キゴウ　きがう（記號）
キザワシ　きざはし（木梯）
キザワリ　きざはり（氣障）
キジ　きぢ（木地）
キジ　きじ（雉）
キショウ　きしやう（氣性）
キショウ　きしやう（起請）
キジョウ　きぢやう（氣丈）
キズ　きず（疵、傷、瑕）
キズカウ　きづかふ（氣遣）
キズカワシ　きづかはし（氣遣）

キソウ　きそふ（競）
キタウ　きたふ（鍛）
ギダユウ　ぎだいふ（義太夫）
キチガイ　きちがひ（氣違）
キチジョウ　きちぢやう（吉祥）
キチヨウ　きちやう（几帳）
キッコウ　きっかふ（龜甲）
キトウ　きたう（祈禱）
キノウ　きのふ（昨日）
キノエ　きのえ（甲）
ギボウシュ　ぎばうしゆ
キマエ　きまへ（氣前）
キミョウチ　きみやうち
ヨウライ　やうらい
ギヤクジョウ　ぎやくぢやう
キヨウ　きやう（今日）
キヨウイク　けふいく（教育）
キヨウカ　きやうか（狂歌）
キヨウギ　きやうぎ（經木）
キヨウキ　けうき（淺季）
ギヨウギ　ぎやうぎ（行儀）
ギヨウギョウシ　ぎやうぎやう（仰々）

キヨウゲン　きやうげん（狂言）
キヨウケン　きやうけん（狂犬病）
ビヨウ　んびやう
ギヨウコウ　ぎやうかう（行幸）
ギヨウサン　ぎやうさん（仰山）
ギヨウズイ　ぎやうずゐ（行水）
キヨウソウ　きやうさう（競爭）
キヨウソウ　きやうさう（競漕）
ギヨウテン　ぎやうてん（仰天）
キヨウドウ　けうだう（教導）
キラウ　きらふ（嫌）
キラワシ　きらはし（可嫌）
キリドオシ　きりどほし（切通）
キリヨウ　きりやう（器量）
キワ　きは（際）
キワギワシ　きはぎはし（顯著）
キワダ　きはだ（黃肌）
キワダ　きはだ（生肌）
キワダ　きはだ（黃蘗）
キワダツ　きはだつ（際立）
キワドシ　きはどし（際疾）
キワマル　きはまる（極）

キワム　きはむ（極）
キンジョ　きんぢよ（近所）

クの部

クアイ　ぐあひ（工合）
クイ　くひ（杙）
クイアワセ　くひあはせ（食合）
クイタオス　くひたふす（食倒）
クイタオレ　くひたふれ（食倒）
クイチガイ　くひちがひ（喰違）
クイナ　くひな（水雞）
クウ　くふ（食）
ケウ　くふ（構）
ケサゾウシ　くさぞうし
クジ　くじ（籤）
クジク　くじく（挫）
クジョウ　くぢやう（苦情）
クジラ　くぢら（鯨）
クジル　くじる（抉）
クズ　くず（葛）
クズ　くづ（屑）

クズス　くづす（崩）
クズル　くづる（崩）
クチアイ　くちあひ（口合）
クチオシ　くちをし（口惜）
クチゴタエ　くちごたへ（口答）
クチナハ　くちなは（蛇）
クチヨウ　くてう（口調）
クツガエス　くつがへす（覆）
クツガエル　くつがへる（覆）
クツワ　くつわ（轡）
クツワ　くつわ（七八）
クトウ　くとう（句讀）
クニガエ　くにがへ（國替）
クニズメ　くにづめ（國詰）
クボウ　くばう（公方）
クミアウ　くみあふ（組合）
クミオ　くみを（組緒）
クミカワス　くみかはす（酌交）
クモイ　くもゐ（雲居）
クヨウ　くやう（供養）
クライ　くらゐ（位）

クラウ　こらう（倉）
クリカウ　こりかう（繰替）
クリカエス　こりかへす（繰返）
クリマワス　こりまはす（繰廻）
クルウ　くるう（狂）
クルウ　くるう（苦）
クレナイ　くれない（紅）
クロウ　くらう（苦労）
クロシホ　くろしほ（黒潮）
クワ　くは（桑）
クワ　くは（鍬）
クワウ　くはう（川）
クワシ　くはし（菓）
クワシ　くはし（菓子）
クワドツ　くはだつ（金）
クワハル　くはばる（加）

ケの部

ケアイ　けあい（喧合）
ケイキヨウ　けいきやう（景況）
ケオリ　けおり（毛織）
ケカエス　けかへす（蹴返）
ケガラワシ　けがらはし（穢）
ケガワ　けがは（毛皮）
ケギワ　けぎは（毛際）
ケコウ　けかう（下向）
ケシコス　けしこす（毛剃子）
ケジヨ　けじよ（下女）
ケシヨウ　けしやう（化粧）
ケスジ　けすぢ（毛筋）
ケソウ　けさう（懸想）
ケタカス　けたかす（蹴倒）
ケツトウ　けつとう（決答）
ケツボウ　けつぼう（缺乏）
ケツキウ　けつきう（月球）
ケツヨウ　けつえう（月曜）
ケツリヨウ　けつりよう（結了）
ケドウ　けだう（外道）
ケトウシン　けだうしん
ケヒヨウ　けびやう（假病）
ケロウ　けらう（下郎）
ケワイ　けはい（氣色）
ケンギヨウ　けんぎやう（檢校）
ケンコウ　けんかう（喧嘩）
ケンシヨウ　けんしやう（憲賞）
ケンジヨウ　けんじやう（謙上）
ケンジヨウ　けんじやう（謙讓）
ケンシヨウ　けんしやう（現象）
ケンロウ　けんらう（堅牢）
ケンロウ　けんらう（元老）

コの部

コイ　こい（鯉）
コイシ　こいし（戀）
コイチヤ　こいちや（濃茶）
コイネガワクハ　こいねがはくは（願）
コウクワイ　こうくわい（會）
コウ　こう（乞）
コウ　こう（戀）
コウオツ　かうおつ（甲乙）
コウジ　こうじ（小路）
コウバイ　こうばい（勾配）
コウバン　かうばん（甲板）
コエ　こえ（聲）
コオリ　こおり（氷）
コオリ　こおり（郡）
コオル　こおる（凍）
コオロギ　こおろぎ（蟋蟀）
コガイ　こがい（養蚕）
コガイ　こがい（子貝）
コガイ　こがい（小貝）
ココエ　ここえ（小聲）
ココノツ　ここのつ（九重）
ココロエ　ここころえ（心得）
ココロバセ　こころばく（意）
コジウ　こじう（五十）
コジキ　こじき（小四方）
コシオレ　こしおれ（腰折）
コシジ　こしぢ（越路）
コシツケ　こしつけ（衝會）
コシツケウ　こしつけのたかどの（五重塔）
コシヨウ　こしやう（胡椒）
コシラウ　こしらう（拵）
コシラエル　こしらへる
トコロ

コツ　こつ（骨）
コツエ　こつえ（術）
コツカイ　こつかい（小使）
コツカイ　こつかい（小遣）
コツメス　こつめう（牛頭）
コヒビアイ　こひびあい
コヒウ　こひう（小姓）
コヒタウ　こひたう（答）
コヒツル　こひつる（釣）
コヒヨウ　こひやう（切蝶）
コヒシキ　こひしき（乞食）
コトシ　ことし（夢枕）
コトソザ　ことざ（琴）
コトワル　ことわる（理）
コトワル　ことわる（斷）
コナイダ　こないだ（此間）
コナミジン　こなみじん
コノエ　このえ（近衛）
コヒカ　こひか（牛蒡）
コヒエ　こひえ（小前）
コミアウ　こみあう（込合）
コミジン　こみじん（粉微塵）
コヨイ　こよい（今宵）
コロモガエ　ころもがえ（更衣）
コロモガエ　ころもがへ（更替）
コワイイ　こはらい（頑強）
コワイケン　こはらけん
コワガル　こはがる（怯）
コワシ　こはし（強）
コワシ　こはし（可怖）
コワス　こはす（壞）
コワバル　こはばる（頑張）
コワメシ　こはめし（強飯）
コワル　こはる（壞）

サの部

サイズチ　さいづち（槌）
ザイリヨウ　ざいれう（材料）
サエザエシ　さえざえし（冴々）
サエズル　さえづる（囀）
サカ　さか（坂）
サカトス　さかとす（逆乙女）
サカイ　さかい（境）
サカウ　さかう（酒）
サカウ　さかう（坂）
サカスキ　さかすき（杯）
サカキジ　さかきぢ（逆捩）
サカユ　さかゆ（榮）
サカラウ　さからう（逆）
トサキオト　さきおとと（昨一日昨）
トサキヤト　さきやとし（昨一年昨）
サキワウ　さきはう（幸）
ササウ　ささう（支）
サザエ　ささえ（榮螺）
ササアラ　ささあら（粗原）
ササワル　ささはる（障）
サシ　さし（匙）
サシアウ　さしあう（差合）
サシエ　さしえ（挿絵）
サシオサウ　さしおさう（差押）
サシカケウ　さしかける（差掛）
サシカエ　さしかへ（差換）
サシカエル　さしかへる（差替）
サカイ　さかい（境）
サカウ　さかう（酒）
サカウ　さかう（坂）
サカスキ　さかすき（杯）
サカキジ　さかきぢ（逆捩）
サカユ　さかゆ（榮）
サカラウ　さからう（逆）
トサキオト　さきおとと（昨一日昨）
トサキヤト　さきやとし（昨一年昨）
サキワウ　さきはう（幸）
ササウ　ささう（支）
サザエ　ささえ（榮螺）
ササアラ　ささあら（粗原）
ササワル　ささはる（障）
サシ　さし（匙）
サシアウ　さしあう（差合）
サシエ　さしえ（挿絵）
サシオサウ　さしおさう（差押）
サシカケウ　さしかける（差掛）
サシカエ　さしかへ（差換）
サシカエル　さしかへる（差替）
サシズ　さしづ（指圖）
サシソイ　さしそへ（差添）
サシナワ　さしなは（指繩）
サスリ　さすり（撫）
サソウ　さそう（誘）
サツオ　さつを（獵男）
サナエ　さなえ（早苗）
サブライ　さぶらひ（侍）
サブラウ　さぶらふ（候）
サマヨウ　さまよう（彷徨）
サムライ　さむらひ（侍）
サムラウ　さむらふ（候）
サヨウ　さやう（樣樣）
サラウ　さらう（復習）
サラウ　さらう（浚）
サルマワシ　さるまはし（猿廻）
サレコウベ　されかうべ（髑髏）
サワ　さは（澤）
サワガシ　さわがし（騷然）
サワガス　さわがす（騷）
サワガ　さわが（騷）
サシズ　さしづ（指圖）
サシソイ　さしそへ（差添）
サシナワ　さしなは（指繩）
サスリ　さすり（撫）
サソウ　さそう（誘）
サツオ　さつを（獵男）
サナエ　さなえ（早苗）
サブライ　さぶらひ（侍）
サブラウ　さぶらふ（候）
サマヨウ　さまよう（彷徨）
サムライ　さむらひ（侍）
サムラウ　さむらふ（候）
サヨウ　さやう（樣樣）
サラウ　さらう（復習）
サラウ　さらう（浚）
サルマワシ　さるまはし（猿廻）
サレコウベ　されかうべ（髑髏）
サワ　さは（澤）
サワガシ　さわがし（騷然）
サワガス　さわがす（騷）
サワガ　さわが（騷）

サワサワ　きわきわ（爽々）
サワス　きはす（醂）
サワヤカ　きわやか（爽）
サワラ　きはら（椹）
サワラ　きはら（鰆）
サワラビ　きわらび（早蕨）
サワリ　きはり（響銅）
サワル　きはる（障）
サワル　きはる（觸）
サンバソウ　きんばそう

シの部

ジ　ぢ（柱）
シアイ　ちあひ（仕合）
シアイ　ちあひ（地合）
シアウ　ちあふ（爲合）
シアワセ　ちあはせ（仕合）
シイ　ちひ（椎）
ジイ　ちい（祖父）
シイタケ　ちひたけ（椎茸）
シイテ　ちひて（强）
シイナ　ちひな（粃）
シウ　ちふ（强）
シウ　ちふ（誣）
シウト　ちうと（舅）
ジウドウ　ちうどう（柔道）
シウトメ　ちうとめ（姑）
シウニウ　ちうにふ（收入）
ジウノウ　ちうのう（十能）
シエタク　ちへたく（虐）
シオ　ちほ（一入）
シオアイ　ちほあひ（汐合）
シオウス　ちほうす（爲果）
シオジ　ちほぢ（潮路）
シオジム　ちほぢむ（潮染）
シオズケ　ちほづけ（鹽漬）
シオハユシ　ちほはゆし（鹹）
シオル　ちをる（萎）
シオル　ちをる（撓）
シオル　ちをる（捩）
ジカ　ぢか（直）
シカウ　ちかふ（仕替）
シカエス　ちかへす（仕返）
シキガワ　ちきがは（敷皮）
シキガワラ　ちきがハラ（敷瓦）
ジキサン　ぢきさん（直參）
ジギヨウ　ちげふ（事業）
シクジル　ちくじる（失敗）
ジゴ　ぢご（持碁）
ジゴウ　ちがう（次號）
シコウシテ　ちかうして（而）
ジゴエ　ぢごゑ（地聲）
ジジ　ぢぢ（祖父）
ジジウ　ちぢふ（四十）
シシビシオ　ちちびしほ（醢）
シジミガイ　ちちみがひ（蜆貝）
シシヨウ　ちちやう（死傷）
シズ　ちづ（迷）
シズカ　ちづか（靜）
シズク　ちづく（雫）
シズシズ　ちづちづ（徐徐）
シズマル　ちづまる（鎭）
シズム　ちづむ（鎭）
シズム　ちづむ（沈）
シソウ　ちさう（思想）
シソコナウ　ちそこなふ（爲損）
シタウ　ちたふ（聶）
シタガウ　ちたがふ（從、隨）
シタジ　ちたぢ（下地）
シタマエ　ちたまへ（下前）
シタワシ　ちたはし（可羞）
シチジウ　ちちぢふ（七十）
シツクイ　ちっくひ（漆喰）
シッパライ　ちっぱらひ（後拂）
シツラウ　ちつらふ（裝置）
シナイ　ちなひ（竹刀）
シナウ　ちなふ（撓）
シバイ　ちばゐ（芝居）
ジビヨウ　ちびやう（持病）
シボウ　ちばう（脂肪）
シボウ　ちばう（死亡）
シマイ　ちまひ（仕舞）
シマウ　ちまふ（仕舞）
シメジ　ちめぢ（占治）

ジモク　ぢもく（除目）
ジヤ　ぢや（蛇）
ジヤク　ぢやく（持藥）
シヤクジ　ちやくぢ（錫杖）
ヨウ　やう（赤銅）
シヤクドウ　ちやくどう（赤銅）
ジヤコウ　ぢやかう（麝香）
ジヤマ　ぢやま（邪魔）
シユス　ちゆす（繻子）
ジユズ　ぢゆず（數珠）
ジユバン　ぢゆばん（襦袢）
ジユミヨウ　ぢゆみやう（壽命）
シヨウガ　ちやうが（生薑）
ジヨウゴ　ぢやうご（漏斗）
シヨウゾク　ちやうぞく（裝束）
シヨウノウ　ちやうなう（樟腦）
ジヨウノウ　ぢやうなふ（上納）
シヨウブ　ちやうぶ（菖蒲）
ジヨウフ　ぢやうふ（丈夫）
ジヨウマエ　ぢやうまへ（錠前）
シヨウヤ　ちやうや（庄屋）
シヨウユ　ちやうゆ（醬油）
ジヨウルリ　ぢやうるり
ジヨロウ　ぢよらう（女郎）
シラヌイ　ちらぬひ（不知火）
シリイ　ちりゐ（尻居）
シリエ　ちりへ（後）
シリオ　ちりを（尻尾）
シリガイ　ちりがい（鰍）
ジレル　ぢれる（悶、懊惱）
ジロウ　ぢらう（次郎）
シロウト　ちろうと（素人）
シロタエ　ちろたへ（白栲）
シワ　ちわ（皺）
シワガル　ちはがる（嗔）
シワザ　ちわざ（仕業）
シワシ　ちはし（笞）
シワス　ちはす（師走）
シワブク　ちはぶく（咳）
シワム　ちわむ（皺）

スの部

スアイ　すあひ（銑腹）
スアイ　すあひ（牙儈）
スアエ　すあへ（酢齏）
スイバ　すいば（酸葉）
スウ　すふ（吸）
スウ　すう（据）
スエ　すゑ（末）
スエヒロ　すゑひろ（末廣）
スエフロ　すゑふろ（据風呂）
スエモノ　すゑもの（陶物）
スオウ　すはう（素袍）
スガウ　すあう（素襖）
スガオ　すがほ（素顔）
スキガエシ　すきがへし（漉返）
スギソイ　すきはひ（生業）
スギソラ　すぎはら（杉原）
ズク　づく（豆蔻）
ズク　づく（銑）
スクウ　すくふ（救）
スクウ　すくふ（掬）
スクウ　すくふ（抄）
ズシ　づし（廚子）
ズシ　づし（途子、横巻）
スジカイ　すぢかひ（筋違）
スジヨウ　すぢやう（素性）
スジル　すぢる（捩）
スズ　すず（鈴）
スズ　すず（錫）
ズズ　ずず（數珠）
スズカケ　すずかけ（篠懸）
スズカゼ　すずかぜ（涼風）
スズキ　すずき（鱸）
スズシ　すずし（涼）
スズシ　すずし（生絹）
スズナ　すずな（菘）
スズム　すずむ（納涼）
スズメ　すずめ（雀）
スズリ　すずり（硯）
ズダ　づだ（頭陀）
ズツ　づつ（宛）
ズツ　ずつ（豆子）
ズツウ　づつう（頭痛）
ステオブネ　すてをぶね

スドオリ すどほり（素通）
スナオ すなほ（素直）
スナワチ すなはち（乃、則、即）
ツバイモモ つばいもも（椿桃）
ズボシ づぼし（圖星）
スマウ すまふ（住）
ズミ ずみ（桷）
スモウ すまふ（相撲）
スリエ すりゑ（擂餌）
スワ すは（驚破）
スワル すわる（坐）
ズンバイ づんばい（瓢石）

セの部

セイゾロエ せいぞろへ（勢揃）
セイロウ せいろう（蒸籠）
セキジ せきぢ（關路）
セキトウ せきたふ（石塔）
セワシ せはし（忙）

ソの部

ソイブシ そひぶし（副臥）
ソウ さう（然）
ソウ そふ（添、副、傍、沿）
ゾウ ぞう（象）
ゾウスイ ぞうすゐ（雜炊）
ソウゾウ さうぞう（想像）
ソウドウ さうどう（騷動）
ゾウヒヨウ ぞうひやう（雜兵）
ソウメン そうめん（素麺）
ゾウヨウ ぞうよう（雜用）
ゾウリ ぞうり（草履）
ソエジ そへぢ（添乳）
ソエジヨウ そへぢやう（添狀）
ソコナウ そこなふ（損）
ソナウ そなふ（備、具）
ソノウ そのふ（園生）
ソナワル そなはる（備、具）
ソバズエ そばづゑ（傍杖）
ソバツカエ そばつかへ（近侍）
ソイネ そひね（副寢）
ソイバ そひば（添齒）
ソメカエシ そめかへし（染返）
ソメカワ そめかは（染革）
ソラボエ そらぼえ（空覺）
ソラワライ そらわらひ（空笑）
ソロウ そろふ（揃）
ソワル そはる（添）

タの部

タイ たひ（鯛）
ダイズ だいづ（大豆）
タイラカ たひらか（平）
タイラギ たひらぎ（成）
タイラグ たひらぐ（平）
タイラケシ たひらけし（平）
タウ たふ（堪）
タウエ たうゑ（田植）
タエイル たえいる（絶入）
タエテ たえて（絶）
タオス たふす（倒）
タオヤカ たをやか（婀娜）
タオヤメ たをやめ（手弱女）
タオル たをる（倒、仆）
タオル たをる（手折）
タガイ たがひ（違）
タガイチガイ たがひちがひ（互交）
タガウ たがふ（違、差）
タガエス たがへす（耕）
タグイ たぐひ（比、類）
タグウ たぐふ（比、類）
タクワウ たくはふ（貯、蓄）
タケナワ たけなは（酣）
タコウナ たかうな（筍、笋）
タシマエ たしまへ（足前）
タジロク たじろく（退避）
タズ たづ（鶴）
タズキ たづき（方便）
タズサウ たづさふ（携）
タズサワル たづさはる（干渉）
タタウ たたふ（稱）
タタウ たたふ（湛）
タタエゴト たたへごと（稱辭）
タタカイ たたかひ（戰）
タタカウ たたかふ（戰）
タタズマウ たたずまふ（佇）
タタナワル たたなはる（懸）
タダヨウ ただよふ（漂）
タチアイ たちあひ（立合）
タチアウ たちあふ（立合）
タチイ たちゐ（起居）
タチエ たちえ（立枝）
タチオクル たちおくる（立後）
タチオクレ たちおくれ（立後）
タチギエ たちぎえ（立消）
タチモトホル たちもとほる（徘徊）
タテカウ たてかふ（立替）
タテカエ たてかへ（立替）
タテドイ たてどひ（竪樋）
タテヒワ たてひわ（雙鶸）
タトイ たとひ（縱、假令）
タトウ たとふ（譬）
タトウガミ たとうがみ（懸紙）
タトエバ たとへば（例）
タニアイ たにあひ（谷間）
タビジ たびぢ（旅路）
タマウ たまふ（給）
タマウ たまふ（賜）
タマシイ たまゐ（魂）
タマズサ たまづさ（玉章）
タマノオ たまのを（玉緒）
タマハス たまはす（賜）
タメロウ ためらふ（躊躇）
タユトウ たゆたふ（搖蕩）
タライ たらひ（盥）
タワク たはく（戲）
タワケ たはけ（戲）
タワゴト たはごと（戲言）
タワム たわむ（撓）
タワムル たはむる（戲）
タワムレ たはむれ（戲）
タワラ たはら（俵）
タワル たはる（戲、狂）
タワレメ たはれめ（遊女）
ダンジリ だんぢり（車樂）

チの部

チアエノマツリ ちあへのまつり（道饗祭）
チイサシ ちひさし（小）
チウジキ ちうぢき（晝食）
チエ ちゑ（智惠）
チカウ ちかふ（誓、盟）
チガウ ちがふ（違）
チカラガワ ちからがは（力革、逆粗）
チシオ ちしほ（血汐）
チジム ちぢむ（縮）
チジル ちぢる（縮）
チズ ちづ（地圖）
チスジ ちすぢ（血筋）
チソウ ちそう（馳走）
チヤボウキ ちやぼうき（茶帚）
チヤホウジ ちやはうじ（茶焙）
チヤボウズ ちやぼうず
チヤリヨウ ちやれう（茶寮）
チヨウアイ ちやうあひ（帳合）
チヨウズ てうづ（手水）
チヨウツガイ てふつがひ（蝶番、扇鉸）
チヨウナ てうな（手斧）
チリヅカ ちりづか（塵塚）
ツイ つゐ（對）
ツイ つひ（終）
ツイジ ついぢ（築地）
ツイズ ついづ（次序）
ツイテ ついて（就）
ツイデ ついで（尋）
ツイニ つひに（終）
ツイバム ついばむ（啄）
ツイヤス つひやす（費）
ツイユ つひゆ（弊、潰、費）
ツエ つゑ（杖）
ツカイ つかひ（使）
ツガイ つがひ（番）
ツカイモノ つかひもの（遣物）
ツカウ つかふ（使）
ツカウ つかふ（事）
ツカウ つかふ（支）
ツガウ つがふ（番）
ツカマエル つかまへる（捉）
ツカミアウ つかみあふ（掴合）

テの部

テカワス　てかはす（遊）
テキアウ　てきあふ（付合）
テキソウ　てきそう（敵対）
テクエ　てくえ（机）
テクズクシ　てくづくし（手尽）
テクビキ　てくびき（鍵鞭）
テクリノウ　てくりの（繰）
テクルバ　てくるば（路路）
テクリカエ　てくりかく（作為）
テクリカワ　てくりかは（為）
テクロウ　てくろう（黒）
テコウマツ　てこうまつ（仕業）
テジ　てじ（鍵手）
テジ　てじ（辻十字街）
テジツ　てじつ（條理）
テズミ　てづみ（数）
テズム　てづむ（約）
テズケ　てづけ（渡制）
テズタ　てづた（渡）
テズカリ　てづかり（手助）
テズリ　てづり（綴）
テスル　てする（綴）
テスレ　てすれ（綴）
テタ　てた（畳）
テタハル　てたはる（畳）
テチノエ　てちのえ（戊）
テツイ　てつい（鉄井）
テツカイ　てつかい（支柱）
テツカウ　てつかう（突支）
テツジ　てつじ（鉄瓶）
テドウ　てどう（銀）
テドズク　てどづく（敷）
テナウ　てなう（用）
テムジ　てむじ（鍵毛）
テムジカセ　てむじかせ（鍵風）
テモジ　てもじ（洋綴字）
テレアウ　てれあう（連合）
テワ　てわ（輪）
テワアキ　てわあき（綴字）
テワモノ　てわもの（兵）
テワリ　てわり（輪田）

トの部

トイ　とい（糊）
トイヤ　といや（回廊）
トウ　とう（疾）
トウツ　とうつ（峠）
トウトシ　とうとし（貴様）
トウトム　とうとむ（敬）
トウバ　とうば（塔婆）
トオ　とお（十）
トオアサ　とおあさ（遠浅）
トオザカル　とおざかる（遠）
トオザク　とおざく（遠）
トオシ　とおし（綻）
トオシ　とおし（遠）
トオス　とおす（通）
トオノク　とおのく（遠退）
トオマワシ　とおまはし
トオリ　とおり（通）
トオル　とおる（通）
トキワ　ときわ（常盤）
トコウ　とこう（左右）
トコシナエ　とこしなえ（常長）
トコロガエ　ところがえ（所替）
トシ　とし（綴）
トシウエ　としうえ（年上）
トシコム　としこむ（閉籠）
トシコモル　としこもる（閉籠）
トシバエ　としばえ（年廻）
トシヨウ　としやう（泥鰌）
トダエ　とだえ（跡絶）
トドコオル　とどこほる（滞）
トトノウ　ととのう（調整）
トナウ　となう（唱和）
トノイ　とのい（宿直）
トビカウ　とびかう（飛交）
トビチガウ　とびちがう（飛違）
トマエ　とまえ（戸前）
トマドイ　とまどい（戸惑）
トムラウ　とむらう（訪弔）
トモエ　ともえ（朝餉）
トモグイ　ともぐい（共食）
トモナウ　ともなう（伴）
トラウ　とらう（捉捕）
トラワレ　とらはれ（囚）
トリアエズ　とりあえず（不取敢）
トリイ　とりい（鳥居）
トリエ　とりえ（取得）
トリオイ　とりおい（鳥追）
トリオサウ　とりおさう（取押）
トリオトス　とりおとす（取落）
トリカウ　とりかう（取繕）
トリカエス　とりかえす（取返）
トリカケ　とりかけ（取能）
トリカワス　とりかはす（取交）
トリツクロウ　とりつくろう（取繕）
トリハカ　とりはか（取計）
トリハズス　とりはづす（取外）
トリマワス　とりまはす（取廻）
トリメナオ　とりめなを（取不直）
トリワズガ　とりはずが（不問語）

ナの部

ナウ　なう（綯）
ナエ　なえ（苗）
ナオ　なほ（尚猶）
ナオザリ　なほざり（等閑）
ナオシ　なほし（直表）
ナオシ　なほし（直）
ナオス　なほす（直）
ナオル　なほる（直）
ナオレ　なほれ（名折）
ナカイ　なかい（仲居）
ナガイ　ながい（長居）
ナガエ　ながえ（轅）
ナガエ　ながえ（長柄）
ナカガイ　なかがい（仲買）
ナカズミ　なかずみ（中墨）
ナカガズミ　なかづみ（中敷）
ナカタガイ　なかたがい（中違）
ナカナオリ　なかなほり（中直）
ナカニワ　なかには（中庭）
ナカユイ　なかゆい（中結）
ナカライ　なからい（交際）

ナカラウ　ながらふ（存命）
ナゲカワシ　なげかはし（可歎）
ナコウド　なかうど（媒）
ナゴリオシ　なごりを（名殘惜）
ナシジ　なしぢ（梨子地）
ナジミ　なじみ（馴染）
ナジム　なじむ（馴染）
ナジル　なじる（詰）
ナヅ　なづ（撫）
ナヅク　なづく（名付）
ナヅム　なづむ（澁滯）
ナゾエ　なぞへ（傾斜）
ナゾラウ　なぞらふ（準、准）
ナットウ　なっとう（納豆）
ナナソジ　ななそぢ（七十）
ナニナウ　なにれふ（名負）
ナニシオウ　なにしれふ（名負）
ナマエ　なまへ（名前）
ナマエ　なまふ（生餌）
ナマエイ　なまふひ（生醉）
ナマジイ　なまぶひ（怒）
ナマズ　なまづ（鯰、鯩）
ナマヨイ　なまよひ（生醉）
ナミイル　なみゐる（並居）
ナメクジ　なめくぢ（蛞蝓）
ナメシガワ　なめしがは（革）
ナメズル　なめずる（舐）
ナライ　ならひ（習）
ナライ　ならひ（東北風）
ナラウ　ならふ（習）
ナラウ　ならふ（傚、倣）
ナラワシ　ならはし（習慣）
ナリカワル　なりかはる（成代）
ナリワイ　なりはひ（生業）
ナレアイ　なれあひ（馴合）
ナワ　なは（繩）
ナワシロ　なはしろ（苗代）
ナンジ　なむぢ（汝、爾）

ニの部

ニアウ　にあふ（似合）
ニアワシ　にあはし（似合）
ニイナメ　にひなめ（新嘗）
ニイマイリ　にひまゐり（新參）
ニエ　にえ（鉞）
ニエ　にへ（贄）
ニエカエル　にえかへる（煮返）
ニオ　にほ（鳩）
ニオイ　にほひ（匂）
ニオウ　にほふ（匂）
ニオワシ　にほはし（匂）
ニオワス　にほはす（匂）
ニカワ　にかは（膠）
ニギワイ　にぎはひ（賑）
ニギワウ　にぎはふ（賑）
ニギワシ　にぎはし（賑）
ニギワス　にぎはす（賑）
ニジ　にじ（虹）
ニジウ　にぢう（二十）
ニジキ　にぢき（二食）
ニシキエ　にしきゑ（錦畫）
ニシジンオリ　にしぢんおり（西陣織）
ニジム　にじむ（滲）
ニジル　にじる（醤）
ニツカワシ　につかはし（似付）
ニナウ　になふ（擔）
ニラマウ　にらまふ（瞰）
ニワ　には（庭）
ニワカ　にはか（俄）
ニワタズミ　にはたづみ（行潦）
ニワトリ　にはとり（雞）

ヌの部

ヌイ　ぬひ（縫）
ヌウ　ぬふ（縫）
ヌカバエ　ぬかばへ（糠蝿）
ヌキンズ　ぬきんづ（抽擢）
ヌクウ　ぬぐふ（拭）

ネの部

ネオ　ねを（根緒）
ネガイ　ねがひ（願）
ネガウ　ねがふ（願）
ネガワクワ　ねがはくは（願）
ネガワシ　ねがはし（欲願）
ネギラウ　ねぎらふ（慰勞）
ネコジ　ねこじ（根掘）
ネジ　ねぢ（螺旋）
ネジキ　ねぢき（緩水）
ネジク　ねぢく（捩）
ネズ　ねづ（捩）
ネズク　ねづく（根付）
ネズマイ　ねずまひ（棲住）
ネビエ　ねびえ（棲冷）
ネラウ　ねらふ（狙）

ノの部

ノウレン　のうれん（暖簾）
ノジ　のぢ（野路）
ノジサ　のぢさ（野苣）
ノタマウ　のたまふ（宣）
ノタマワク　のたまはく（宣）
ノチゾイ　のちぞひ（後添）
ノドブエ　のどぶえ（喉吭）
ノミクイ　のみくひ（飲食）
ノリアイ　のりあひ（乘合）
ノリカエ　のりかへ（乘替）
ノロウ　のろふ（詛、呪）

ハの部

バアイ　ばあひ（場合）
バイアウ　ばひあふ（爭奪）
ハイズミ　はいずみ（播墨）
ハイト　はいと（單人）
バイトル　ばひとる（爭奪）
ハイル　はひる（這）
ハウコ　はふこ（這子）
ハエ　はえ（映）
ハエ　はえ（鮠）
ハエバエシ　はえばえし（映々）
ハオリ　はおり（羽織）
ハガイ　はがひ（羽交）
ハガエ　はがへ（葉替）
ハカラウ　はからふ（計）
ハジ　はし（端）
ハジ　はし（貴樞）
ハジ　はぢ（恥）
ハシイ　はしゐ（端居）
ハジカミ　はじかみ（椒）
ハジキ　はじき（彈）
ハジク　はじく（彈）
ハジク　はじく（罅裂）
ハジシム　はぢしむ（皮辱）
ハジム　はじむ（始）
ハジメ　はじめ（始）
パショウ　ばせを（芭蕉）
ハズ　はず（箸）
ハズ　はづ（恥）
ハズカシム　はづかしむ（辱）
ハスジ　はすぢ（蓮痔）
ハズス　はづす（外）
ハズム　はずむ（跳躍）
ハズル　はづる（外）
ハダエ　はだへ（膚）
ハツホ　はつほ（初穗）
ハカラウ　はからふ（計）
ハナワ　はなは（塙）
ハブタエ　はぶたへ（羽二重）
ハヤオ　はやを（早緒）
ハヤリオ　はやりを（早雄）
ハライ　はらひ（拂）
ハライ　はらひ（祓）
ハラウ　はらふ（拂、掃）
ハラエ　はらへ（祓）
ハラバウ　はらばふ（腹這）
ハンゾウ　はんざふ（半挿）

ヒの部

ヒアイ　ひあひ（日間）
ヒアワイ　ひあはひ（兩間）
ヒイキ　ひいき（贔屓）
ヒイジジ　ひいぢぢ（曾祖父）
ヒイズ　ひいづ（秀）
ヒイナ　ひひな（雛）
ヒエ　ひえ（稗）
ヒガ　ひを（氷魚）
ヒガオイ　ひれほひ（日覆）
ヒナガシ　ひれぼぢ（曾祖父）

ヒキメ　ひきめ（會祖母）
ヒキドシ　ひきどし（雜纏）
ヒカサ　ひかさ（笠）
ヒカエ　ひかえ（控）
ヒキイル　ひきいる（率）
ヒヨバエ　ひよばえ（蔓）
ヒザマズク　ひざまづく（跪）
ヒジ　ひぢ（肘）
ヒジ　ひぢ（泥）
ヒシオ　ひしほ（醬）
ヒシキ　ひしき（鹿尾菜）
ヒシクイ　ひしくい（鴨）
ヒジジ　ひぢぢ（曾祖父）
ヒジヨガキ　ひぢよがき（鉸具）
ヒシリ　ひしり（聖）
ヒズ　ひづ（氷頭）
ヒズミ　ひずみ（歪）
ヒズム　ひずむ（歪）
ヒズメ　ひづめ（蹄）
ヒタイ　ひたい（額）
ヒツジ　ひつじ（羊）
ヒツボ　ひつぼ（曾祖母）
ヒトドシ　ひとどし（雜纏）
ヒトカサ　ひとがさ（笠）
ヒトエ　ひとへ（一重）
ヒトエニ　ひとへに（偏）
ヒトエモノ　ひとへもの（單衣）
ヒトツオ　ひとつを（一人）
ヒノエ　ひのえ（丙）
ヒモジ　ひもじ（饑）
ヒヨウ　ひよう（瓢）
ヒヨウシ　ひようし（拍子）
ヒヨウブ　ひやうぶ（屏風）
ヒルガエス　ひるがへす（翻）
ヒルガエル　ひるがへる（翻）
ヒルガオ　ひるがほ（昼顔）
ヒロウ　ひろう（拾）
ヒロウ　ひろう（尾籠）
ヒロウド　ヒロウド（天鵞絨）
ヒロマエ　ひろまへ（廣前）
ヒワ　ひわ（鶸）
ヒワ　びは（枇杷）
ヒワ　びは（琵琶）
ヒワガ　ひはだ（檜皮）
ヒツジ　ひつじ（未）
ヒトエ　ひとへ（一重）
ヒトエニ　ひとへに（偏）
ヒトエモノ　ひとへもの（單衣）
ヒトツオ　ひとつを（一人）
ヒノエ　ひのえ（丙）
ヒモジ　ひもじ（饑）
ヒヨウ　ひよう（瓢）
ヒヨウシ　ひようし（拍子）
ヒヨウブ　びやうぶ（屏風）
ヒルガエス　ひるがへす（翻）
ヒルガエル　ひるがへる（翻）
ヒルガオ　ひるがほ（昼顔）
ヒロウ　ひろう（拾）
ヒロウ　びろう（尾籠）
ヒロウド　ヒロウド（天鵞絨）
ヒロマエ　ひろまへ（廣前）
ヒワ　ひわ（鶸）
ヒワ　びは（枇杷）
ヒワ　びは（琵琶）
ヒワガ　ひはだ（檜皮）

フの部

フアイ　ふあい（歩合）
フイゴウ　ふいごう（鞴）
フエ　ふえ（笛）
フエ　ふえ（鬱）
フエ　ふえ（笛）
フクロウ　ふくろう（梟）
フジ　ふぢ（藤）
フジ　ふぢ（若）（藤）
フジキ　ふぢき（夫食）
フタエ　ふたへ（二重）
フトイ　ふとい（太）
フトオリ　ふとおり（太織）
フトマエ　ふとまへ（太前）
フナエイ　ふなえい（船）
フナヨイ　ふなよい（船）
フナワラ　ふなわら（白）
フミニジル　ふみにじる（蹂）
フルイ　ふるい（篩）
フルマウ　ふるまふ（振舞）

くの部

クキ　くき（茎）
クズル　くづる（崩）
クツコウ　くつかう（靴）
クツデウ　くつでう（酒）
ヒヨウキン　くうきん（剛）
ヒヨウゲル　くうげる（憍）
ヒヨウソン　くうそん（高）

ホの部

ホイロ　ホイロ（焙）
ホウキ　はうき（箒）
ホウズ　はうづ（方）
ホウズ　ほうず（坊主）
ホウボウ　はうばう（方）
ホウムル　はうむる（葬）
ホウロク　はうろく（焙）
ホキ　ほき（甲）
ホキ　ほき（朴）
ホキブキ　ほきぶき（鍵）

ホシイ　ほしい（欲）
ホシイママ　ほしいまま（恣）
ホキオシミ　ほきおしみ（骨惜）
ホキオル　ほきおる（骨折）
ホノオ　ほのほ（炎）

マの部

マイコ　まいこ（迷子）
マイズル　まいづる（鶴）
マイナイ　まいない（賄）
マイナリ　まいなり（所）
マイラス　まいらす（進）
マイル　まいる（參）
マエオキ　まへおき（前置）
マガク　まがく（紛）
マヤエ　まやえ（紛）
マカナウ　まかなう（賄）
マキエ　まきえ（餌）
マキソエ　まきそへ（巻添）
マギラワシ　まぎらわし（紛）
マギラワス　まぎらわす（紛）
マジナイ　まじない（呪）
マジナウ　まじなふ（呪）
マジメ　まじめ（真面目）
マジラウ　まじらう（交）
マジリ　まじり（混）
マジリ　まじり（雜）
マジル　まじる（交）
マジワリ　まじはり（交）
マジワル　まじはる（交）
マズ　まづ（先）
マズ　まづ（先）
マズシ　まづし（貧）
マズシ　まづし（不味）
マズラカ　まづらか（丈夫）
マチアイ　まちあい（待合）
マチガウ　まちがふ（間違）
マチドオ　まちどを（待遠）
マツコウ　まつかう（真面）
マツサオ　まつさを（真青）
マツヨイ　まつよい（待宵）
マツワル　まつはる（纏）

マドイ　まどい（纏）
マドイ　まどい（惑）
マドイ　まどい（圓居）
マトウ　まとう（纏）
マドオ　まどを（圓遠）
マトワス　まとはす（纏）
マドワス　まどはす（惑）
マナジリ　まなじり（眦）
マニアイ　まにあい（間合）
マユズミ　まゆずみ（黛）
マヨイゴ　まよいご（迷兒）
マヨウ　まよふ（迷）
マヨワス　まよはす（迷）
マロウド　まろうど（賓）
マワシ　まはし（廻）
マワシモノ　まはしもの（回轉）
マワス　まはす（廻）
マワリ　まはり（廻）
マワル　まはる（廻）

ミの部

ミエ　みえ（見）
ミエイドウ　みえいどう
ミキ　みき（幹）
ミキシ　みきし（樹首）
ミキツクシ　みきつくし（澤標）
ミギワ　みぎは（汀）
ミクリズ　みくりづ（水葱）
ミゴイ　みごい（白痴）
ミサオ　みさを（操）
ミジカシ　みじかし（短）
ミズ　みづ（針孔）
ミズ　みづ（水）
ミズウミ　みづうみ（湖）
ミズキ　みづき（鑑）
ミズカラ　みづから（自）
ミズコ　みづこ（雛子）
ミズシ　みづし（御厨子）
ミズホ　みづほ（瑞）
ミヅホ　みづほ（穂）
ミソジ　みそぢ（三十）
ミソナワス　みそなはす（見行）

ミダリガワシ　みだりがはし（猥）
ミヂズレ　みちづれ（路連）
ミツクロウ　みつくろふ（見繕）
ミノウエ　みのうへ（身上）
ミバエ　みばえ（見映）
ミバエ　みばえ（實生）
ミミズ　みみず（蚯蚓）
ミミズク　みみづく（水蒐）
ミヨウガ　めうが（茗荷）
ミヨウト　めうと（夫婦）

ムの部

ムイカ　むいか（六日）
ムカイ　むかひ（向）
ムカウ　むかふ（向）
ムカウ　むかふ（迎）
ムカエ　むかへ（迎）
ムカワリ　むかはり（周期）
ムクイ　むくい（報）
ムコウキズ　むかふきず（向疵）
ムジ　むぢ（無地）
ムジナ　むじな（狢）
ムヅカシ　むづかし（煩雜）
ムヅカル　むづかる（憤）
ムヅト　むずと（無手）
ムラジ　むらじ（連）

メの部

メアワス　めあはす（妻）
メイ　めひ（姪）
メウエ　めうへ（目上）
メクワス　めくはす（眴）
メザワリ　めざはり（目障）
メシイ　めしひ（盲）
メシカカウ　めしかかふ（召抱）
メズ　めづ（愛）
メズラカ　めづらか（珍奇）
メズラシ　めづらし（珍奇）
メドオリ　めどほり（目通）
メバエ　めばえ（芽生）
メハシキ　めはしき（光麝）
メマイ　めまひ（眩暈）
メミエ　めみえ（目見）
メロウ　めろう（女郎）

モの部

モイオ　もいを（藻魚）
モウク　もうく（設）
モウス　もうす（申）
モウズ　もうづ（詣）
モウデ　もうで（詣）
モエギ　もえぎ（萌葱）
モジ　もぢ（綟）
モジズリ　もぢずり（綟摺）
モジリ　もぢり（鍬）
モジル　もぢる（捩）
モズ　もず（百舌）
モズク　もづく（水雲）
モチイル　もちゐる（用）
モチウ　もちふ（用）
モチマエ　もちまへ（持前）
モトイ　もとゐ（基）
モトオル　もとほる（回）
モトユイ　もとゆひ（元結）
モノイイ　ものいひ（物言）
モノクルオシ　ものくるほし（物狂）
モノズキ　ものずき（物好）
モミジ　もみぢ（紅葉）
モヤウ　もやふ（舫）
モヤウ　もやふ（催合）
モヨウ　もやう（模様）
モヨオス　もよほす（催）
モラウ　もらふ（貰）

ヤの部

ヤイト　やいと（灸）
ヤイバ　やいば（刃）
ヤエ　やへ（八重）
ヤオ　やほ（八百）
ヤシナイ　やしなひ（養）
ヤシナウ　やしなふ（養）
ヤジリ　やぢり（鏃）
ヤスラウ　やすらふ（休）
ヤトウ　やとふ（雇）

ヤニワ　やには（矢場）
ヤハズ　やはず（矢筈）
ヤマイ　やまひ（病）
ヤモガ　やもめ（鰥夫）
ヤヨイ　やよひ（彌生）
ヤワラ　やはら（柔）
ヤワラグ　やはらぐ（和）

ユの部

ユイイチ　ゆゐいつ（唯一）
ユイゴン　ゆゐごん（遺言）
ユイシヨ　ゆゐしよ（由緒）
ユウキ　ゆふき（結城）
ユウケ　ゆふけ（夕食）
ユウベ　ゆふべ（夕）
ユエ　ゆゑ（故）
ユエン　ゆゑん（所以）
ユオウ　ゆわう（硫黄）
ユキオレ　ゆきをれ（雪折）
ユキカウ　ゆきかふ（行交）
ユキダオレ　ゆきたふれ（行倒）
ユキチガウ　ゆきちがふ（行違）
ユクスエ　ゆくすゑ（行末）
ユズ　ゆず（柚子）
ユズエ　ゆづゑ（弓杖）
ユズカ　ゆづか（弓束）
ユズリハ　ゆづりは（譲葉）
ユヅル　ゆづる（譲遜）
ユハズ　ゆはず（弓筈）
ユミズル　ゆみづる（弓弦）

ヨの部

ヨイッパリ　よひっぱり（宵張）
ヨウ　やう（様）
ヨウカ　やうか（八日）
ヨウカン　やうかん（羊羹）
ヨウス　やうす（容子）
ヨウヤク　やうやく（漸）
ヨウヨウ　やうやう（漸）
ヨコアイ　よこあひ（横間）
ヨコタウ　よこたふ（横）
ヨコタワル　よこたはる（横）
ヨシズ　よしず（葦簾）
ヨジル　よぢる（捩）
ヨヅ　よづ（攀）
ヨソオウ　よそほふ（装）
ヨミガエル　よみがへる（蘇）
ヨミジ　よみぢ（黄泉）
ヨロイ　よろひ（鎧、甲）
ヨロズ　よろづ（萬）
ヨワ　よは（夜半）
ヨワイ　よはひ（齢、齒）
ヨワゴシ　よわごし（腰）
ヨワム　よわむ（弱）
ヨワル　よわる（弱）

リの部

リアイ　りあひ（理合）
リキユウ　りきゆう（離宮）
リツリヨウ　りつりやう（律令）
リユウ　りいう（理由）
リユウ　りゆう（龍）
リヨウ　りよう（龍）
リヨウアン　りやうあん（詠園）
リヨウガエ　りやうがへ（兩替）
リヨウシ　れふし（獵師）
リヨウジ　りやうぢ（領事）
リヨウジ　れうぢ（療治）
リヨウシン　りやうしん（良心）
リヨウチ　りやうち（領地）
リヨウブ　りやうぶ（令法）
リヨウリ　りやうり（料理）
リンズ　リンズ（綾子）
リンドウ　りんだう（龍膽）

ルの部

ルイ　るゐ（類）
ルイダイ　るゐだい（累代）
ルスイ　るすゐ（留守居）
ルロウ　るらう（流浪）

ロの部

ロジ　ろぢ（路次）
ロジ　ろぢ（路地）

ワの部

ワカトウ　わかとう（若鐵）
ワキマウ　わきまふ（辨）
ワザワイ　わざはひ（災）
ワズカ　わづか（僅）
ワズライ　わづらひ（煩）
ワズラウ　わづらふ（煩）
ワズラワシ　わづらはし（煩）
ワズラワス　わづらはす（煩）
ワチガイ　わちがひ（輪違）
ワライ　わらひ（笑）
ワラウ　わらふ（笑）
ワラジ　わらぢ（草鞋）
ワラワ　わらは（童）
ワラワ　わらは（妾）
ワラワカス　わらはかす（笑）
ワラワシ　わらはし（可笑）
ワランジ　わらんぢ（草鞋）

發音索引終

字音索引

一畫

乙 いつ。

二畫

丁 てい。ちやう。
入 にふ。ぢゅ。
力 りよく。りき。
匕 ひ。
乃 だい。ない。
了 れう。
刀 たう。
卜 ぼく。

三畫

上 じやう。ぢやう。
丸 ぐわん。
于 う。を。
刃 ぢん。
口 こう。く。
子 げつ。
下 か。げ。
久 きう。く。
亡 ぼう。まう。
兀 こつ。
夕 せき。
小 せう。
丈 ぢやう。
乞 きつ。こつ。
凡 はん。ぼん。
叉 さ。
女 ぢよ。によ。
工 こう。く。
己 き。こ。
已 い。
干 かん。
幺 えう。
巾 きん。

四畫

丐 かい。
云 うん。
亢 かう。
今 きん。こん。
仆 ふ。
公 こう。
刈 かい。
化 くわ。げ。
友 いう。
孔 こう。
尹 ゐん。
引 いん。
巴 は。
戈 くわ。
戶 こ。
中 ちゅう。
井 せい。ぢやう。
仄 そく。
介 かい。
什 ぢふ。
元 げん。ぐわん。
冗 ぢよう。
匹 ひつ。
升 ぢよう。
双（雙に同じ） 天 えう。
少 せう。
尤 いう。
屯 とん。
弔 てう。
尺 ぢやく。
幻 げん。
戈 くわ。
丑 ちう。
互 ご。
及 きふ。
仁 ぢん。にん。
仇 きう。
內 だい。ない。
凶 きよう。
勾 こう。
厄 やく。
冊 さつ。
兄 けい。きやう。
他 た。
仍 ぢよう。
丕 ひ。
且 ぢよ。そ。
丘 きう。
乏 ばう。ぼう。
仔 ぢ。
世 せい。せ。
以 い。
伸 ちゅう。
令 れい。りやう。
冉 ぜん。
回 ゐふ。
冬 とう。
充 ぢゅう。
刊 かん。
出 ぢゅつ。すゐ。
占 せん。
句 こう。く。
包 はう。
去 きよ。こ。
功 こう。
召 せう。
卯 こう。
因 ぢう。
文 ぶん。もん。
日 ぢつ。にち。
月 げつ。ぐわつ。
木 もく。ぼく。
方 はう。
斗 と。
欠 けん。
火 くわ。
爪 さう。
毛 もう。
水 すゐ。
牙 げ。
牛 ぎう。
父 ふ。ほ。
王 わう。
丘 きう。
世 せい。せ。
以 い。
伸 ちゅう。
令 れい。りやう。
冉 ぜん。
回 ゐふ。
冬 とう。
充 ぢゅう。
刊 かん。
出 ぢゅつ。すゐ。
占 せん。
句 こう。く。
包 はう。
去 きよ。こ。
功 こう。
召 せう。
卯 こう。
因 ぢう。
外 ぐわい。げ。
央 ぢう。

奴ど　尼に　巨きよ　兒きよう　光くわう
巧かう　布ふ　平へい　共きよう　再さい
幼よう　弘こう　打だ　刑けい　刻こん
汁じふ　氾はん　犯はん　匡きやう　卉き
必ひつ　斥せき　旦たん　合がふ　名めい
札さつ　朮じゅつ　末まつ　吊てう　向かう
正せい　母ぼ　氷ひよう　回くわい　圭けい
瓜くわ　瓦ぐわ　生せい　妄ばう　好かう
永えい　玄げん　玉ぎよく　夷い　奸かん
甲かふ　由いう　白はく　完くわん　守しゅ
皿べい　矛ぼう　矢し　尖せん　屹きつ
石せき　禾くわ　立りふ　式しき　弛し
朱しゅ　机き　朶だ　朽きう　曲きよく
有いう　朴ぼく　早さう　曳えい　收しう
伏ふく　伐ばつ　休きう　企き　伎ぎ
仲ちゅう　仿ほう　伉かう　价かい　仰かう
丞じよう　交かう　戊ぼう　扛かう　托たく
戒かい　戎じゅう　扞かん　帆はん　州しう
寺じ　字じ　如じよ　夙しゅく　因いん
匠しやう　冲ちゅう　兆てう　吉きつ　印いん
次じ　汚を　灰くわい　羊やう　而じ
考かう　耳じ　肌き　肋ろく　自じ
臣ごん　色しよく　臼きう　舟しう　艾がい
行かう　衣い　阡せん　位ゐ　似じ
何か　作さく　佳か　兔めん　佞ねい
佝く　佚いつ　克こく　兇だ　兵へい
卯ぼう　却きやく　吸きふ　助じよ　否ひ
吝りん　吻ふん　含がん　吼こう　呂りよ
告こく　呐とつ　劫こふ　冶や　刪さん
坑かう　坎かん　壯さう　沙さ　汪わう
沈かう　沒もつ　乳にゅう　事じ　些さ
坊ばう　夾けふ　妨ばう　沍ご　沌とん
妙めう　妖えう　孝かう　汲きふ　沃よく
妙えう　尿ねう　岐ぎ　炎きう　牢ろう
序じよ　床しやう　延えん　希き　狂きう
弄ろう　形けい　彷ほう　狄てき　狩かん
役えき　忘ぼう　恆こう　狡こう　秀しう
忸じく　忡ちゅう　快くわい　系けい　究きう
成せい　我が　戒かい　良りやう　肘ちう
抄せう　把は　抃べん　虬きう　言げん
投とう　抑よく　抒じよ　豕し　貝ばい
抗かう　攻こう　收しう　走そう　迅じん
改かい　旱かん　旰かん　邑いふ　邦ほう
更かう　杆かん　呆はう　酉いう　防ばう
杜と　杖じやう　杏きやう　並へい　亞あ
步ほ　汞こう　求きう　乖くわい　垂すい
呼が　和くわ　囹れい　奄えん　奔ほん
呷こつ　呪じゅ　咀そ　命めい　咀えつ
味み　呢じ　周しう　呼こ　呱こ
咎きう　咆はう　哺ほ　哭こく　哥こう
哲てつ　哨しう　哩り　哭こく　哥こう
哲てつ　哨しう　哩り　哭こく　哥こう
哲てつ　哨しう　哩り

喻 巷 封 屋 帥 派 洞 活 胎 胸 苟 胛 胃 胄
客 港 宦 屋 屋 派 洋 洛 胎 胸 胸 胛 胃 胄
駿 脩 型 咽 咸 哄 恬 恰 恒 恪 恩 恍 恢 恤 洒 洲 洪
姪 姦 契 垣 垢 奏 奠 奎 型 品 咸 咨 哄 厚 朔 勇 勁 勉 勃 冠 刻
脩 姦 奕 姦 奏 奎 型 品 咸 咨 哄 厚 朔 勇 勁 勉 勃 冠 刻
巷 封 宦 要 烟 威 奠 奎 型 咽 咸 咨 哄 厚 朔 勇 勁 勉 勃 冠 刻
帥 屋 帥 派 洋 洛 胎 胸 胸 胛 胃 胄 洒 洲 洪 洽

抽 拍 拖 拓 承 拗 拐 戾 怪 怖 怩 怖 恰 恍 恍 恰 恒 恪 恩 恍 恢 恤 洒 洲 洪 洽
拍 拍 拖 拓 承 拗 拐 戾 怪 怖 怩 怖 恰 恍 恍 恰 恒 恪 恩 恍 恢 恤 洒 洲 洪 洽
拍 拖 拓 承 拗 拐 戾 怪 怖 怩 怖 恰 恍 恍 恰 恒 恪 恩 恍 恢 恤 洒 洲 洪 洽
抵 抛 招 拐 戾 怪 怖 怩 怖 恰 恍 恍 恰 恒 恪 恩 恍 恢 恤 洒 洲 洪 洽
征 狎 爬 炎 沓 洋 沼 泄 泛 泣 武 枉 杲 枚 明 易 昊 放 政 斧
乾 玩 物 炊 狎 沓 洋 沼 泄 泛 泣 武 枉 杲 枚 明 易 昊 放 政 斧
乾 玩 物 炊 狎 沓 洋 沼 泄 泛 泣 武 枉 杲 枚 明 易 昊 放 政 斧
空 直 狀 爭 炙 治 法 沮 況 沿 欣 杼 杖 果 昌 旻 旁
空 直 狀 爭 炙 治 法 沮 況 沿 欣 杼 杖 果 昌 旻 旁

俘 侶 俑 俗 係 亮 信 俊 囚 囝 軋 近 迎 彬 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎
俘 侶 俑 俗 係 亮 信 俊 囚 囝 軋 近 迎 彬 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎
冒 便 倆 俠 俠 倦 倍 俄 冑 冑 金 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎 迎

| | | |

粉 累 絆 粘 篤 管 窓 移 研 畔 眷 辣 略 當 瓠 理 猛
習 細 紲 粒 笙 笨 章 寇 窒 票 眺 着 阜 痍 異 瓶 球 猪
脚 羞 終 糊 粕 符 竟 雅 裨 硅 眼 俊 痔 唯 産 瑣 球 拳

卸 酗 郭 逝 逢 逝 這 逐 軟 貫 豚 訪 訛 袋 蛇 莊 舵 甜
釵 酡 郵 逝 造 逝 逼 途 逃 貨 貪 訟 訝 妾 衒 處 塞 柯
釣 閉 部 逢 逞 這 透 逕 責 貶 訥 訣 袈 術 垈 完 軸

偶 偉 覺 勦 勤 動 偶 彗 彫 徘 徙 雙 徙 梱 梅 梯 條 梗 梢 梅 梨 梁 朝 晦
偶 偉 剪 勤 匐 動 偶 彗 彫 徘 徙 雙 徙 梱 械 梅 梢 梗 條 梯 梢 梅 梁 梨 朝 晦

骨 帳 崎 崔 崇 崩 崩 寂 嬖 堅 娑 婉 婬 堂 域 塊 堆 培 唱 唯 啓 勤 匐 動 唯
康 帷 崖 崇 崩 崩 寂 嬖 娑 婉 婬 執 域 塊 堆 培 圈 啖 啓 勤 匐 動 唯
庵 帶 巽 崇 崩 屏 寇 娼 嫉 婉 婬 執 悠 惰 惜 悪 悔 悔 悔 悔 悔 悔 悔 悔
旅 旋 敏 敔 敔 敔 捷 掘 拾 掠 捲 推 悠 惰 惜 悪 悔 悔 悔 悔 悔 悔 悔 悔
旋 敏 敔 敔 敔 捷 掘 拾 掠 捲 推 悠 惰 惜 悪 悔 悔 悔 悔 悔 悔 悔 悔 悔
畫 舟 救 敔 敔 敔 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃 掃
猝 烽 烹 淹 添 淵 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼
猪 爽 焉 添 淵 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼
猖 將 牧 烟 淵 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

十一畫

貿 須 雅 雁 閔 閏 量 週 軸 跌 超 貿 貪 詐 部 瓜
翊 項 雄 集 隍 陽 門 都 逸 陂 跛 貳 貽 貯 註 詠
馮 覃 雇 隆 階 閑 酬 遷 陀 跚 越 賞 詔 債 傭
雇 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴
雇 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴 嚴

十一畫（十二畫）

搾 搖 搔 搜 搬 搭 搢 搖 搔 搬 搭 搢 搖 搔 搬 搭
想 感 愧 愛 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾
愁 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾 愾
愾

暢 撲 慤 慣 慘 慨 慷 慢 漫 慵 慣 慣 慣

陽 摸 慇 慣 慘 慨 慷 慢 慣 慢 幔 幕 幡 廟 寧 寥 寞 寨 寢 寞 寨 寨 寨

餌 詩 鞦 詩 鬼 鬼 鬼

盈たろ。
嗑かん。
暇かん。
臨かん。
蓋ふろ。
意よく。
焉せん。
鹿せん。
頤かん。
頤かん。
韓かん。
顆かん。
順くわ。
鞠きく。
鬼く。

燈がん。
遷くわく。
環くわん。
鬟くわん。
鍛たん。
閑げき。
隱いんん。
關くわつ。
鍛たん。
鍛たん。
鍛たん

盜 瘡 臘 燈 濘 巖 潔 濟 濃 濤 濱 橋 槳 腰 檢 檀 櫛 斂 櫻 欄 繁 繩 繡 總 縱 繕 鞭 縹 縷 縫 蹠 蹟 蹕 蹙 蹌 蹣 蹤 蹦 蹩 蹬 蹲 蹴 蹶 躁 躄 躍 躋 躊 躍 躍 躍

鈍 ぶん。
鈍 どん。
鈍 ぶん。
鈍 どん。
鈍 ぶん。
鈍 どん。

字音索引

鬱 ウツ
鬱 ウツ
鬱 ウツ

31
319イ

077706-000-5

31-319イ

辞林

金沢　庄三郎／編

M40. 4

DAC-1093